
R.A.G Rebellion Against God

Rick.

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

R . A . G Rebellion Against God

【著者名】

R i c k .

N5757S

【作者名】

R i c k .

【あらすじ】

この作品には暴力表現、残酷描写、ゴミ都合主義、オマージュ、パロディ、厨二、半端な銃知識が含まれます。苦手な方はご注意ください。

今の世界とは少し違う日本で、テロリストと戦う人の男達の話、の予定。

001 - ある被害者の回想1（前書き）

この作品はフィクションです。実在する人物・地名・団体・事件等とは一切関係ありません。

001 - ある被害者の回想1

2010年2月25日。取調室の大川。

「で、君はその電話の相手に唆されて、こんなものを作っていた、間違いないかい？」

男が尋ねる。

「はい、おおむねその通りです」

私はそれに応じる。

「それで、だ。もう一度確認するよ」

男は眼鏡を掛けなおし、私に質問を投げかけた。

「その電話の相手の声は、どんな風に聞こえたんだい？」

唆されたなんて嘘だ。あれは天啓だった。

「はい、彼の声はまるで

あの時私は確かに、神の声を聞いた。

case・02 -ある被害者の回想-

遠くから銃声が聞こえる。部下であり友人でもある、それらの怒号と一緒に。

「くそっ、ガサ入れなんて聞いてねえぞ」

「馬鹿野郎！ココ入ったときからいつこうとは想定してただろうが！」

「とにかく俺らだけでも逃げるしか・・・」

「裏口も固められたんだぞー。どうしてんだ！」

銃声が止み、外から部屋のドアが勢いよく開かれた。

大川は思い返す。

“じつにこんなことになってしまったのかと。

ごく普通の家庭に生まれ、ごく普通に生きてきた。そしてごく普通の人生を望んでいた。

都会に出て就職し、安定した生活を手に入れる。

休日には遊ぶために時間を使い、好きなものを買い、眠る。要は楽しく暮らせればそれで良かつたのだ。

すべては順調だった。

工場勤務の内定を貰った。地元に比べると格段に賃金が高く、定時に帰宅できる。作業は機械の点検と、ライン管理。難しいことは何一つ無い。

1年も経つと、業務を一通り覚え、ほとんどの仕事をこなせるようになっていた。

そして、一本の電話があった。

上層部の役員から、昇進を含めた仕事先の変更通知。

大川の地元にある古い金属工場を再利用し、精密部品を作り、組み立てる。今までの仕事と相違なかつた。仕事の話を手土産に地元に戻り、久方ぶりの後輩たちと晩酌を交わす。

「へー、大川さんも出世したなあ。大したものだ」

横谷は素直に尊敬の眼差しを向け、タバコをふかしている。

「マジパねえな大川さん！俺らもあやかりてえ」

軽口を叩く高居。酒のペースが早い。かなりアルコールが回つているようだ。

「いやね、わざわざ二つに戻つてきたのは、もう一つ理由があるんだ」

「理由？ へマして飛ばされちゃつたんスか？」

武田は首を傾げる。こいつは酒が入つていなくても話を聞かない。

大川の居た工場は元々人手が足りなかつたため、地方に回す人員が不足していた。

足りない人員分の仕事は簡単なものだからバイト感覚でやってもらつて構わない、と上から聞かされていた。

そこで仕事探し真っ最中の後輩に声をかけ、人員不足を何とかしようという算段である。

「マジすか！？雇つてくれんすか！？」

「ほんと大川さんは頼りになりますわあ」

「あ、足りない分は小野と山上と・・・あと長谷川にも声かけまし
ょうーきっと飛びつきますよ！」

3人はそれぞれに電話を掛け、全員からすぐさま了承の返事が返っ
てくる。

ヘリウム並のノリで人員不足は解消された。

田の前で口論が起きている。

高居が吼えた。

「おい！大川さん今まで手出すんじゃねえ！..大川さんはなあ！」

眼下の男は心底退屈そうな表情で、

「あーあー、そういうのは後で別のヤツが聞くから。俺に感情ぶつ
けんなよ鬱陶しい」

「ざけんなてめえ！ぶつ飛ばして・・・」

高居が殴りかかる。彼は確かボクシングをやっていた。素早い動作で放たれた拳は、間違いなく男の顔面に喰らいつく。筈だった。男はそれを首を捻るだけで難なく避け、懐からベレッタを取り出す。

銃声が聞こえた。

「わりいな。俺には未来が見えてんだわ」

大川は思い返す。

引き返すべきだったのだろうか。

工場の再稼動から1ヶ月後、追加人員を含めた23人は順調に仕事をこなしていた。ラインの管理と、施設の見回り。部品の組み立て、それに正面入り口と裏口の警備。

最初こそ退屈そうだったが、上層部に直接仕事の文句を言つた1人がいなくなつてからは、皆黙々と作業していた。

機械が何の部品を作り、それを組み上げると何になるのか。皆正しく理解していた。

でも誰も文句を言わなかつた。友人である大川の言葉を信じていたからだ。

大川が電話の声を信じたように。

大川の仕事。それは工場全体の管理と、

「大川さん・・・」れやばいんじや・・・

「大丈夫だ。きちんと手続きを取つて生産していると聞いている」

「聞いているって・・・直接証明できるもの無いとマジでまずいんじゃないっスか?」

「・・・大丈夫だ。何も問題ない」

嘘をつく事。この2つ。

眼の前では恐らく氣絶している横谷と、足から血を流して倒れてい
る高居。

そして黒い丈長の「一トを羽織つた小柄な男。

「大川だな」

「ああ」

「眼工座つてンぞ。大丈夫かオマエ」

「覚悟はしていたよ」

「ややかしい。それじゃあやさしく、工場

すまない。

離れて暮らす夫の仕事、ついでに離れて暮らす夫のことだった。

002 - ある被害者の回想2

2月24日、21時38分。

「終わつたぞ」

「ヤス君、お疲れ様」

ヤスと呼ばれた男はシガーケースから煙草を取り出し火を点けた。

「つーかジヨニーよお」

ヤスは不満そうに話す。

「わざわざ俺まで出る必要なかつたンじやねえの?ひよこと武信だけでジオにかなつたら」

「ひよこ君は制圧担当だし、武信君があんなになつちやつたからね。直毅君でもよかつたんだけど、彼は・・・ね?」

「ツチ」

軽く舌打ちをして、さつきまでの出来事を振り返る。

市街地を1台のトラックが走り抜ける。

トラックには運転手が一人、荷台は会議室のようになつており、テーブルを囲むようにして5人の男が座っていた。

「作戦内容をもう一度確認するよ」

この場の指揮官であるジヨニーは、ずれた眼鏡をなおしつつ喋り始めた。

「今回の作戦は、銃を密造してゐる工場の制圧、従業員の保護だ」

「またお巡りさん」つゝだもんな。いい加減『本筋』の仕事を貰いたいね」

男のうちの一人、ひよこが悪態をつく。

「1人でも殺したらまずいんだろ?」

髪を適当に切りそろえた金髪の男、直毅が口を挟む。

「駄目だ。恐らく従業員は密造してゐるなんて思つていらないだらう、そこまで重い罪にもならない」

長身で切れ目の優輝がそれに応じた。

車は市街地を抜け、海に面した工場地帯へと入る。

「・・・でも発砲に関しては制限されてないよね。そのあたりはどうなの?」

「さすがに従業員全員が丸腰つてわけじゃねえんだろ?。そこで

俺らの出番なんだろ」

茶髪のショートカット、童顔の武信の問いに、ひよこが答えた。

「そういうことだ。まずひよこ君が陽動のために正面から進入、武信君は裏口の確保の後、1課と2課の応援を待つて従業員の武装解除、後に保護だね」

「相手が発砲してたら？」

「させないのが一番だけど、もしされちゃつたら黙らせんくらいはやつても構わない」

「撃つていいのに殺しちゃダメってか。そりゃ俺には無理だわな」

直毅が笑う。

「もう着く。車は手前で待機させッから2人とも降りる」

ヤスが到着を知らせ、作戦が開始される。

「さて行くか。一応気をつけろよ武信」

ひよこがギターケースを肩に担ぎ、車から降りる。

「・・・お互いに」

続けて武信も降り、走り出した。

「ひよー」、聞こえてるか?」「

優輝がインカムの動作確認も含めた通信を飛ばした。

「バッヂリ聞こえるけど少し黙って。今サビなんだよ

「お前またインカムで音楽聴きやがって!遊びじゃねえんだぞ

「くせ、武信はどうだ、聞こえるか?」

「うーうーうああああああああ

「テメーもかよクソ野郎共……おい直毅、ここつらのインカムいじつたのお前だろ……」

優輝が声を荒げる。

「……なんだって?よく聞こえねえ

インカムに音楽プレーヤーを仕込んだ張本人は絶賛電波垂れ流し中である。

「・・・ジヨニー俺帰るわ

「「めん」めん。悪かったよ

「「めん」めん。悪かったよ

悪びれる様子も無く答えられたが、この場は流す。あまり時間が無い。

「それじゃあひよこ君、レーダーお願ひ

「あいよ。ちょい待つててな・・・」

ひょいは田を閉じ、正面の建物に意識を集中させた。

見かごとモノ、かごとも無い延物が、たが頭の口に魚田がへんジが流れ込んでくる。ドアが開く様子、機械が稼動している様子、配管から滴り落ちる水の一滴に至るまで。もちろん人間の動きも例外ではない。

「正面に1人、中に・・・20人。うち3人は1部屋に固まってる、あとはお仕事中かな・・・んで裏に1人」

「調査報告より1人少ないね。終わりかい？」

終わり。休みがなんかかな。
もう行っていいかい?」

行こうが力不足を咎めせよ」

現在時刻21時23分。15分で片付けてくれ。3.2.

「行つてやまーす」

21時24分。

工場の正面玄関の見張り当番、山上は困惑していた。

「……なんだって？」

「いや、だから道をお尋ねしたいんですよ……迷っちゃって……」

「

市街地の方向から突然でかいアタッシュケースを持ったボサボサの黒い長髪の男がやってきたのだ。どう見ても浮浪者にしか見えない。そもそも道に迷うにしても限度がある。このあたりには倉庫くらいしかない。普通は海が見えたあたりで引き返すはずだ。

「で、あんたはどこに向かつてんだ？」

「大川製鉄所つてところ探してるんですけどね」

「やつや二二の事だ。んで何の用だ」

「工場見学を……」

「おもむろに入らうとすんじゃねえよ。何の用だつて聞いてんだ」

「いやね、この荷物をお届けにあがりまして」

「中には何が入ってる」

「・・・見たいですか？」

男が尋ねる。

「ああず」に見たいね。だからちと開けろ」

「実はこれね、やうなんですよ」

「は？」

「だから、やうなんです」

「からかってんのかテメー！」

「真面目です。やうなんです！――」

男の目は真剣そのものである。

「 もひい、はやく開けろ」

山上は強引に荷物を奪つた。いや、奪おうとした。

「わかんねえ野郎だなお前

瞬間、山上は目の前が暗くなつた。

「だから分隊支援火器だつてんだらうが」
SAW

ギター・ケースで思い切り殴られた男は、床に伸びていた。

「んじゃまあ、始めるかね」

ひよこはギター・ケースを開け、中身を取り出す。M249MINI M1。軽機関銃である。

ひよこはMINIMIを構え動作確認を済ませると、懐に手を伸ばした。

「さてと」

「みなさーん！ガサ入れですよーーー！」

懐から取り出したガバメントで監視カメラをぶち抜き、続けざまに入り口に向かつてMINIMIを乱射した。

21時27分、工場内。

「襲撃だ！」

「なんなんだよ！警察のガサ入れか！？」

「ガサ入れにしてもやりすぎだらあいつ！」

「手空いてる奴は武器持つて逃げる！…」

大混乱だった。なにせ入り口から男がマシンガンを乱射しながら近づいてきているのである。

大川が見あたらないので、現場責任者代理の武田と小野が指揮を執り、避難を促していた。

銃声とともに声が聞こえる。じつに近づいてきている。

「いひなつたら俺等も迎え撃つしか…・・・

残った2人は意を決して侵入者を迎へ撃つとしたが、

「オラア！わざわざ弾当てないよつに氣遣つてやつてんだ！射線に出でくなテメエ等ア！…」

入り口側の通路には既にマシンガン乱射魔が辿り着いていた。

「銃声が近づいてくるウウウウッ！…！」

「いいから裏口に逃げるんだよオオオオオツ！……！」

同時刻、裏口。

男は携帯を耳にあて、

「正面に襲撃！？お祭りなんだけビデマジで……」

「んでお前は正面のヤツの仲間かあ？」

「いや……あの……」

「答えねえと脳天ブチ抜くぞ」

武信は今、頭にトカレフを押し付けられている。

進入に失敗し、見張りに捕まつた拳句、近い将来人質にジョブチエンジするだろう。

「……仲間です」

「よしわかった。まず銃出せや」

武信は懐からベレッタを取り出し、床に置く。同時に内ポケットから紙切れが舞い、裏口の見張り、長谷部の田の前に落ちた。

「なんだこれ、写真？」

「あ、あの・・・それは・・・」

「いいからお前は手あげてろー・ブツ殺すぞーーー！」

「『めんなさい』撃たないでーーー！」

「なんだこの汚ねえ写真」

男は写真を拾い上げる。

写真はところどころ擦り切れて、色褪せていた。

被写体は武信と、長い黒髪の女性。柔軟な笑みを浮かべている。

「・・・」

「ああわかった、お前の彼女だろこれ。大事そつに持つてやがって」

「・・・返せ」

今までの態度からは想像出来ない声が発せられる。

「ああ？」

「それを返せ」

武信の顔がまるみるうちに怒りの色に染め上げられていく。男は歪んだ笑顔をその顔に貼り付け、写真を地面に落とし、片足を振り上げた。

「お前自分の立場わかってるのかあーーー？」

言い終ると同時に、裏口の警備をしていた憐れな男、長谷川は壁に叩きつけられた。

21時29分、裏口に待機していたトラック。

インカムから飛行機のエンジンのような叫び声が漏れている。

「まざい、あいつ殺されるぞ！」

会話を聞いていた優輝が慌てて外に飛び出す。

一 僕たちも
確保の準備だ

「あいよ、ああ聴いてえ」

ジ田一と直毅が立ち上がり、到着した応援に指示を飛ばす。

「返せって言つてんだが、おまえがおまえの手でやつておるやつだよ……」

「...」

武信は長谷川の上に馬乗りになり、顔面を拳で殴打していた。長谷部は最初の一撃で気絶していたが、そんなことはお構い無しに武信は長谷川を殴り続ける。

「おい武信！」

自分を呼ぶ声がする。武信は本能の赴くまま、左に振り返る。それと同時に、優輝の放った右フックが、武信の顔面に突き刺さった。武信は空中で見事なトリプルアクセルを決め、そのまま重力に身を任せ、地面に倒れ動かなくなつた。

21時33分。裏口通路。

「おい武田、全員ついてきてるか？」

「来てるよ小野。あ、でも高居と横谷、それに大川さんが居ない

「あいつらは勝手に逃げてるだろ。俺等はまず自分の心配しようぜ

「せうだね。外出たらみんなバラバラに逃げよー！」

「オーケー。行くぞ！」

外に出た瞬間、フラッシュライトの光と、多数の銃口に迎えられた。

同時刻、裏口。

「オーケージャねえよ。全員動くな」

外に待機していた優輝とヤスは、裏口から出てきた連中をまとめて縛り上げ、警察に引き渡した。

「おかしいな。3人足りない」

「オイオイ。トチつたかひよこオ？」

ヤスはひよこに問いかける。

「なーんか最初の3人がずっと管理室から出でこないんだよねえ。
ヤス頼める?」

「ツチ、高くつぐわ」

ヤスは裏口から管理室へと向かった。

以上が事の成り行きである。

「こいつから俺等は警察の真似事をせらうれンだつつの。つまんねえ」

煙草をふかしながら悪態をつく。

「仕方なこと。定期的にこいつの仕事もしないと信用無くなっちゃうからね」

「ツたく、ガキの使いじや・・・ん?」

「うう・・・」

ふと田線を下にやると、先程氣絶させた大川が田を見ましていた。

「オマエなかなかガツツあンじやねえか」

「こんな・・・こんなはずじやなかつたんだ・・・」

大川は呟く。

「自業自得、ツてヤツだなあ。一生かけて後悔すると良い」

「絶対に失敗しないと思っていた・・・彼の言葉はそれ程に・・・」

「彼?」

ヤスが飛びついた。

「オマエ、なんでここの工場長やつてんだ？」

「上からの指示さ・・・」

「業務内容は知らされなかつたンか」

「いつもにひいてから電話で聞かれたよ・・・上層部のうちの人らしいが」

大川は意識が完全に回復したようで、はつきりと話し始めた。

「オマエはこんな危険な橋渡らなきやならねエ状況だつたンかよ」

「違う。それなりに満足できる生活を送つていたさ。でも電話で仕事の内容を聞いた時、何故だかやらなきやいけない、やって当然だと思つたんだ」

「なるほどねエ」

ヤスは少し考える素振りを見せ、

「お~オマエ、その電話の時、声以外の妙な『音』聞かなかつたか? なんでもいい」

「『音』・・・すまない、今はよく思い出せないな

「そろかい。まあ聞く時間はこれからたつぱりあるからなあ。連れ
てけ」

いつの間にか部屋に居た連中に指示を出す。

この集団は基本的に指示待ち人間だ。使いやすくて助かる。

「……ジョニー、聞いてたか？」

「ああ、単に変な使命感が芽生えただけかもしれないけど、調べてみる価値はあるね」

「……なにが”神の啓示”だ、糞つたれのテロリスト共が」

ヤスが思考しようとする

「ヤスー。撤収だ。車回してくれ」

ひよこがギター・ケースにMINI-MIを仕舞いつつ部屋に入つてくるという器用な真似をしていた。

「たまにはテメエが運転しろ。俺は疲れてんだ」

「俺だつて疲れてるや。これ結構重いんだぞ？武信はダメなんか？」

ひよこはギター・ケースを肩に担ぐと、ヤスと共に裏口へと歩き始める。

「アイツは今頃車ン中で鼻詰してるだろうよ」

「まーたやらかしたかあいつ……」

「まあまあ、俺が代わりに運転してやつからうよ」

直毅がインカム越しに伝わる程懐しそうな声で言った。

「お前は人轢きそだだからダメだ」

「オマエは海に落ちそだだから却下」

「ぐぎぎ」

結局優輝が運転を任せられ、6人は帰路についた。

case · 02 end

意識を取り戻す。体中が痛い。じつせり、まだ生きているようだ。

非常ベルの音。悲鳴。足音。爆発音。

暑い。いや、熱い。ここはどこだったか。

熱源から遠ざかるため、痛みを訴える体を無視し、壁まで這いつづる。

背中を壁に預ける。ここはひとつと視力が回復した。

すぐ正面には、人間だったであろうものの、千切れた部品が

田覚まし時計の鳴る前に田が覚めるのは、ソリに来てからまだ毎日だった。

何か嫌な夢を見ていた気がしたが、とりあえずはソリのベッドのせにしておいた。

隊舎の備え付けのベッドは寝心地が悪すぎる。明らかに固い。そして無駄に大きい。

自主的に起床すると脳の活性化は早いもので、カーテンを開けて冷蔵庫を漁る頃にはもうすっかり田が覚めていた。

「メシ作らうにも材料が無いな。パンでいいや」

戸棚から食パンを2枚取り出し、ソーヒーと一緒に頬張る。ジャムはつけない主義だ。

さつむと朝食を済ませ、顔を洗い、クローゼットに適当に掛けたる服を取り、着替える。

着替えを済ませながら改めて思う。部屋が広い。広すぎる。

16畳一間にキッキンと風呂、更に完全個室。隊舎とはまさにばかりで、そのへんの旅館の一室のようだった。

元々6畳一間で生活していた俺にとっては、いきなりオーバースペックな部屋を『えられても対処に困る。物が遠すぎていちいち歩かなければならぬのだ。面倒な事この上ない。

そんな贅沢な悩みを抱えつつ、部屋を後にした。

先日の大川製鉄所制圧の報告会までまだ時間があるし、ゆっくり歩いていいつ。

隊舎から出て朝陽を浴びる。少し肌寒いが、雲ひとつ無い青空が広がっている。

相変わらず天気はまずいけど天気はいいな。うん、いい朝だ、感動的だな。

ここから歩いて15分程の場所に武装警察本部がある。

そこらへんに生える高層商社ビルと見た目変わりなく、実際中もほとんど変わりない。

表向きは財政管理の仕事だけか？そのあたり曖昧だ。

実際に財政管理の仕事もしているらしいが、部署が違うのでそのあたりは疎い。後でヤスに聞いた。

まあそんなわけでビジネスマンよろしく鞄を抱えて出勤中だ。中身は銃だけど。

政府直轄の治安維持機関、武装警察隊。俺はその第7課所属。

組織自体は元々、立て籠もり発生の際の突入班や銃撃事件等の際に狩り出される、らしい。

でも最近は荒事が発生することがほぼ無いため、俺が来た頃には既に便利屋さんみたいになっていた。

昨日みたいに出動することは稀で、普段は本部の電気の玉を替えた

り、

社内のパソコンの点検やら修理やらをしている。決して事務員ではない。

まあ出動したらしたで怪我人出ちゃうし、平和なら何よりだ。あんまり動きたくないし。

ちなみに7課は武装警察の中でも特殊技能を持つた者が集められ、より危険な仕事、主にテロ集団殲滅に回されるため誰も入りたがらない。まあ、簡単には入れないわけだが。

その分待遇がいい。おかげで遊ぶ金には困ったためしがない。

そもそも何故ただの学生だった俺がこんな物騒な機関にいるのか。

3年前に事件があった。その事件に巻き込まれた俺は、ジョニーに再会し、この仕事に就いた。

それだけである。まあ、細かく色々とあったのだが、そのあたりは思い出したくないので省略だ。

ビルに着き、ビルの名前を再確認する。

「東京財務管理局」、と書いてある。

15階建てのビルで、普通の仕事は10階まで行っているらしい。
俺が向かうのは14階だ。

14階に田代の会議室があるが、その前に武器保管室へと足を向ける。

世界各国の様々な武器が並べられたその部屋は、厳重な管理をされ

るわけでもなく、

ドアが開け放しになっていた。無用心すぎる。鍵はともかくドア
へりこ閉めてほしい。

しばらく部屋で武器を眺める。

何故だか心が落ち着く。俺の密かな楽しみの一つだった。
気がつくと報告会の時刻ギリギリだった。我ながらアホだ。

駆け足で会議室へ向かい、ドアを開ける。

会議室とは言つても、ほほこの部屋が7課の拠点となつている。
隊員それぞれのデスクがあり、部屋前面には馬鹿でかい液晶画面、
その前に長机が1つ。

そしてなんだかバナナの匂いがする。

「おせえぞひよこよ」

直毅が煽つてくる。普段遅刻してくる割に、自分が早いと調子がいいよつた。

「まあ時間ピッタリだし遅くはないだろ。普段遅れるヤツが良べ言
う

言つておぐが優輝、お前も遅刻魔だぞ。

「あれ、武信は？」といった？

「ああ、アイツなら入院中だ。鼻と体の調整だとよ」

ヤスがパソコンを操作しながらバタフライナイフをぐるぐる回す。危なつかしい。

「おおそい」

「ああぐんま、帰つてたのか」

路地裏のチンピラにスーツを着せたような風貌のぐんまに軽く挨拶をする。

ん、なんだこれ。

見慣れない黄色いパッケージのタバコを渡される。

「キヤあプレンアーカーク」

「バナナの匂いは」れか。・・・結構つまいなこれ」

「みいやげ」

「わつこいやブラジルの方行つてたんだつたか。『苦労せん』

「ああ？ああ」

ぐんまは日本語こそ適当だが、13カ国語を使い分ける秀才だ。

そのためよく通訳として使われているようである。昨日の制圧のときは飛行機の中か。

「みんな揃つたみたいだね。それじゃあまず重要な事から話そつか

俺が会話を終えたのを見計らい、ジョニーが眼鏡を中指で押し上げる。

「まずはこれを見てくれ。押収したうちの一丁だ」

「クリンコフかあ。いかにもな物作ってやがる」

AKS-74U。中東のテロリストが使っていた事で不名誉な名称のついている銃だ。

「問題なのは銃の種類じゃないんだ。グリップを見てくれ」

ジョニーが写真を拡大し、銃を利き手で握る部分が大きく映し出される。

ダーツボード上に、十字架が描かれたマーク。その刻印が埋め込まれていた。

これは最近流行しているマークで、Tシャツからライターまで色々なものにプリントされている。

そしてこのマークを好んで使用する犯罪者集団に、俺達は覚えがあった。

「おー、こいつぁ・・・」

「結論から言つと、アタリを引いた」

会議室の空気が変わる。

俺達の本当の仕事が始まろうとしている。

「大川から『音』についての証言が得られたよ」

本当の仕事、それは

「上層部の一人が、どうやら『円卓の騎士』の一員らしい」

『円卓の騎士』と呼ばれるテロリスト達を、そいつらの本当の目的
を

「では、詳細を説明するよ」

一つ残らず潰す事。

「まあ正直に云つて云はば、今話したとおりだ

ジョニーの話に、俺は真っ先に思いついた疑問を口にする。

「今日は『声』じゃなく『声』なのがえ？」

「うん。後半は僕が直接話を聞いたからね。確かにそう語っていたよ

「なるほどねエ。連中もなかなかやらかしてくれンじやねえの

ヤスは感心したように大げさに頷く。
こういうあからさまな動作をするとき、ヤスは全く感心していない。
要は、何もわかつてないってことだ。
ぐんまもその動作の意味に気づいたようで、

「しげったか

「あ？言つ様になつたじやねエかぐんま。その口もつと横に開く
うにしてやるうかア？」

ナイフをちらつかせている。

「すいませんでした

謝る時は流暢な日本語だな」
・・・

「声で人間の意思を操ると考へると、電話の相手は俺等と同じ人種だな」

優輝が結論づけ、

「恐らくね。そしてその電話の主は、声帯が特殊なんだろ？」「

そしてジョニーが優輝の発言を裏付ける。

世の中にはいくつかの区分がある。

人種の違い、性別の違い、国籍の違い、宗教・思想の違い。挙げればキリがない。

その中で、最も大きいとされる分け方。

能力を持つものと、持たないものだ。

能力といつても、ちょっと普通の人より何かに長けているというだけだ。

例えばヤスはちょっとだけ先の『未来』が見えてるし、俺は『見えないもの』が見える。それだけ。

俺に言わせれば、こんなもんより生まれ持った才能のがでかいと思うがね。

「大川製鉄所の大元は、日本中央財閥。第一次大戦後に急成長を遂げた財閥だね」

「日財かよ！？そんなとこが犯罪者匿つてんのお！？」

直毅が驚くのも当然だった。

日本中央財閥と言えば、重工業で国内大手の財閥であり、ここが潰れればこの国も潰れると言われる程である。

それだけ下請けの企業も多くなる。特定は難しそうだ。

「うん。 そこ下請け企業の一つに、騎士がいる」

「迅速な発見ありがたいもんだねー」

「んで、俺等はなんだ、潰していくやいいのか」

ヤスはいつの間にかナイフをしまい、真面目に話を聞いていた。

「殺しちゃってええの一？」

ぐんまは物騒なことを口にする。

直毅はといふと、黙々とヨウロのマガジンに弾をこめていた。
こいつのが物騒だった。

「さて、指令を聞こうかジマーニー」

優輝の瞳に決意の光が射す。

「デスクワークだ」

「…………は？」

ジョニー以外が全員、間抜けな声を出す。

「テスクワークだ」

大事なことなので一回書いたよつだ。

「……」場でその様な冗談はいらないぞ」

優輝が人でも殺す勢いでジヨニーを見ていた。無理もない。

「いやいや、『めん』『めん』。僕は嘘をつくのが苦手だ」

「その割にじつから嘘なのかわからねえぞ」

「クリンコフが押収されたあたりからだ」

「そこからー?」

思わず突っ込む。

「いやほんとにすまない。そろそろやめないと殺されてしまいそうだ」

気づくと直毅が銃口をジョニーに向け、ヤスがナイフを投げる寸前だった。

「真面目な話、田財ともなると調べるのに時間がかかるんだ。少し時間がかかるが、4課が血眼になつて調べている。動くのはその後だね」

円卓の騎士の構成は、各企業や個人のトップ集団等といふわかりやすいものではないらしい。

そのあたりを調べただけ、4課には頭が下がる。『苦労なことだ。

「だから君達は持ち場に戻つて、指令を待つてくれ」

「結局『スクワード』じゃねえか・・・ああやだやだ、煙草吸つてくれる」

直毅はガソリンオイルを注すのを止め、部屋から出る。

「さて資金調達でもすつかなア」

ヤスはパソコンと向き合つた。

「俺は武信の見舞いでも行くか・・・おいぐんま、顔出しに行くぞ
ジヨニーはどうするのだろう。
2人して部屋から出て行く。ここから仕事する気のだな。
にね」

相変わらず仕事熱心だな。

俺もとりあえず病院に向かつてしまふ。仕事は・・・空いた時間でいいや。

7課は基本的に、自由人の集まりだった。

3月1日、19時15分。7課会議室。非通知電話。

『今日の演出は気に入つてもういたかな?』

「・・・君が電話の主だね?」

ジニアが電話の相手に問い合わせる。

『質問に質問で返すのは感心出来ないな。まあ、そう呼んで貢つても差し支えな』

「何故いの番号を知つている?・君達の目的は何なんだい?」

『まあやう無いものもあるま』

電話の主は溜息をつき、

『とつあえずその壱に仕舞つておる銃で、自分の頭を撃ち抜いてみてはどうかな?』

ジニアの『瓶』を聞くと、懐からリボルバーを取り出し、自

分の口にかみに押し付けた。

case · 03 - 道化師は踊る -

「黙囃だ。絶対ヤスが勝つ」

始めから出す手を見透かしている者にとって、その勝負は勝負とは言えない。

「じゃあ面倒だけどハイアンドローでもしない?」

隠しきれない笑みを浮かべたひよこが呟く。

「ひよこが勝つだろ。くだらん事に能力使うなよ」

次の一手が確実にわかる賭け事は、イカサマと変わりない。

「もつポーカー やりつけ」

直毅は既にトランプを配り始めていた。

「誰が配ってもお前が勝つだろ?が

圧倒的な運を持ち合わせている者は、いかなる勝負も茶番に見えた。この空間では、あらゆる勝負事はアンフェアなのである。

「じゃあどすんの?俺が行けばええの?」

ぐんまが支度を始める。

「なら俺が行け」

「仕方ねエな俺が行つてやンよ」

「いじつていじつて。俺が行つてやつかひよお」

「いじよ。ここは俺が行くからみんな待つてよ」

「・・・じゃあ僕

「「「「「」」」」」」

「ええ・・・僕まだ何

「いいから行けよ武信

「・・・はこ・・・」

現在この部屋には、煙草が一本も無い。

7課ではジョニーと武信以外が全員煙草を吸い、普段は会議室が雀荘のように白く煙っている。

そんな7課会議室の空気が澄み切つている事自体が異常であり、この異常事態を解決すべく1人の勇者が立ち上がりなければならなかつた。

何故煙草の買出しでここまで遠のけるのか。まず銘柄が面倒なのである。

優輝と直毅はマルボロソフト、ひよこはハイライト、ぐんまはパーラメント。ここまでいい。

ヤスは缶入りのピース。これが厄介で、近辺のコンビニで取り扱つているところが無い。

これを買ひに車を街中の煙草屋まで走らせないとならないのだが、

「あ、俺はハンバーアー弁当とコーヒーを頼む」

「俺も弁当でいい。ああコーヒーも頼んだ」

「俺あハンバーガーな。ポテトのもろつけ。あとコーヒーな
俺もハンバーガー食いたいわ。シェイクはバーーラでいいよ。溶け
てたら怒るけど」

「たあこ焼き食いたい」

この様に昼飯もついでに買わされるのである。
最早煙草を買づまうがついでになつている気がしなくもない。

そんなわけで剣の代わりに金を持ち、馬車の代わりに自動車に乗り、
勇者武信はお使いクエストをこなすために会議室を後にした。

「・・・まつたく、昼食くらい食堂で済ませればいいんじやないか
な?」

会話の一部始終を聞いていたらしージョニーが、入れ替わりに入室
する。

「食堂のメシとか食つてらんねえよ。なんで社内食堂なのにあんな
にたけえの?」

「メニューにサンドウイッチって書いてあるのが気にいらなによ。
サンドイッチって書けばいいだろ素直にねえ」

「米が硬いよおホヒヒ」

「難癖つけるの好きだね君達は・・・煙草だつて下の自販機にあるじゃないか」

「可愛い子には旅をさせひつて言つだらう？」

「意味が違うよ」

「まあ、武信が買出しに行くのは最早様式美だ。仕方ない」

「苦労は買つほどの価値があつてこそなんだけビ・・・あ、そうだ」

ジヨニーは思い出したように手を叩き、

「今日の坂上^{さかがみとじあき}利章議員の街頭演説会、テロリストに狙われるそりだ」

「そんな軽いノリで言つ内容ではないだひ」

「（この）時勢に街頭演説なんかやるのもんならタダじゃ済まないだ
るわー」

「前総理のアホがやらかしたかンな。お陰でひつけは尻拭いだ」

テロリスト達が演説中の政治家を襲撃する事件が割と頻繁に起つていてる。

理由は様々だが、最近は相対する思想を持つた派閥が傭兵を雇い襲わせているようだ。

過激派のやる事はテロリストと相違ない。

そういうった他派閥の牽制の意味を込めて、現在の主流は立会演説会。

苦肉の策である。

坂上議員は、歪んでしまったこの国を立て直す民主再建派の筆頭だ。変革を望む派閥にとっては田の上のたんこぶであり、狙われるのは必然であった。

更に彼は派手な演出を好むため、個人演説で済むところをわざわざ街頭演説に切り替えた。

「まあまあ。とにかく彼が安全に演説を終えるために、今回僕達は雇われた」

「雇われた? 今回は上からの指令じゃないわけか」

「うん。坂上議員直々の御指名だ。それにもちろん理由があつてね」

ジョニーがリモコンを操作すると、液晶画面に文章が映し出される。

「脅迫文か。奇襲じゃないだけ良心的かもね。えーっと……」

ひよこは長つたらしい文章を簡潔に訳した。

「わざわざ的になりにしゃしゃり出て来るようなら射殺するので、大人しく演説中止してねこの糞野郎が、つてどこかい

「そこまで書いてないがな。まあ、じつ寧に射殺すると書くあたり底が知れる」

優輝が率直な感想を述べる。

「まあブラフだろ。大方爆弾あたり投げ込んでドカンじゃねえのか

「そこので僕達の出番だ。あらゆる危険を防止もしくは排除し、彼の剣となる」

「盾は下ッ端の役目だもんなあ。さて、支度すつかねエ」

各々が出動の準備を進めていくと、

「・・・ただいま」

大量の袋を抱えた武信が帰ってきた。
ジョニーは顔色ひとつ変えずに告げる。

「お帰り武信君。悪いけどその荷物抱えて駐車場にリターンだ」

「おめえもなんだかんだパシってんじやねえか！」

「まあ流石にアワレだからなあ。持つてやンよ」

そう言いつとヤスは自分の畳倉と煙草の入った袋だけを掴み、会議室を出た。

「俺等は必要な物積み込むかねえ。行こか」

「どうせ俺は今回も待機なんだろう？わかってても泣けるぜ」

「ホヒヒー」

ひよこと直毅、ぐんまがそれに続く。

「僕はたいして荷物無いからね。半分持つよ」

「……ありがと。ところで何処に行くの？」

「仕事だ。鍵閉めておくから先に行つて」

残り2人の退室を確認し、優輝が溜息をついた。

「片付けもしないでわざと行くんだもんなあ」

「トランプくじすぐ片付くだらう」

そういえば、さつき直毅がポーカーのために手札を配っていた。

「……まあこんなもんか」

優輝の手札は2ペア。初手にしては上出来だ。

「こいつらは……大方想像通り、か」

ひよ」と武信が1ペア、ぐんまは役無し。

「こいつの運も大概だな」

ヤスの手札はスペードの10から13までと、ハートのクイーン。

ロイヤルストレートフラッシュも狙えなくはない手札だ。

残りは直毅の手札だが、結果は言つまでもなかつた。

「イカサマ無しだとしたら、やっぱり流石だよ直毅」

優輝は会議室に施錠し、エレベーターへ向かつた。

直毅の手札には、エース4枚に挟まれ、満面の笑みを浮かべたピエロが一人。

007 - 道化師は踊る2

本部から車で20分程度のところにある公園。

周辺の道は既に交通規制が敷かれ、演台前の広場には既に多くの人が押し寄せている。

現在この公園には警察の他、市民に紛れて武装警察隊の1課と2課、7課が配置されていた。

「武装警察隊7課です。本日は宜しくお願いします」

ジョニーが一礼し、皆もそれに倣う。

「つむ。坂上だ。今日は宜しく頼むよ」

灰色のスーツを身に纏つた小太りの中年男、坂上が礼に応じた。両脇にがつしりとした体格のSPを立たせ、ふんぞり返っている。

「君達は私の身の安全だけ考えて動いてくれ。何かあつたら大事だ」

「・・・一つ質問いいでしようか」

武信が自信なさげに手を挙げる。

「何だね」

「・・・7課は基本的に外から依頼を受けないんですが・・・そもそも知ってる人あまり居ないし・・・どうして直接依頼をくれたんでしょう・・・か・・・」

坂上の偉そうな態度に萎縮しているようだ。

「船木総理から直接の推薦があつたんだよ。聞いていいかね?」

「ああ・・・船木の爺ちゃんから・・・」

「せつとき車で話しただろうが。ちゃんと聞け馬鹿者」

優輝が叱責する。武信は基本的に3回くらい言わないと話を聞かない。

つい先程も昼飯のポテトが1つしかない事に腹を立てた直毅から怒られたばかりである。

「しかし君達随分と若いな。本当に大丈夫なのかね」

坂上が首を傾げるのも無理はなかつた。

7課メンバーはジョニーが23歳、他が全員20歳なのである。更に全員、線が細い。坂上が両脇に抱えているSPPと比べても頼りないよう見える。

「問題ありません。身の安全は約束します」

優輝がはつきりと叫げる。

シユコー

音がする。

「ならいいんだがね。あとスースの上にトレーナーハートとせ、そろ暑いのではないか」

ショウ一

それは、この場に似つかわしくない。

「防弾服も兼ねてますんで。暑いけど着けてないと、撃たれたら結構痛いですからね。あ、普通の人だと衝撃で骨にビードルが刺さるのですが、俺等能力者なので基本なんともないっす」

ひよこが営業スマイル全開で語る。

ショウ一

まるで、獲物を狙う獣のような。

「それならいい。それで、だ。さつきからその

坂上が純粋な疑問を口にしようとした。

ショウ一

7課一同は、その音の正体を、後ろを振り返ることで確認した。

「ショウ一俺のことですかショウ一この空気はショウ一排気が多くてショウ一」

「なんでガスマスク着けてんだ馬鹿野郎…さつさと外せ…」

ひよこが直毅からガスマスクを引つべがした。

「ガスマスクは良い。初期型も好きだが、やはりキヤースターは左に付いていた方が」

「ンな事聞いてねエよ」

「悪いねえおっちゃん。コイツああたまおつかしいからホヒヒ

ぐんまが下卑た笑いを浮かべる。

「・・・本当に問題無いのかね・・・?」

「・・・後でよく聞かせておきます」

ジョニーが申し訳なさそうに頭をたれた。

「もう一度言うが、何かあつたらただでは済まないからな。おつと、
スponサーから電話のようだ。失礼するよ」

坂上はUVAを引き連れて、演説力一へと戻っていく。

「君達は眞面目に仕事する気があるのかい?」

ジョニーがズレた眼鏡を中指で押し上げる。

「・・・すいません」

「だつて暇なんだもんよお。ちょっとした遊び心も必要だろっ。」

「こりないつての。仕事なんだぞ」

ひよーじが至極真ひざな意見を口にするが、

「オマエも音楽聞きながらくつづいたじやねえか」

「ヤスだつて携帯いじつてただろー！見てたんだぞ俺は

「ホツヒビ」

「はあ・・・こりないつて・・・」

優輝が今日何回目かわからない溜息をついた。

「これが公園周辺の地図だ」

一同はトライックに戻り、配置を確認していく。

「こじが今いる公園。で、こじが広場だね。広場は直毅君とぐんま君、武信君に任せるとよ」

「・・・怪しい行動してる人がいたら、確保すればいいの？」

「派手に暴れてえけどまあ、船木のジジイに推薦されてつからな。下手な真似はしねえ」

現総理の船木とは、メンバー全員知り合いだった。

第7課は武装警察隊の中でも特殊任務向けに、総理が直々にメンバーを選出し作られている。

「周辺2km以内に狙撃できそうなビルは5つ。そのうち一番高いビルに優輝君とヤス君」

「ヤス、観測は任せやんか」

「言わねエでもな。オマエヒヤミスンなよ優輝」

ヤスと優輝は狙撃手対策のためにライフルを抱えている。
他のメンバーはアタッシュケースに仕込んだMP5。ケースに仕舞つた状態で撃てるよう細工がしてある。

「まあ物騒なもの使わない状況作るのが一番だからねえ。精々がんばるよ」

ひよこは1課と共に周辺ビルの警戒。

残る2課は私服に着替え、公園およびその周囲の警戒である。

「武信、ちゃんと聞いてた？」

「・・・えっと、確保すればいいんでしょ？」

「不審な行動をとった奴の確保だ。一言一句聞き逃すな」

「僕は残つて広場の監視、指揮を執るよ。じゃあ皆、持ち場につこうか」

「「「了解」」」

それぞれトラックを降り、指定された場所へと向かっていく。

3月1日。12時55分。公園横トラック。

「全員指定位置についたかい？」

ジョニーが確認する。

「OKH。いい眺めだ」

ヤスが屋上から双眼鏡を覗きながら呟く。

「風も無い。狙撃するには絶好だな」

優輝が即座に通信を返した。

「・・・Jっちは異常ないけど、人が多いねやつぱり・・・」

開始5分前ともなると、公園広場は既に人の洪水が押し寄せている。

「問題なしだ・・・やつベ煙草逆につけちまた!!」

「1人かあくぼ」

ぐんまが不審人物を取り押さえたようだ。

「ぐるま君、報告を

「爆弾ふたあつ」

「爆弾?」

「きれえなねえちやんだよおホヒヒ

「ナンパしてんじやねえよ糞がー俺も混ぜろーー。」

直毅が抗議の声をあげた。

「・・・真面目にやれ。」（）からほお前の頭がよく見える

優輝の声にかなりの濃度で怒りが配合されている。ちなみに残りはやさしさではなく侮蔑だ。

「すいませんでした」

「一時には演説が始まるからね。ほんと頼むよ

「まあリラックスして!」。うちは一つのビルは問題ないよ・・・。
ん?」

公園から一一番近いホテルの前で、ひよこは何かを見つけたようだ。

「ひよこ君、何かあったのかい?」

「ちょっと様子見てくる」

12時56分。公園付近のホテル前。

黒いタキシードを着た男がホテルに入ろうとしている。手には大きめのチョロのケースを持ち、急いでいるように見えた。そのケースの中身がチョロであり、男が楽団員であれば、ひょこは見逃していただろう。

「すいませーん。ちょっとといいでですか？」

「何だ君は。私は急いでいる」

男が応じる。

「演説はじまりますもんね。間に合わなかつたら大変だ」

「そうだな。じゃあな」

「まあまあ。時間を聞こいつと思いまして」

「12時3分前だ。もういいか」

「あと一つだけよろしいですかね？」

「・・・何だ」

男が訝しげにひよこを眺める。

「ハミントンM700。いいですよねー。ライフルはボルトアクションに限る」

「・・・何を言つてるんだ?」

「独り言ですよ。ああせつだ、そのケース、開けてみてよろしいですか? 楽器好きなんですよ」

「ふざけるな。私はもう行くぞ」

男がホテルに入ろうとするのを強引に引き止める。
周囲を確認すると、既に何人かの警官がこちらに向かって立っているのが
だった。

「あと懐のワルサーPPKSですが、ちゃんと整備しましょうね。
銃に裏切られますよ?」

「くわつ・・・・・」

男は懐からサイレンサーのついたワルサーを取り出し、迷い無く発砲する。

ひよこはそれを1発左腕で受け、男に詰め寄る。
次弾が発射されることはなかつた。

「弾詰まりだと!?」

「だから整備してやれつてんだよ。そりゃ銃も機嫌損ねるわ」

ひよこが顎に右ストレートを放つと、男の体から力が抜けた。

「馬鹿野郎を一人確保。やつぱりスナイパー居るみたいだわ」

「良くやつたよひよこ君。他のジルはどうだい？」

「まだかかりそう。ちょっと急がないとまずいね。ヤス、頼む」

「おオよ」

13時00分。屋上。

ヤスは双眼鏡で、優輝はライフルについたスコープで、
それぞれが近辺のビルを警戒していた。

「ヤスどうだ。見えるか？」

「演説が始まつたみたいだなア。まだ問題はねえが」

ヤスは広場からビルに視線を戻す。

「さあて、見つけたぜエ。10時方向、最上階の奥から2番田に1人だ」

「了解……つと、居たな」

ビルの窓が四角く切り取られ、そこから銃口が覗いていた。

優輝は PSG -1 を構えなおすと、

「殺すには角度が足りないな。スマートじゃないが」

発砲する。窓から覗く銃口に向けて。

発射された弾は、まるで吸い寄せられるよう銃口に直撃した。

「ヒュウ、流石だなあ優輝。シモヘイへも真ツ青だ」

「スコープ覗いてるけどな。ここから10時の方向のビルの10階に2課を突入させろ」

「了解だ。2人とも引き続き警戒を頼むよ」

13時02分。公園広場脇。

公衆トイレのすぐ横で、直毅は煙草を吸っていた。

このあたりは広場に收まりきらなかつた人たちがぽつぽつと立つているだけである。

「演説なんてテレビ通して聞きやいいのにじ吉沢さんだなあ」

「なあ、あんたもそう思わねえか?」

直毅は誰にでもなく話しかける。

「え？ すみません、もう一度言つていただけますか」

右斜め前の男がそれに反応した。

「あー、いや悪いな。聞き入つてる奴に吐くセリフじゃなかつたわ」

「はい」

男は気にも留めていない様子だ。

「んー？」

直毅は額に人差し指を当て考え込み、思いついたように指を鳴らす。

「あーわかった。ピンときた。お前確保な。なんか怪しいわ」

「え？」

男が左を向くと同時に、2人の私服警官に取り押さえられる。

「ちょ、なんなんですかいきなり！？」

「お前聞き入つてたの、演説じゃなくて通信かなんかだろ。あと独り言のつもりだつたんだけどなあ。演説まともに聞いてたらいちいち知らん奴の言葉に反応しねえよな？ まあ全部勘だからよ。悪いな」

「出鱈田だ・・・」

男は力なくそう咳くと、大人しく運行されていった。

後の調べでわかつた事だが、この男はポケットに手榴弾を入れており、舞台に投げこむタイミングを見計らつていたとの事だった。

13時05分。屋上。

「優輝、ヤス。そこから2時方向のビルの上から3番目、左から・・・
・4番目」

「見えてンぜえ。優輝」

「応よ」

優輝はライフルを構える男の額に向けて銃弾を放つ。

男と田が合つた気がした。

直後窓ガラスにヒビが入り、血が付着する。

「命中だ。2課より1課の方が近いな。処理を頼む」

優輝は言い終わると、再びスコープを覗き込む。

「これで周辺は安泰かアひよこ?」

ヤスが肩を鳴らし、凝り固まつた腰を捻る。ついでに周囲をもう一度見渡す。

公園の反対側に高いビルが建っている以外、周りには何も無い。いい景色だ。

その一際高いビルの屋上で、何かが光に反射した。

「うふ。ここの一帯は問題なし。俺は戻つてぐんま達のサポートを」

瞬間、ヤスの頭にイメージが過ぎる。
このままの姿勢だと、優輝は確実に、

「ツチ、間に合わねえ！！」

ヤスは突然、横にいる優輝を蹴り飛ばした。

13時07分。

いきなり横つ腹を蹴られた優輝は、体をくの字に曲げてのたうつ。

「お前つ・・・いきなり何を」

「転がれ！！」

優輝は状況を理解し横に転がり、屋上入り口の陰に隠れる。
元いた場所を見ると、コンクリートが2箇所抉れていた。

「ケツにいやがつた！糞ツタレガア！！」

ヤスは PSG -1を持ち、立つて構える。

しかし発砲を許す間も無く何発も弾が飛んでくる。

「踊つてやるから付き合えよ！！ホラ当ててみろつてンだよオ！！」

！」

ヤスは狙撃手を狙いつつライフルを構え、銃弾を避ける。発砲はない。

ヤスを狙つた弾の全てが地面に突き刺さり、その度にコンクリート片が舞い上がった。

「優輝、そっちの使え！」

「OK、持ちこたえてくれよ」

「問題ねエよ。当たる方が難しい」

そう言いながらヤスは弾を次々と避ける。

ヤスには未来が見えている。いかなる速度で弾を撃ち出したとしても、それらの撃ち出されるタイミングから当たる場所までわかる者にとって避けることは造作も無かつた。

13時09分。

「重たい思いして持つてきた甲斐があつたもんだな」

優輝は一際大きなライフルを構える。M82、バレットライフル。それを軽々と持ち上げ、陰から飛び出した。

「誤射はしない。俺が狙うのは、お前の銃だ」

公園から1・5km離れたこのビルの、さらに1km離れたビル

から狙撃しているようだ。

そのビルの屋上に狙撃手を発見する。スコープを覗き、構える。手は震えない。呼吸を止める必要すらない程に。

「スナイパーについては、一撃で仕留めてこそだ

放たれた弾丸は、狙撃手のライフルと、ついでに頭と右半身を引き裂いた。

13時10分。同じく屋上。

「ジョニー、恐らく最後のスナイパーを仕留めた。後ろのビルに潜んでいたみたいだ」

「お疲れ様。もう演説は終わるけど、まだ気を抜いたらダメだよ

「わあつてンよ。ああ疲れた」

ヤスはうんざりした様に煙草に火を点け、双眼鏡を覗きなおす。

「なあヤス、最後に殺したスナイパーの事だが

「あア、妙だな」

「あそこまで離れていると、普通の人間なら正確な射撃はほぼ不可

能だ

広場からあのビルまで、3km近く離れている。

通常のライフルならば有効射程はせいぜい1km。それ以上は精度が落ちる。

余程特殊なものを使わない限り、あの位置から広場を狙撃するのは無理があつた。

「まあ今考えても答へ出ねえかん。警戒してよ」

「ああ・・・

何か引っかかった。

優輝はこれまでの狙撃手が居たポイントを思い返す。

広場から最も近い2箇所に狙撃手は無し。他2箇所に1人ずつ。そして明らかに遠い場所に1人。

その引っかかりを残したまま、優輝は演説が終わるのを見届けていた。

13時15分。公園広場内。

会場では拍手が巻き起こっている。

坂上議員は演説を終え、得意満面で拍手を浴びていた。

「・・・最後まで異常無し、だった

「」おっちはも

「あのおっちゃん、台本読んだだけでどや顔しちゃがつてよお

「まあまあ直毅君。残りの3人は大丈夫そうかい?」

「問題ねエよ

「異常は見当たらないな

「異常無ーし。走り続きだつたから疲れたわあ

「よし、みんな本当にお疲れ様。これで・・・」

「待つて」

武信の声色が変わる。

「坂上の様子がおかしい」

坂上はいつになつても壇上から降りる」とは無かつた。拍手もまばらになつた頃、彼は再びマイクを握る。

「この国は腐敗してしまつた。取り返しの付かない程に」

会場からざよめきが起る。

「国民が悪いと決め付ける政府、政府が悪いと言ひ張る国民」

坂上は続ける。

「滑稽だとは思わないか。政治家は見え透いた嘘を吐き、それを見抜けない一部の愚かな国民が、騙されているだけだといふのに」

「おいおい、トチ狂つたかおつさん」

直毅が苦笑いを浮かべる程、先程の彼の発言と正反対のこととを口走る。

既に報道のカメラは止められていた。規制が入ったのだろうか。

「政治家は汚れきつている。特定企業と癒着し、国民に害を及ぼしている」

「国民ははどうだ。自らに降りかかる審を受けながら、懸命に生きている。その一方で、悪事を働きながら、甘い蜜を吸う者もいる。善良な者が損をして、悪に染まつた者ばかり得する。私はそれが許せない」

「政治家やつてるヤツが何言つてんだ。偽善者かよ」

「しかし、ここの発言の変わりよつはおかしい。ジョニー」

「調べてるよ。ただ見た限り、特別変わつたことは無いよつだ」

変わつたことは無い。ジョニーはそう言つた。

しかし、目に見えて変わつたことが、ただ一つだけあつた。会場に居る誰もが、その言葉を黙つて聞いていたのだ。

「更に能力者という存在が、それに拍車をかけている

「人は生まれながらにして不平等だ。身分の差、育つ環境の差、色々ある」

「今までそれを努力で埋めてきた。しかし、能力の有無、優劣により、その機会は失われた。働くのに有利な能力を持つた者が優先され、他は二の次だ」

「当然だろ。能力者はそれなりに代償払つてんだ」

ひよこが冷たく言い放つ。能力者には誰でもなることが出来る。
ただし能力の覚醒には、人それぞれに条件があった。

「そのような不平等な状況にも負けず、我慢して必死に今を生きる
者達よ。もう苦労を抱え込んで生きる必要は無い」

「今こそ、革命の時だ。武器を持ち、この印を掲げ、虐げられてきた環境を一変しようではないか」

坂上が紙を掲げる。

その紙には、ダーツボードに、十字架の描かれたマークが印刷されていた。

「こいつ、騎士の一人か！？」

ひよこが坂上の元へ走り出す。

しかし人の波を搔き分けて進むには、少々の時間を要する。

「まさか・・・坂上議員が・・・」

ジョニーは驚いたように呟く。

「ただのアナキストとは、考え難いな」

何か考え込む優輝。

「なあになあ」「」

状況についていけないぐんま。

「何か・・・何かおかしい・・・」

武信は思考する。

公開演説。脅迫。緊急招集。あからさまな不審人物。
遠くのスナイパー。手の平返しの演説。スポンサー。

(あのおっさん、台本読んだだけでどや顔しあがつてよお)

直毅の言葉を思い返す。

彼は、演説の時、ビニを向いて話していた?

「やじろの演説が革命への第一歩となることを、私は願つてこむ

「以上だ。私は、舞台から退場させてもいい」といつつ

坂上は、前を見てはつきりと話していた。
その耳につけた、インカムを頼りにして。

「……そうだ」

武信が顔を上げる。

「あいつは騎士じゃない！！優輝！！坂上の手を

「

言つが、もう遅い。

会場の静寂が、悲鳴へと変わった。

同日、19時12分。公園近くのホテルの一室。

テレビからニュースが流れれる。

『今日の午後1時25分、公開演説中だった坂上利章議員が、演説

終了と同時に

拳銃で自殺を図りました。坂上議員は頭部を銃弾が貫通しており、病院に搬送中の救急車内で死亡が確認され 』

アナウンサーが言い終わる前に、テレビを消す。

「演説は大成功でしたね、坂上議員」

男は薄く笑いながら、坂上から聞き出した番号に電話をかけた。

『 今日の演出は気に入つてもらえたかな?』

「完全に、してやられたね」

ジョニーは中指で眼鏡をなおす。

坂上が拳銃で血の頭を撃ち抜いてから、7課会議室には敗北ムードが漂っていた。

「俺があと少し早く止めてりゃなー・・・」

ひよいが悔しそうに唸る。

「シコパーまああれはシコパーなかなかシコパー予測できなこだろ
シコパー」

「直毅、ガスマスクは外そつな・・・」

優輝の声にも元気が無い。

「お、おう・・・」

「ツチ、辛氣臭えンだよオマジ。パーパー貰つてへN」

ヤスが会議室を出ると、

「おれもおれもお

ぐこまもそれに続く。

「・・・今僕達に出来るのは、今日の『吉野』かな?」

武信が真っ直ぐな瞳でジョニーを見つめる。

「わうだね。起きた事を悔やむより、どうしてそれが起つたかを考えるべきだ」

「まあ、坂上も操られてたと考えるのが妥当だわ」

「そうだな。武信が言っていたよつて、インカムから声を聞いてその指示通りに動いた、ところでの間違いないだろ?」

優輝が結論づけた。

「まだよくわかってねえ事あるみなあ?はじめから白痴すんなあ、わざわざ俺等を呼ぶ必要も無え」

「・・・わいなんだけど」

武信が何か言おうとした直後、電話が鳴った。
ジョニーが受話器を取り

「もしもし。」
「・・・

『今日の演出は気に入つてもうひえたかな?』

「・・・君が電話の主だね？」

ジニアーが電話の相手に問いかける。

『質問に質問で返すのは感心出来ないな。まあ、やつ孚ふんで貰つても差し支えな』

『何故この番号を知つてこる？君達の目的は何なんだ？』

『まあやつ無いじともあるまい』

電話の主は溜息をついた、

『とつあえずその壱に仕舞つてこいる銃で、自分の頭を撃ち抜いてみてよ』

ジニアーはその『壱』を聞くと、懐からリボルバーを取り出し、自分で止めかみに押し付けた。

会議室に、銃声が響き渡った。

銃声は2つ。一つはジニアーのもの。
そしてもう一つは、

「なあになあにい。頭なんか撃つたら部屋が汚れやつま」

ぐんまのモーゼルM1916。その銃口は、ジョニーが引き金を引く直前、ジョニーの銃に向けられたものだった。

「……つはあ、はあ、ぐんま君、助かつたよ……」

「我不需要謝謝。ホヒヒー」

取つて付けたような中国語を放ち、ぐんまは自分の席へと戻る。

「オイオイやらかしてくれンなあ。愉しいね全く」

ヤスも着席し、7課全員が揃う。

「スピーカーに、切り替えるよ……」

額に脂汗を浮かべたジョニーがスイッチを押す。

『今のはほんの挨拶がわりや。悪く思わないでくれ』

男の声だつた。30代前半か、それよりもっと若いか。

『全体通話に切り替えたようだな。まあその方が懸命だらう。電話とはいえ、一対一だとさすがに効きすぎる』

「おしゃべりな野郎だなテメエ。ウチに何の用だあ？」

『君達は無駄話が嫌いかな？ 友好を深める事も重要だと思つが』

「……僕が話すよ。皆は少しだけ静かにしてて」

「……」じんばんわ、電話の主さん

武信が電話の主に応じる。

『ふむ、話好きがいてくれて助かるよ。暇を持て余していくね』

「……電話の主さんは、今田の坂上事件を計画して実行した人、で合ってるのかな?」

『その通りだ。あと電話の主では長からう。木戸、とでも呼んでくれ』

「……それじゃあ木戸さん。率直に聞くけど、あなたの能力はあまり、融通が利かないよね?」

『ふむ。なぜそう思うかね』

「だつて、会場のみんなは黙つて話を聞いていたけど、僕達は坂上の異変に気づいたから。あなたはさつき、全体通話に切り替えたほうが懸命だ、と言つたよね? 一対一では効きすぎるとも言つた。それはつまり、大人数に対しては能力の効果が薄れるつて事」

『面白い。続けてくれ』

一区切り置き、武信は続ける。

「それを裏付ける根拠はもう一つ。先に行つた15分間の演説。本来の目的だけで言つなら、あの演説は不必要だと思う。なら、何故15分も関係ない話を続けたのか。それはきっと、公園に居る人た

ちに、話を聞く、話を受け入れてもらうという土壤作りのため。だからあんなアナーキーな演説も皆黙つて聞いていたし、はじめから聞いていなかつた僕達は、異変に気がついた。尤も、ちょっとだけ間に合わなかつたけれど

『たいした洞察力だ。君は頭がいい』

木戸は感心した様子で、

『確かにその通りだ。私の声は、多人数、そして聞く気がない者にとつては効果が薄れる。更に今回は電話で、更に坂上を通してだからな。余計なフィルターを通す分、気を遣わなければならなかつた。一対多数でも確実な効果を得られるかという実験さ』

「一対一なら絶対言うこと聞くッてか。詐欺師にでもなりやあいい」

ヤスが悪態を吐く。

「・・・これは推測ですが、声を発した者が死んだりすると、声の効果は・・・」

『切れる。その実験も兼ねての演説だった』

「だからあの場で暴動が起きなかつたわけか・・・それと、一つわからぬ事があります」

『何だ？機嫌がいいから答えよつ』

「・・・僕達を呼んだ訳です。実験だけなら、わざわざ邪魔者を呼んだりしない』

『君達の勧誘のためだ。スナイパー他を配置したのもそれが理由だ。彼等は元々坂上ではなく、坂上の指示で君達を狙っていた。それら全てを排除した君達には、こちら側につく資格がある。この電話もそれが目的だ』

『君達が我々に協力してくれれば、この国を立て直せる。どうだね。我々と一緒に、この国を変えていく気はないか』

「本氣で言つてこらのなら、まずはやり方を改めるべきだつたねー」

「こいつは詐欺師じゃねえな。政治家やれよお前。つーか実は政治家か?』

「・・・じめんなさい。犯罪者に加担することは出来ません」

『だらう、な。はじめからわかつていたとは言え、君達は実に、消すのが勿体無い。協力する姿勢が無いのであれば、脅威となる存在は排除しなければなるまい』

「宣戦布告か。いちいちしても、お前を捕まえて色々聞きたいところだ」

『近々、私はもっと大きな事件を起こす。君達が止められるか、今から楽しみだ』

「・・・止めます。今度は、絶対に」

『なかなか有意義な時間になつたよ。それではよひながら、反逆者達』

通話は、そこで終わった。

「よくやった武信。ジョニー、逆探知は？」

「公園前のホテルからみたいだ。既に2課が向かってる」

「まあ、もぬけの殻だろうなア」

ヤスが煙草に火を点ける。

「なんにせよ、忙しくなりそうだ」

「円卓の騎士壊滅のチャンスだ。ぬかるなよ」

「まあ、動かれる前に尻尾つかみたいねー」

「いい加減二一〇には飽き飽きだぜえ。そろそろ俺の出番だりつこなあ」

「お祭りなんだじょホッヒー」

「・・・ぐんまつて緊張感無いよね」

「さて、僕達は今情報を探りに、色々洗あつか

時刻は既に21時を回っているが、7課の夜は終わらない。

case · 03 end

演説から、既に3日経つた。

木戸が居たらしきホテルは案の定もぬけの殻で、手がかりは何一つ無かつた。

そこからは人海戦術で、演説を聞きに来た連中を片っ端から取調べ、日財に関する情報も再び洗い直し、今に至る。

1ヶ月程前から、日財の社員である木戸優一という男が会社に出勤しなくなっていること。

木戸の口ぶりから、今日の夜日本に帰国する総理が狙われる可能性が高いこと。

この2点以外、木戸に関する情報はほとんど得られていない。

坂上の関係者によると、演説の1週間程前からよく電話をかけるようになつたらしいが、電話の内容は聞いていないし、不審な行動も無かつたとの事だった。

捕まえた傭兵達を尋問しても、皆が皆「坂上に雇われた」と証言するだけであった。

結局、木戸の後手に回るしかない。そんな現状に苛立ちを覚える。

そして今現在、俺の前には、信じ難い光景が広がっていた。

「へやー、どうなつてんだよこいつらー死なないぞーなんなんだよー。」

ひよこが走りながら狼狽している。

「知るかよ。今は生き残ることだけ考えンゾ」

ヤスは振り返りながらベレッタを乱射し、再び走る。

「無駄弾使つなよお？ 頭だけ狙つとけ」

直毅は弾の無くなつたショットガンを捨て、AKを取り出した。

「なあにこいつらあ。足はあやいんだけビヨーー？」

「いいから走れぐんまー追いつかれたら終わりだぞーー。」

4人は市街地をどうにか抜け、都心部へと続く工業地帯へと入った。
「行き止まりかあ。こいつあ終わつたかもなあ」

「お、いマジかよお。逃げられんねえだろお」

路地裏に追い詰められた4人は、異形の者と対峙する。
そいつらは体の大部分が腐敗し、目が血走り、皆一様に口を開けながら襲い掛かってくる。

「見ぬ、あそこに階段あるぞー！」

ひよこの指差す先に、別の建物へと通じているらしき階段があつた。
しかしそこに行くには3M近いフェンスを越えなければならぬ。
一人では無理な高さだ。

「つけ、俺の肩使いな

直毅はフェンスに両手をつき、3人を登らせる。

「おー直毅はどうすんだよーー?」

「俺は・・・そりだなあ、やれるだけやつてみつか

既に弾はじかれた直毅は、路地にあつた木材を手に取り構える。

「馬鹿一緒にいくぞーはやくこっち来いー。」

「時間稼ぎにでもなりやいいんだ。おー、いいから先行け」

「はあややくよひみこお

ヤスヒグンまが階段に走り出す。

「くそつ・・・死ぬなよ、直毅

「お互いなあ

「さてえ、テメエ等の脳天力チ割る準備は整つたぜえ

もう一度木材を握りなおすと、直毅は異形の者の群れの中へと消え

ていった。

「ありや直毅死ンだなあ」

「手向けだ。取つときな」

ヤスは振り返ると、群れの中へと手榴弾を投げ込む。手榴弾は群れの一部と、瀕死の状態で持ちこたえていた直毅とを、フェンスごと吹き飛ばした。

「馬鹿野郎フェンス壊すなヤス！」

「ゾンビきたるー！ヤスはあやくうーーー！」

「つらたえンな。走りゃ間に合ひ

「お前等俺にトドメ刺したのはスルーかよお・・・・

「一ラを買いに下の階まで行き、会議室に戻ってきたらこの有様だ。会議室のスクリーンには、ゾンビを蹴散らしながら進んでいく3人の男女が映し出されている。

俺は無言でゲーム機に近づき、その電源を消した。

「あ、おい優輝！今ボス戦直前だったのに！――」

「オマエ見てわかるねえのか。相当地いとこだつたらおが」

「俺の犠牲・・・」

「なあにやつてるう」

名々が俺に向かつて抗議の声を上げている。
しかしこの場では俺のとつた行動を咎める権利のある者は居ない筈だ。

「いじりの台詞だ。今は仕事中で、ついでに言つと警戒状態だ。仕事中にゲームを堂々とやる奴が居るか」

こいつら足りないのは忍耐仕事意識焦り危機感真面目さ誠実さ、そして何より緊張感が足りない。

「でも実際俺等はお留守番なんだしよ。もつ調べることも無いしな」

「適度な?休憩も?必要なんじゃ?ないんですかねえ?」

個人的にものすぐ直毅を殴りたかったが、ここは我慢する。

「確かに休憩は大事だ。だがゲームを始めるのは休憩とは言えないだろう」

「ちげえんだよ」

「ん、どうしたぐんま」

「養つてたんだよ」

「何をだ」

「判断力」

最早言い訳にすらなつていない。

「よしわかつた。判断力が養われているかテストしそう」

「なあんでもいい」

「俺は今、かなり頭にきている」

「みればわかるよおホヒヒ」

「そして俺の内ポケットには、弾の入った銃が」

「すいませんでした」

「ふん。確かにいい判断力だ」

俺は少し笑うと、買つてきたコーラを皆に配る。
いかん。こいつのペースに流されている。

「とにかく、だ。俺達もいつ呼び出しがかかるかわからない」

現在空港にはジョニーと武信、それに1課と3課が待機している。
俺達は木戸が別の動きを見せた時の為、本部で調査がてら待機だ。
仕切り役のジョニーが居ない分、俺が頑張らないとまずい。

「いつでも出動できる様に、各自準備しておけ」

「なーんかもう出動要請かかるみたいよ?」

ひよこがそう言った直後、会議室のドアが開かれる。

「ほ、報告します・・・」

息も切れ切れに、4課の1人が口を開く。

「内線使えばいいのにじょ苦労さんだなあ・・・あ、ゲームすんのに
線抜いてたか」

直毅がとんでもない事を口走った気がするが、今はそれどころでは
ない。

「何があつた」

「町外れの指定能力研究施設で、人質を取つた立て籠もり事件が発
生しました」

指定能力研究施設。

本来人間に備わっている、本質的な力。
それらは普段はリミッターがかけられていて、自分が危機的状況に
陥った場合、

限定的に開放される。所謂火事場のクソ力だ。

そのリミッターが外れっぱなしになってしまった者、または意識的

に外せる者。

それらを総称して、この国では能力者と呼んでいる。

その能力者の中でも、更に何かに特化した人間。それを指定能力者と言つ。

具体的には、普通の人間の範疇を超える力を行使できる存在。

指定能力者自体数が少なくて、発現の条件も曖昧だ。

その力を発現させる条件を研究するのが指定能力研究施設、だつたか。

あまりこういった内容は得意じゃないな。武信やひよこの方が詳しそうだ。

「人質の数はわかってるん?」

「恐らく15人。その時間まで施設に残っていた人間全員です。2課が向かっていますが、そちらに最終的な指示を頂きたい、と」

「つーかただの立て籠もりなら適当に突入させて終わらせちまえつーの。なんかまずい事でもあんのかあ?」

直毅が欠伸しながら質問を投げる。やはり緊張感が足りていない。

言ひよどむ。

「犯行グループが、自らを円卓の騎士と名乗っています」

「だろおとは思つてたけどなあ。おいジヨーー。じつすンだ」

少し遅れて、スピーカーからジヨーーの声が響く。

『うーん……さすがにこっちの人員は回せないし、君達を全員回すわけにもいかないし……』

「いひちで一手に分かれるのがいいんじゃない？立て籠もり組のほうと、待機組のほうとさ」

ひよこが提案すると、不意に4課の1人がインカム越しに何かを話し始めた。
かなり焦燥しているようだ。堪らず声を掛ける。

「どうした、動きがあつたのか？」

「はい。犯人グループの要求は、現在収容中の囚人の解放。要求が聞き入れられない場合、人質ごと研究所を爆破する、と言っています」

「それは急がないとだねー。とりあえず立て籠もりなら、俺確定だよね？」

「あとは俺でいいかあ。怪我人増やすのもアレだしよお

ひよこと直毅がそれぞれ立候補し、班決めが終わる。
こうじゅうやつとりをしていると、まだ平和だった学生時代を思い出してしまう。

「さて行くかあ。運転は任せな

「頼むから着く前に事故るなよー……」

「一応ここから指示を飛ばせるよつとしておく。何かあつたら連絡

「うん

「あこよ。ちよつとくら行つてくるわ」

俺はジヨーの代わりに2人を送り出し、会議室へと戻った。

012 - 季節はすれの巻1

3月4日。17時半頃。施設内警備室。

「施設外周および全区画、異常ありません」

『そうか。引き続き外の動きを警戒しておけ』

「了解しました……ん?」

『どうした』

「黒いコートを着た男がこっちに……」

直後。施設内の電気系統は、一斉に眠りに就いた。

男2人を乗せた黒いセダンは、夕暮れ時の街中を疾走する。街中は学生が多く、スーツ姿の人たちもちらほら見える。交差点は信号待ちの人で溢れているし、バス停も混み合っている。要するに、帰宅ラッシュ真っ最中なのだ。

車道の交通量も少なくない中、黒いセダンは疾走する。車の間を縫うようにして。

「いやー、ゴキゲンだねえ。ハヤイハヤイ」

法定速度を軽く超えたセダンを操る直毅は、かなりの上機嫌だ。

「街中なんだからスピード落とせよー・・・」

ひよこにはカーオーディオを操作し、ジャズ調の落ち着いた曲をかける。

直毅は口で言つたところで車のスピードを緩めない。高ぶつた気分を落ち着かせるためには、こういった曲を流すのが一番なのだ。

それを裏付けるように、車は次第に減速を始める。

「ジャズ聴くと煙草吸いたくなるよねー」

「お前はいつも吸つてんだろ？が、火借りる？」

「あーーーめん、オイル切れたっぽい」

ひよこは何回かライターの点火を試みるが、やはり火は点かなかつた。

「時にひよこちゃんよお

直毅が正面を向きながら。

「ちゃん付けはやめれ。どした？」

ひよこに問う。

「・・・罷だと、思うか？」

「うーん、罷つていうかねー。陽動つての？俺たちを分散させて、一人ずつ消していく算段じゃないかな？」

木戸は、脅威となる人間を消す、と言っていた。

彼の能力の特性上、一人で居るとこに自害を誘発するような命令をするのが、最も手早く効率的に標的を仕留められる。

それを避けるために7課メンバーは、木戸からの電話以後、極力2

人以上の行動を心がけていた。

「まあ、俺等個人の携帯番号でも手に入れない限りは、一対一で会話することなんとそう無いだろうしなあ」

「用心するに越したことは無いけどねー。さて、そろそろ着くんじやないん?」

既に街中を抜け、山道に入っていた。ダッシュボード上の煙草が小刻みに揺れる。

「よくもまあこんな辺鄙な場所に建てるもんだ」

「辺鄙な場所だからこそ、じゃないの? いかにも怪しい研究やつてますよーって感じでさ」

舗装の行き届いていない道路を越え、木々に遮られていた視界が開ける。小高い丘の上に、それは建っていた。

研究所の外観は、そんないかにもな雰囲気を漂わせていない。一見するとデザイナーズマンションと見紛う併まいである。2階建ての造りに、バルコニーまであるようだ。

周りを取り囲むように、パトカーを含む車が計8台停められていた。そこから更に離れた場所に駐車し、2人は研究所へと向かう。

「7課の増援でーすよー。状況はどんなかんじですかい?」

間延びしたひよこの声に、『コードを羽織つた中年警官が答える。

「芳しくないです。既に一人、人質が殺されています」

「・・・あ？お前等はそれを黙つて見てただけか？無能共」

直毅の声が荒くなる。

「し、しかし、囚人の解放となると、時間がかかりまして」

「嘘でもいいから解放したつつつときやあ、殺されなかつたんじやねえのかよ」

声に凄みが増す。

「おい直毅、攻撃する相手が違う

「つち、まあいい。ひよこ、中の様子はどうなつてる」

ひよこは直毅を宥めると、すぐさま力を使い、建物内を探る。

「ちよいとお待ちを。・・・うーん、クリンコフ抱えた奴らが七人と、座らされてる人達が十三人。一部屋にまとめられてるね。その部屋の前にも銃持つた奴が一人いる」

「あ、そうだ。監視カメラとかついてますこい？」

警官に尋ねる。

「付いてます。これが見取り図ですが」

ひよこは地図を受け取りにこやかに笑うと、

「いや、配置が知りたいとかじやないんですよ。2課の皆さん、悪いけどお願ひしますねー」

2課に指示を飛ばす。

「糞野朗共は八人かあ。そんだけわかりや充分だ」

直毅はP90を構え、入り口へと歩いていく。その背中に向かって、警官が声をかけた。

「お、おい！まだ中には人質が・・・」

「全員生きた状態で助け出してやんよ。人質は、だがあ」

直毅は語尾を上ずらせ、歩みを早める。

「彼一人で本当に大丈夫なんですか・・・？」

直毅に声を掛けた警官が、ひよこに話しかける。

「あ、2課から聞いてないですか？あの人は単独じやないと、自由に動けないんですよ」

「いえ、そうではなくて・・・銃を持った数人を相手に、人質全員

無傷で救出などと、普通じゃ考えられません。ましてやそれを単独でなんて」

「うーん、ひょっと心外だなあ

ひょいは苦笑し、

「俺たちは普通じゃないんですよ。有り得ない事を起こすのが当たり前で、常識外れが正常なんです。まあ、少し待つて貰えれば判りますよ」

警官はそれ以上、何も言えなかつた。

「ひょいはやんよお。ナビは任せらねばあ

「ちやん付けやめりつての。まあ任せろよ・・・正面に標的無し。奥の部屋に一人。階段に一人。あとほ全部一階だ・・・あー、駄目だバレたわこれ。奥の奴等がこっち来てる」

「オーケー。Lock - n - load . 行くぜ糞共」

P90をロックインすると、直毅は正面から堂々と建物に侵入した。

夕陽の射し込む薄暗いロビーを抜け、直毅は2階へと続く階段に向かうため、廊下を歩く。

『そのまま進んだ先に丁字路あるからね。そこを左』

ひよこがナビゲーターし、その通りに歩いていく。

廊下はロビーよりいくらか明るかつたが、カーテンのよつなもので窓が覆われているため、日中よりは見通しが悪い。

『そこから一人。両方こっち来てるね。接触まで三秒くらい』

耳を澄ますと、丁字路の左側から2人分の足音が聞こえてくる。

「了解つと」

迷い無く、左に曲がる。

確かにクリンコフを持った二人組が、こっちに向かってきてくる。直毅はその横を堂々と通り抜け、背後から声を掛ける。

「おいおい、顔バスとは俺もVIP待遇だなあ」

振り向く暇も『えず、背中に向けて銃弾を浴びせる。

「んーん。 yummy

銃口から立ち上る煙に息を吹きかけ、直毅は再び歩き出す。

『無駄口叩いてないで早く階段向かって』

「わあったよ。 nde 次は?」

『しばら歩いて突き当つを右。 その次の突き当たりの左に階段だ』

「へいへい」

施設の外では、いつでも突入できるように警備隊が待機している。それを一瞥し、ひょこは煙草を吸っている。ライターは2課から借りた。

『テメエ悠々と煙草ふかしてんじやねえぞひよー』

「吸つてた方が集中できるんだって。今は作戦第一だからね。ホラ早く早く」

『これだからバックアップはよお・・・とい、居やがるなあ

直毅が立ち止まる。

「階段中腹に一人、二階あがつたとこに一人だねー」

『仲間一人やられて見に行かないあたり、薄情な奴等だなあおい』

「見に来てたら来てたで、馬鹿な奴等だぐへへー、とか言つんだろ?
?」

『よくわかつてゐじやねえか。終わつたぞ』

会話している最中にも、直毅は一人を掃除した。

二階に上がり廊下を確認する。

ひよこの話によれば、この先の管制室に一人、その扉の前に一人いるはずだ。

「ここから先はスピード勝負だ。サツと行くぞサツと」

『そこは貴方様の手腕にかかるていまつせ。人質部屋前の奴はまだ動き無いね』

「なら良かつたぜ。さて行くか」

肩を鳴らし、直毅は管制室に向けて一直線に走り出す。少し走つて左に曲がり、突き当たりを右へ。

曲がる前に、左側の扉の前で無線機に向かつて話している大柄な男のこめかみを撃ち抜き、そのまま人質の捕らわれている部屋へと向かう。ここからはそのまま一直線に走り、ロビーを抜けたすぐ先が目的地だ。

『直毅ストップストップ！部屋から一人出てきてた……』

「遅えよ。見つかっちゃった」

見ると、ロビーの真ん中に一人、銃を構えた男が待ち構えていた。

「お前が下の奴等をやつたのか」

声に怒りが籠っている。その怒気は、離れていても伝わる程だった。

「聞くまでもねえだろ？まあとりあえず、死んどけ」

間髪入れずにP90を乱射する。

しかし、放たれた計38発の弾丸は、一つとして男を捉えることは無かつた。

「ああ？あーあれかお前。今流行りの弾の軌道見える系男子か」

銃弾を全て避けきった男は何も言わず、腰だめに構えたモスバーグM590の引き金を引く。

「ショットガン！？聞いてねえんだけどおー？」

直毅は咄嗟に目の前にあったテーブルを蹴り上げ、散弾の盾にする。そのまま横に立て掛けられていた長机を男に投げつけるが、これもあっさりと避けられる。

一瞬で距離を詰められ、今までにM590の引き金が引かれる直前、

「タイムタイム！マジでそんなんで撃たれたら流石の俺もミンチだつて！」

男は聞く耳を持たず、そのまま直毅の頭に向けて発砲する。放った弾丸は、壁に穴を開けるに留まった。

「愉快だねえお前」

後ろから、声がする。先程頭を吹き飛ばす予定だった奴の声が。男は意識を集中させ、振り返りざまにM590を撃つ。しかし、またしても散弾が直毅をミンチにすることは無かつた。

アドレナリンの意図的な過剰分泌によりスローモーションになつた景色の中、男は周囲を見回す。直毅の姿は見受けられない。

「突入された。人質を全員始末しろ」

無線機に指示を飛ばすが、返答は無かつた。

「おい、どうした！？」

「いやあほんと愉快だわ。いい加減気づけよ

再び周囲を見回す。打ち抜いたテーブルも、避けたはずの長机も、全て元の位置に戻っていた。

そして目の前には、P90を構えた直毅。

「貴様つ・・・時間を操作して・・・？」

「ハツハアー！－んなわけねえっての…！」

直毅は左手で顔を覆い、笑っている。その間にも、銃口は男を狙っている。

男は既に発砲する気も無くしていた。こいつには絶対勝てない。本能がそう告げている。

「一つだけ教えてやらあ」

「能力者ってのが認知されてから、メディアで超能力やら手品の特集しなくなつたんだわ。どうしてだと思ひ？」

男は気づく。机は元からそこにあって、動かされていないことに。自分の放つた散弾が、全て壁と床にはか着弾していなかつたことに、気づく。

「まあつまりは、そういう事だ」

答えを聞く前に、直毅のP90は、マガジンに残っている弾丸全てを吐き出した。

『危なそつな奴等は全部始末したぞ。警察の皆々様方に突入の命令でも下せ』

1本目の煙草を吸い終わる前に、直毅から任務完了の報告を受ける。

「お疲れーい。あ、皆さんもう入つても大丈夫みたいですよ?」

煙草の火を消しながら、ひよこは警官隊に指示を出す。

『ああ、それと』

「ん?」

『管制室に閉じ込められてるマヌケ一人居るから。そつちは何とか
しどいてくれや』

ひよこは再び意識を集中させ、2階を探る。

管制室の前に死体が一つ、ドアにもたれかかるようにして倒れてい
る。

『成程、つつかえ棒的なアレね』

『まあ偶然だけどなあ。ああ疲れた』

インカム越しにため息が聞こえ、通信が切れた。

そういうえば、と思い、ひよこは2課の一人に尋ねる。

『すいませーん。犯人の要求って、囚人の解放でしたよね?』

「はい。それが、何か?」

「具体的に誰を解放して欲しかったのかなーと

「ああ、報告していませんでしたね。開放を要求された囚人は全部で九人。名前は・・・」

ひよこは読み上げられた名前を確認していく。どれも殺人犯やテロリストの名前だったが、そのうちの一人に、聞き覚えがあった。

「どうしてここでその名前が出てくる・・・奴等の目的は陽動じゃないのか・・・?」

ぶつぶつと独り言をつぶやくひよこをよそに、煙草を咥えた直毅が建物から出てきた。

「いやー腰痛つてえ。ひよこ、火くれ」

「ライター持つてんだろ。自分で点けろ」

「部屋に忘れちまつたみたいですよ、仕事終わりに今すぐ一服

言い終わる前に、通信に入る。

『事件解決ご苦労様、すぐ動けるかい?』

「おおジョニーか。そつちはどうだ?」

時計を見ると、午後6時を回っている。総理の帰国予定時刻を過ぎていた。

『すまない、やられたよ』

「・・・は？」

『総理が、木戸に攫われたようだ』

「What's the fuck! ? なんのために出迎えしてたんだクソが！」

頭を抱える直毅。無理もない。

『車は優輝君達が空から追ってる。君達ははとります』

「ジヨニーと武信拾いに行くわけね。了解了解。ホラ直毅行くぞ」

ひよこに引っ張られ、直毅は再び車を運転する。日もすつかり暮れた午後6時10分。黒いセダンは、林の中へと消えていった。

case . 04 end

こんな光景を、以前も見ていた。

神が救つてくれないのなら、俺が救つてやる。あいつにそう誓つた。

二度と同じ過ちは繰り返さないと、自分に誓つた。

あの時は駄目だったが、今回ばかりは譲つてやれねえな。だつてどうだろ？

人間つてのは、失敗を乗り越えて成長していくモンなんだから。

奴の口元が、動く。

「ああ、そいつの頭を撃ち抜け」

そして俺は、クソッたれに向かってこう言つてやるのさ。

「もし俺が

」

case · 05 - pretender -

17時45分。東京中央空港。

ジョニーと武信は、他の警官隊と共に整列している。

「もうすぐ総理大臣機が到着する。各自、先程指示されたとおりの配置につけ」

現場指導責任者である夜見川翔平の指示を聞いている最中である。やみかわじょうへい

「尚作戦中は、先の坂上議員の事件を考慮し、通信機の類は使用できない。作戦行動中に通信機を使用した場合、もしくは使用しているのを見かけた場合は、発見した者が直ちに止めに入れ」

「空港を出でからは、作戦を別の部隊に引き継ぐ。しかし空港を出るまでが作戦だ。各自気を抜くな。以上だ。では、持ち場に戻れ」

小学校の校長のような号令と共に、整列していた警官隊が一斉に散つていいく。

「・・・みかさん、偉くなったね」

武信がジョニーに耳打ちする。みかさんとは、夜見川のあだ名である。彼は7課メンバーの中学生時代の先輩であり、ジョニーの後輩だった。

「彼も頑張ってるからね。君達と同じよつ

「何々、俺のはなしー?」

夜見川がどことこと近づいてくる。

「……みかさん、持ち場につかなくていいんですか？」

「いやー本當は無線で指示しなきゃなんだけどー。今回無線ダメじ
やん?だから暇で暇で」

「……いや、指示以外にも色々やる事あるでしょ」

「おお～言つみつけなったねえ武信君」

「まあまあ夜見川君。僕達もなんだかんだ、総理が来るまで暇なん
だ」

ジョニーが会話に刺さる。

「あ?誰だテメエ喧嘩か?」「

夜見川が物凄い剣幕でジョニーに食つて掛かった。

「一応、君の先輩なんだけどね……」

「いやいやー冗談ですよ冗談。他のみんなは元気してます?」

「元気すげて逆にみんなテンション低いくらいだ。今度呑みに行こ
うか」

「あ、もう着く時間じゃないかな?」

夜見川は腕時計を確認し呟く。まるで話を聞いていなかつた。

「さうだね・・・僕昔からこんな扱いだつたね・・・行こうか武信

君

「二人とも頑張つてねー

ジョニーは誰が得をするのかわからぬ泣き真似をして、武信とタラップへと向かう。

17時50分。特別駐機場。

移動式のタラップが飛行機へと接続される。

その中から黒いスーツを着た男達とともに、白髪に立派な白髭をたくわえた日本国総理、船木が姿を現す。

護送車までのルートには空港関係者や先程の一部の警官隊員が一列に並び、総理の帰国を見届けていた。

「・・・総理、お疲れ様です」

武信が声を掛ける。

「ふむ。君は・・・誰だったかな」

「・・・武信ですよ。一ヶ月で顔忘れないでください

「おおそうだつたそうだつた。武信こ、ジョニーもあるな。出迎え
ご苦労」

「お元気そうで何よりです」

ジョニーが一礼する。

「つむ。まだまだ元気だ。下の方も」

「公衆の面前で堂々と下ネタを披露しないでいただけますか」

「おつと、もう一發ば」

総理がポケットをまさぐり、

「土産だ」

小さここけしのようなものを取り出し、ジョニーに手渡す。

「何ですかこれ? トー テム ポール?」

「儂とお揃いだぞ? ほら喜ばんか」

渡したものと同じ物をちらつかせ、白い歯を見せ付けるように笑う。

「はあ、どうも・・・」

「では儂は失礼させてもらおう。これから大事な用があつてな

「会見ですか?」

「いや、帰つて寝る

言葉も出ない。

「旅疲れという事にしておけ。それと、その土産は大事に持つておくのだぞ? ではな」

横のボディーガードに出発を促し、総理は護送車へと乗り込む。

「・・・あんな糞ジジイが国のトップで大丈夫なの?」

「武信君、さすがに糞ジジイは言いすぎだ・・・」

護送車の開いた窓から、総理が笑顔で手を振っている。
そして、何か口元が動いたように見えた。

「・・・総理、今なんて」

一瞬の間があり、

「大変だ。武信君、出動準備して」

「・・・え? え?」

状況を把握できていない武信を余所に、ジョニーは待機班に無線を飛ばす。

「優輝君、出動準備だ。総理が攫われた可能性がある」

『詳しく聞いてくる時間は無かっただな。了解した』

「護送車の発信機から、場所を特定してくれ。いつまでは車で向かう」

『なら俺等はヘリのが速えな。先にヘリポート行ってンダぞ』

ヤスが駆け足で会議室から出でていく。

「恐らく総理自体に危害を加えることは無はずだけど、用心してね」

『了解。俺達も行くぞ』

『ホヒヒー』

ジヨニーは無線を切ると、続いて立て籠もり班に繋げる。

無線を終えたジヨニーは、ため息を一つついた。

「施設からここまで恐らく10分もかかるにはずだ。その間に準備を済ませなこと」

「・・・ジヨニー、なんで総理が攫われたの？普通に護送車に乗つたじやない」

「追つてここ」

「・・・え？」

「追つてこい、だよ。総理はそう言つたんだ。加えて言つと、護送車を運転しているボディーガードは、小型の無線機をつけていた」

「それに、この土産は」

ジョニーが土産を耳元に近づけると、確かに総理の声がした。

3月4日、18時15分。総理大臣護送車内。

「ふむ。儂の家はこっちでは無いはずだが」

運転手は、何も答えない。

「儂は早く帰つて床に就きたいのだが、寄り道か？ 磯貝よ」

「そんなどころです」

磯貝と呼ばれたボディーガードは、前を向いたまま返答する。

「何処へ向かつている？ それくらい聞かせてくれても良からつて」

船木は、再び磯貝に尋ねる。

「ボスの所へ、お連れします」

「ふむ・・・なあ磯貝よ」

「何でしうか

「儂、寝てもいい?」

「・・・」

總理は、ドライブを楽しむ氣は無いらしい。

18時20分。7課人員輸送へり。

『優輝君、そつちはどうなつてゐ?』

「總理護送車を発見、追跡中だ。今のところ以上は無い」

『了解。レッちもそろそろ・・・来たね』

『迎えに來たぞジョーイイイイイイツー!』

『直毅速いつて!!止まれ止まつて止まつてください!!』

インカム越しに騒がしい声が聞こえる。ビリヤリ、ヒヨコ達が空港に到着したらしい。

『ヘイお待ちかい』

『死ぬかと思ったー・・・』

『一人とも本当に申し訳無いんだけど、武信君連れて護送車を追つてくれ』

『マジで人使い荒えのな。ジョニーはどうすんだ?』

『僕はいつも通りだ。ソレから武警に指示を出すよ』

『ジヨーもたまには前線出張れよ。なまつちまつわお？』

「役割分担だ。司令塔が居なくなれば、俺たちはただの木偶の坊だ」

『まあ文句はないよん。とりあえず武信はやへ乗って』

『…………う、うん』

「ヤス、車は何処に向かってるかわかるか？」

「まだ特定できねえな。走り方から見て、目的地に一直線つてわけじゃ無えみたいだが」

「追跡振り切つてるんじやねえのか？なあ、なあて」

「やかましいぞべさま。どの道、ヘリの眼からは逃げられない」

「で、なんで攫われたってわかったんだジョニーよお

直毅がインカム越しに問いかける。

『総理総理の口の動きもそうだったけど、決め手はこの土産だ。どうやら小型の通信機らしい』

「抜け目ないねー。まるで自分が狙われるの知つてたみたいな周到さだね」「さだね」

『僕も一連の事件については総理に逐一伝えていたからね』

「・・・まあさすがといえどさすが、だね」「だね」

感心した素振りをみせる武信。糞ジジイ発現も何処へやらである。

『それで、護送車内の会話が筒抜けといわけか』

『うふ。運転手はボスの所へ連れて行く、と言つてこたよ』

「このタイミングじゃあまだほんの少しあ。んでも、総理は今どうなってる」

『寝てるみたいだね』

『・・・あの糞ジジイ大した肝つ玉してやがンぜ』

「まあ船木の爺さんじこけだねー。あ、あれ護送車じゃない?」

『ついでに田地みたいだよおホヒヒー』

護送車は住宅街の外れにある、一際大きな家の前で停車した。

18時28分。護送車内。

「総理、着きました」

「・・・おお？ もつ着いたのか。惰眠を貪る暇も無かつたわい」

船木は磯貝に促され、車から降りる。

「ボスがこの中でお待ちです。私が先導します」

「ふむ。ボスとは、円卓の騎士の木戸優一の事か？」

「や二」まで掘込んでおいででしたか。ならば話は早い

磯貝の口ぶりが変わる。

「総理、貴方に話がある。今少しだけ、私の話を聞く気は無いか

「その前に一つ質問じゃ、木戸よ」

「何だ」

「いやつは、磯貝は、お主に操られているだけなのか？」

「やうじう事になる」

ヘリの羽音が聞こえる。

「ふむ・・・ならば、良かつた」

そう言つて一呼吸置くと、船木はにやりと笑い、

「側近を手にかけるのは、いさとか気乗りしなかつたものでな」

磯貝の首に、手刀を振り下ろした。

そのまま地面に倒れる磯貝を抱きとめ、運転席に寝かせる。

「若造の与太話に付き合つほど暇では無い。儂は帰つて寝るのだ」

18時30分。7課人員輸送ヘリ。

「總理、お迎えにあがりました」

優輝が低空飛行するヘリへと、船木を迎え入れる。

「はて、君は誰だったかな・・・？」

「・・・ヤス、出せ」

「おおよ」

船木のボケを受け流し、へりは再び浮上する。

「怪我等は・・・無 ciòですな。よへい無事で」

「それよりも、昼飯はまだだつたかのあ

「うつせーぞ糞ジジイ。ボケるには早えンだよ」

「何だと！？儂は總理だぞ！貴様誰に向かつて口を利いておる！？」

「こきなり國家権力を振り翳さないでください」

『優輝君、そつちは大丈夫かい？』

「問題ない。總理をこのまま送り届ける

『よし、そのまま・・・おい、何だこの面は』

へりの中から、直毅達が家屋に突入していく姿を認めた。

「よし、このまま・・・おい、何だこの面は

警告音のような音が、断続的に機内に響き渡っている。

「・・・オイオイマジかよ、ちゅうと揺れンぞ」

ヤスが咳き、ヘリの機体が傾く。
その横を、ロケット花火を大きくしたようなものが、煙を引いて通過していった。

「RPGかー?ビー」から・・・

場所を特定する間も無く、次々とミサイルが飛んでくる。

「馬鹿がよお。俺のヘリに当たられると困つてんのかあ?」

「あいつら現境なしかよー?お祭りなんだけどホヒヒ」

「」の揺れは、ひと年寄りになまきついわい・・・

「ジジイ根性見せろよお」

「お年よりは大事に扱えと教えたか?ぐるまよ・・・

「ああ?俺、女子供と年寄りにはつえーから」

「最低だなお前・・・ヤス、いけそつか?」

「たりめえよ。直線軌道は予測しやす・・・あ?」

先程とは違つ警告音が聞こえた。

「91式かー?誘導弾にロックされた、避けらんねえ――」

「フレアも間に合わない、か。ヤス、機体を横に向けろ」

「正気の沙汰じやねえだろ！？何言ッて……」

「横に、向ける」

それ以上、優輝は何も言わない。

「・・・任せたぜエ、凄腕さんよ」

言われるがまま、ヘリの機体をミサイルの軌道と垂直に向ける。

「目標12時方向、2時方向。無風。揺れを考慮・・・修正。ミサイル距離約70、60・・・捉えた」

「生憎、爆発物は嫌いでな」

優輝の構えたバレットライフルから、瞬時に2発の弾丸が発射された。

1発目はミサイルを確実に捕らえ、2発目は、次弾を発射しようとしていた射手の91式を貫いた。

爆発に伴う揺れをやすは瞬時に修正し、全速力を以つて住宅街から遠ざかる。

「パネエっす優輝さん！－儂マジリスクトしてるっす！－抱いて

「！」

「年甲斐も無くはしゃがないでください。それと、まだ狙われる可能性があるので何かに捕まつてていただけますか」

「うむ。一ついいか

「なんでしょう」

「捕まつてさえいれば、寝ていても問題ないかの？」

「どんだけ寝たいんだあなたは」

ヘリはとっくに住宅街を抜け、海へと差し掛かっていた。

18時35分。邸宅入口。

大きな屋敷だった。今日制圧に出向いた施設と同じか、それよりも大きい。

「ひよー」。中の調査を

「今終わつたとこ」。1階の奥の部屋に男が一人・・・居るんだけど

ひよーが言葉を切る。

「・・・どうしたの?」

「いや、それがこいつ・・・」

『皆、聞こえているか』

優輝から3人へ通信が入った。

「船木のジジイはどうなった?」

『問題無い。安全圏に抜けた。今から一旦、7課に戻るところだ』

「そいつは良かつた。」即ちも今から木戸を確保する

通信に、ノイズが混じる。

「おい優輝、聞こえるか！？」

・・・した・・・・・ろ・・・直・・・・・

混じつっていたノイズの度合いが増し、遂には完全にノイズに侵食された。

「糞が、電波妨害かよ」

直毅は歯噛みし、通信を切る。

「・・・とりあえず、奥の奴を確保しに行こう」

「あ、ああ・・・」

「まだよひよくやんよ。何が気になぬ」とでもあんのか?」

「奥の奴・・・多分だけど、死んでる」

総理は宣言じおつ、へつの座席にしがみつきながら寝ていた。

「駄目だ、通信が切れた」

『木戸の妨害と見て間違いないだらうね。1課ど3課で手の空いてるものに向かわせたよ』

「出来るだけ早めに頼む。俺達じゃ時間がかかり過ぎる」

このまま7課に戻つて総理を預け、また向かつとしたら確実に40分は掛かる。ましてや総理を連れたまなど問題外だ。

武警の応援が到着するとしても最短でも20分。途中でヘリを妨害してきた集団のことも考えると、それ以上かかるのは確実であった。

「まああいつらなら大丈夫なんじゃねえか?」

「俺たちひじゅうせつても間あに合わねえしなあ。ホッヒヒ」

「やつ、だな・・・」

「武警7課だ。動くなよ糞野朗」

寝室のドアを蹴破ると、確かに1人、男が居た。
作業服を着た男は体を椅子に預けたまま、微動だにしない。

「ほんとに死んでやがんのかテメー！」

直毅が銃で男の頭を小突くと、男は力無く床に倒れた。

「……みたいだね。しかも、死んでからまだ時間経っていないみたい」

武信が体を調べる。男に立った外傷は無く、眠るように死んでいる。

「……この作業服、大川重工の従業員……？」

「そういえば突入のとき、一人足りなかつたねー。だとしても、なんでこんな」

「動くな。その状態で止まれ」

3人の背後から声がした。

「まず手に物騒な物を持っている君は、それを床に捨てて貰おう」

直毅は、声に従いP90を床に置く。

「能力を使われても困る。当分使わないで貰おうか」

「7課にかかる電話の声と、同じ。」

「私の言つた事が理解できた者は、こちらに顔を向けろ」

「武信とひよこが振り向き、次いで直毅も後ろを向く。」

「・・・あなたが木戸さん、ですか」

狡猾な笑みを浮かべた男が、そこに立っていた。

「問いつまでも無いだらつ。君達の今とった行動を考えればな」

「わざわざ本人がご登場とは、」いつしても好都合だ

「私としても出向きたくは無かつたがな。死体の前でお喋りも気が進まない。着いてこい」

木戸は踵を返すと、2階へと歩き始める。3人もそれに倣い、木戸の後ろを歩く。

「武装した奴等相手に背中向けるなんて、大した余裕ですねー」

ひよこが愛想笑いを浮かべる。木戸は振り返りもせず、

「それに対する回答も、最早する必要が無いだらつな。今現在君達が体験している感覚、それが全てだ」

撃ちたくても、撃てない。止まりたくても、止まれない。足が勝手に動いている。

「ここだ。先に入ってくれ」

武信がドアを開け、3人は中へと通される。

正面の壁一面が大きな窓になつており、夜景が良く見える。窓の前には大きめの机が一つ。左右の壁には本棚が並べられ、本が隙間無く敷き詰められていた。どうやら書斎のようである。

木戸は3人を部屋の中心に立たせ、椅子に深々と腰掛けた。

「そうだな。まずは、隠している武器の類を、全て床に置け」

言われるがまま、各自所持している銃を床に並べる。

「しかしすげえな。意識しなくとも勝手に体が動きやがる」

直毅が計5丁の銃を床に並べ、頭を搔きながら呟く。

「暗示のようなものだ。私の声は人の意識に干渉する。尤も、このような簡単な指示は反射に近い。急に熱いものに触ると、咄嗟に手を離すだろう？その様なものだ」

ひよこが鼻で笑いながら言つ。

「木戸さん木戸さん。自分で自分の能力解説しちゃう悪役つて、絶対負けるって知つてた？」

「勝ち負け等既に決まっている。君達はここで私に屈するか、死ぬ。確実にな。それに私は、悪ではない」

「・・・実験と称して人を殺しておいて、悪じやない、と言つの？」

武信が割つて入る。

「やうだ。彼のような汚い政治家は、私の描く日本には必要無い」「・・・」
高説を垂れ流した人の台詞じゃないね。大したエゴイス
トだ、あなたは」

「どうでも言つがいい。誰かが動かなければ、この世の中は変わ
らない。そういえば君の声は聞き覚えがあるな」

「・・・」
課に電話してきた時には、僕が受け答えしてましたから
「ふむ、成程。あの時は名前を聞いていなかつたな。名前は何とい
う?」

「・・・武信です」

「武信君か。いい名前だ」

一呼吸置き、

「また、私の話に付き合つて貰おう」

木戸は、語り始める。

「武信君、まず質問だ。そつちの一人の名前を教えてくれ
「・・・金髪が直毅、その隣がひよこです」

「ふむ。ひよこ、とこつのはコードネームが何かかな?」

「・・・学生の時あだ名です」

「学生の時という事は、学生時代からの友人というわけか。 そうなのかな、直毅君?」

木戸は会話の対象を直毅に移した。

「ああ。つーか今そんな話は必要無えんじゃねえのか

不機嫌そうな顔を作った直毅。

「許してくれ。人とともな会話をするのは久しぶりなんだ」

一つ咳払いをし、

「話を戻そう。私の考えは、以前坂上を通して君達も聞いていたはずだ。覚えているかな?」

「さあな。政治家の演説なんかいちいち覚えちゃいねえ

「まあそりゃうつな」

木戸は笑う。

「すまない、気が利いていなかつた。長話になるから、皆座つてくれ」

直毅とひよこはその場であぐらをかき、武信は律儀に正座する。

「あの時は少し過激な言い方をしてしまつた。私の目指す社会というのは、平たく言つと差別の無い社会だ」

「金や権力、能力者の差の無い社会。そういうものを理想としている」

「思想が共産主義者ストレスレジャねえか。時代逆行してやがる」

「いや、一概にそうとも言えない。事実今の日本は民主主義を謳いつつ、実際は社会主義の体制に移行しつつある。そつ感じたことは無いか？直毅君」

「まあ確かに、国民の意見なんか結局反映されて無いように感じるな」

「そうだろう。近々この国は社会主義国になるのではないか、と私は危惧している。現在の政治家達の思想が引き継がれたまま社会主義になつてしまつたらどうなると思う？」武信君

「・・・少なくとも、いい結果にはならないでしょ？」

「うむ。私もそう思う。思うからこそ、今を変えていかなければな

らない」

「今日船木総理と話をしようとしたのも、それが理由だ。の方は影響力が凄まじいからな。の方に話を通しておけば、下で働く者たちも考え方を改めるかもしれない。そう考えた」

溜息を吐く。

「私が政治家であれば、こんな回りくどい事をせずに済んだのだがな。私は日財に就く前は、中学校で教師をやっていたんだ」

「能力が無かつた頃でも、生徒は熱心に話を聞いてくれたよ。今の君達のように」

「お陰で私のクラスはイジメ一つ無かつた。ほとまりのあるクラスだったんだ。最初はね」

「ある時、クラスの生徒一人が、能力者となつた。原因是家庭内暴力による、過度のストレスだったらしい」

「最初はクラスの注目の人だったが、彼女としては複雑だったんだろ。あまりクラスの輪に入ろうとしなくなつてしまつてね」

「そこからイジメに発展するまで、時間はかからなかつた」

「私も見て見ぬふり等できなくてね。イジメをやめる様、クラスに呼びかけた。しかし、それが原因でイジメがエスカレートした」

「君達も最近まで学生だったならわかると思うが、最近のイジメは陰湿だ。最初は靴を隠され、次に机、鞄。アザを作つてくる日もある」

つたね」

「彼女は三ヶ月程耐えていたが、遂に体調を崩してしまってね。学校に来られなくなつた。家庭訪問しようにも、私は家に入れてもらえないなかつたよ」

「それから一週間もしないうちに、彼女は自室で首を吊つた」

木戸が引きつった笑みを浮かべる。

「自分の無力さを呪つたよ。私が生徒達にもつと強く言つていれば、あの時無理にでも家に押し入つて話を聞いてあげられたら、何か変わつたかもしれない、とね」

「葬式では私以外誰も泣いていなかつた。彼女の両親すらも、誰一人として」

「そのことにひどくショックを受けてしまつてね。私は三日ほど寝込んだ。私にもっと力があれば、と思いながら」

「結果として私は、その時に能力者となつた。誰もが私の発言に絶対に従うという能力を授かつた」

「皮肉なものだろ？ 彼女の自殺が原因で、彼女の自殺を止める手段を手に入れたのだから」

「そんな時だつた。円卓の騎士と呼ばれる集団があることを知つたのは」

「彼等は今の日本の現状を変えるために様々な策を講じていた。私

の力があれば日本を変えられるかもしれない、とも言つてくれた

「私は教師を辞め、日財に入った。円卓の騎士としての活動をする為にね」

「一度とイジメや争いが起きないような、そんな誰もが幸せな世界にするために、私は立ち上がったんだ」

「私はこの力を使い、この国を支配する。たとえ独善的であるひとつも、誰かがやらねばならないからな」

木戸は深呼吸し、3人に呼びかける。

「君達の力があれば、私達の計画も簡単に実行できる。あの時は断られたが、今一度聞こう。私達に協力する気は無いか」

「断る」

ひよこが力強く答えた。

「あなたは宗教家に向いてるよ、木戸さん。神様にでもなるつもりか? ただまあ、俺たちの心には届かなかつたけどね」

「俺”たち”というのは、語弊がありそうだ。違うかな、武信君?
直毅君?」

木戸が歪な笑みを浮かべ、2人に問いかけた。

「・・・協力します、ボス」

「OK - BOSS -」

「おいおい一人とも、何言つて・・・」

言いかけて、ひよこは気づく。木戸の術中に嵌められていた事に。木戸の話を聞いた時点で、彼の張る蜘蛛の巣に絡め取られていた事に。

「お前、さつき一人に関係ない話をしたのは・・・」

「坂上の件を何も生かせていないな君達は。私の話を少しでもまともに聞いたたら、それまでだというのに」

「下準備つてわけかよ、糞野朗が」

「今更気づいても遅い。既にひよこ君以外の一人は、私の意のままだ」

武信も直毅も、木戸から視線を外さない。武信に至っては目が虚ろである。

「おい武信！直毅！目覚ませ！――」

「無駄だよ。それにしても君は面白い。聞く気が無いとはいえ、私の話を聞きながら、洗脳に耐えるとは」

「他人の人生なんか興味無いんだよ。自分のことだけで手一杯なんでね」

ひよこは床から銃を拾い上げるが、

「止まれ」

木戸に先手を打たれる。

「くそつ・・・・!」

「君は何か洗脳に対する対策をしているようだな。流石に解けるのが早すぎる」

「言つてみ。どの道もつお前に逃げ場は無い」

遠くからパトカーのサイレンが聞こえる。増援が到着したようだ。

「ふむ、少し話しそぎたようだな。もう7時10分過ぎか」

「頃合いだ」

木戸は立ち上がる。

「直毅君、ひよこ君。立つんだ」

2人とも、指示に従い立ち上がる。

「直毅君は床から銃を拾いたまえ」

直毅がファイブセブンを床から拾い上げた。

「君の死を以つて、円卓の騎士始動の第一歩としよう」

ファイブセブンの銃口が、ひよこの額を捉える。

「おい嘘だろ……？直毅、返事しそよ直毅ーー。」

直毅の耳には、誰の声も届かない。

「ああ、そいつの頭を撃ち抜け」

直毅は深呼吸し、別れの言葉を告げる。

「もし俺が

口角を吊り上げ、

「もし俺が絶対に屈しないと言つたひどいわ

その銃口を、木戸へと向けた。

「貴様つ・・・洗脳が効いたフリを・・・！」

「長々語つてんなよプリテンダー。欠伸が出るぜ」

木戸はベレッタを取り出しが、僅かばかり判断が遅かつた。直毅の放った銃弾は木戸の右肩に命中する。

「ぐつ・・・！」

右肩を押されてよろめくが、まだ倒れない。木戸に銃口を向けつつ、木戸に歩み寄る直毅。

「止まれ」

彼の歩みは止まらない。

「止まるんだ！」

木戸の声は届かない。

「聞こえないのか！-止まれ！-！」

明らかについたえている木戸を余所に、直毅はファイブセブンの銃口を木戸の眉間に押し付ける。

「馬鹿なつ！私の声は、確かに貴様に伝わって・・・」

「お前が元センコーで助かつたぜ木戸よお。唇の動き読むつーのは、案外簡単なもんだ。はつきりと喋るような奴は特にな」

「イイ子ちゃんクラスだつたらしいがなあ。案外、携帯持つてきてたりする奴とか居たんじゃねえか?この分だと」

「な・・・に・・・?」

「持ち物検査、もつと徹底しねえとなあ」

直毅は左手の中指で自分のこめかみを叩く。その両耳には、インカムが取り付けられている。

「こここの連中全員、インカムに音楽プレーヤー仕込んでんだわ。生憎不真面目の集まりでなあ。馬鹿一人は真面目にお前の”講義”聞いてたみてえだが」

「そんな物で、私の声を遮断しただと・・・?」

この場で木戸の声を聞き取れる者は、既に誰も居なくなっていた。

「・・・木戸さん。貴方の実験は、少し手落ちだつたみたい。声を発した者が死ねば洗脳が解けるんじゃなくて、恐らく痛みを感じたり、精神的に不安定になれば、効果が薄れるんだと思います」

意識を取り戻した武信が木戸に語りかける。

「・・・貴方とはお話したい事がたくさんあります。大人しく、僕達についてきてください」

「まだだ

俯く木戸の左手には、何かが握られている。

「抗つてみせる。」んな運命から

左手に握った何かを、前方へと放り投げた。

握っていたのは、机の上に置かれていた砂時計。砂の代わりに、赤い液体が入っている。

それに気を取られた3人の隙を突き、木戸が窓へと走る。

「！？ 武信！木戸を止めとけ！！」

ひよこは投げられた砂時計に向かつて走り出す。

「馬鹿が。悪あがきしてんなよ」

直毅は冷静に木戸の足を打ち抜き、倒れた木戸へ武信が駆け寄る。

「・・・木戸さん、話はまた後でゆっくりと。おやすみなさい」

武信が木戸の額に触れ、咳く。その途端、木戸は意識が遠のき、ゆっくりと瞼が落ちていく。

「催眠・・・だと・・・」

「・・・そんなんじです。今は、休んでてください」

「結局捕らえられたか……ふふ……どの道私……は……」

・

木戸は薄く笑うと、ゆっくりと瞳を閉じた。

「あつぶねー！ギリギリセーフー！」

2人が振り返ると、ひよこがダイビングキャッチの体勢で固まっている。

「ああ耳痛つてえ。つーかただの砂時計だろそれ？そんな必死になる事ねえだろ」

『おい三人とも！聞こえてないのか！！』

音楽再生機能を切ると、続けざまに優輝の怒鳴り声が飛んできた。

「悪い悪い。今大サビだったんだよ」

『またテメエは作戦中に音楽聴きやがって……くそ……』

「……まあ今回は、そのお陰で助かったみたいだけね

『三人ともお疲れ様。木戸はどうなってるかな？』

「ジョニーもお疲れ様。木戸はこっちで生け獲りにしたよー』

「あと死体が一つ転がってる。そっちの回収も頼む」

『生け獲りつて言い方はどうなんだろう……とにかく了解した。あとは、3課に引き継いでくれ』

3人は現場の引継ぎを済ませ、セダンに乗り7課へと戻る。

武信が運転するセダンは、安全運転で7課へと向かっていた。

「いやあマジで疲れた。これはあと一月休んでも怒られねえな

「……ほんとに休まないでよ

「わあつてゐよ。つーか木戸預けてきちまつたけど、あれ大丈夫なのか?もし途中で目覚ましたらまずいんじゃねえの?」

「……醒まさないよ。少なくとも、12時間は」

「悪いねー武信。能力使わせちゃって」

「……大丈夫。僕もいつまでも、引き摺つてるわけにはいかないから

車内に沈黙が流れる。車のエンジン音が、やけに大きく聞こえた。

「まあ、とにかくお疲れさんだ。ひよー、火くれ」

「ライターの油切れてるって言つて……あ、ちょっと待つて」

ひよーは左ポケットを漁ると皮手袋をはめ、人差し指で親指を弾く。すると、人差し指の先端に火が点いた。

「そんな手品使えんなら最初からやつてくれよ」

「戦利品だよ戦利品」

「意味わかんねえっての。すまねえな」

人差し指から火を貰い、満足げに煙草をふかす直毅。

『三人とも聞こえてるかい?』

ジョニーから通信に入る。

『総理は無事に自宅に送り届けたよ。幸いにも今回の騒動に総理が関わってたことは洩れてないみたいだし、公にはちょっと寄り道して帰った、という事になるだろうね』

「・・・間違つてはいないね。それが無難かも」

『それと電波妨害してきた集団の詳細がわかつたよ。"天空の泉"と呼ばれる国内PJS（民間軍事会社）の一つだ』

「 P S C ねえ。なんか面倒な事になつてきてんな

「まあその調査も含めて、木戸には色々聞かないとな」

『 そりだね。彼が目を覚まし次第、取り調べよつか

「 ・・・うん。そろそろそつちに着きそつだ。詳しきはまた後でね
ジヨニー」

『 て解。みんな本当にお疲れ様』

「 ・・・ちょっと待つて。まずことになつた」

「 どうした武信! ?

「 ・・・ガス欠みたいだ」

case .05 end

木戸の確保から3日が経過した、3月7日正午過ぎ。都内警察署。

「ちーっす」

直毅が取調室のドアを開ける。

中には椅子が乱雑に並べられ、1つの空席を残しその全てが埋まっている。

その中に見知った顔が3人。それ以外に14人もの人間が1部屋に缶詰にされていた。部屋の前に置いてある机にはマイクが取り付けられ、壁にはモニターが設置されている。

「なんだこりや。映画鑑賞会でもおつ始めたんのか?」

「普通の取調べだと能力を使われる可能性がある。それを考慮して、聞く側の人数を増やす事で能力使用を防止しているらしい」

優輝が答える。

「肝心の木戸はどこだよ」

「署内独房で拘束中だ。直接の接触は避け、それを通して取調べするようだな」

モニターを指差す。

「・・・仮に、取調べを真面目に聞いて、途中で話をすり返された
ら

武信の疑問が口に出きる前に、ジヨニーが手で制した。

「これだけの人数を相手に能力を行使するのは難しいはずだ。まあ、苦肉の策なんだよ。万一に備えてこの部屋に危険物の類は持ち込めないようになつていいし、独房の鍵もここからじゃ開けられない。しかも彼、抵抗する気は無いみたいだしね」

「なるほどねえ。そういうや、ひよことヤスはどう行つた

「ひよこ君は調べ物があるとかで欠席だ。ヤス君はお墓参りの後、病院らしいよ」

ちなみにぐんまは通訳のため海外出張中だ。

「んだよ、俺もサボりやよかつたぜ」

「いいから座れ。取調べを始める」

優輝に促され、直毅が椅子に腰掛けると、モニターの電源が入った。

「・・・木戸さん、聞こえますか?」

『武信君か。じょりくぶりだな』

映し出された独房は、一見するとワンルームマンションの一室のようだった。椅子にテーブル、ベッド、本棚すらある。しかし、窓がない。

椅子に腰掛けた木戸は、やれやれといった表情で肩をすくめた。

『君と話が出来てうれしいよ。そここいる連中は会話が成立しなくてね。まるで尋問だ』

「・・・これは取調べですから。会話にはならないと思います」

「随分と良い部屋賣つたじゃねえか木戸よお」

『そちらが勝手に用意したのだろう。私としても有難い処遇だが』

「・・・そろそろいいでしょうか。取調べ、始めます」

真面目に取り合わないようにして、取調べが開始された。

「・・・まず2週間前の事件からです。大川製鉄所で銃を密造していた件について、心当たりは?」

『あれは私の指示だ』

木戸があつせりと口を開いたため、取調べ室でどよめきが起ころ。木戸はこじら口間の取調べで、何一つとして有益な情報を吐き出せなか

かつたためだ。

『当初の計画では、政府への抑止力として大量の武器が必要だつたからな。尤も君達に押さえられてしまつたから、計画を変える必要があつたがね』

「・・・そこで坂上の演説を自らの能力の実験場にし、総理と直接コントакトをとる策を練つた、というわけですか」

『そつだ。あの時点で有効範囲や人数を調べ、総理を操つた時に不備が無いようにしていた』

「ではその總理についてです。あなたは何故、總理を攫おうとしたのですか?」

『君には話したはずだがな。私の思想を直接、手つ取り早く社会に反映させるためだ』

「でも、それならわざわざ總理を呼び出すまでもなかつたんじゃないでしようか。あの時あなたは、總理のすぐ傍にいる人の洗脳に成功しています。その人を通して總理と接触する、といつ氣にはならなかつたんですか?」

『これも前に話したな。私の声は、意思を伝える段階が増える』ことに、効力が薄れる。先の実験で確認したように、ボディーガードから伝えた思想など、彼は聞く耳を持たないだろうからな。仮に伝わつたとしても、そこから彼が直接政治家どもに指示を下したところで、正常な効果はほとんど得られないだろうと考えた』

「・・・なるほど。それで僕達の介入を防ぐために、先に指定能力研究施設を襲わせ、指揮系統を混乱させた、と？」

『何の話だ』

再びじよめく取調室。

「・・・あなたは傭兵を雇つて、総理の乗つている僕達のヘリを攻撃させましたよね？」

『ああ、間違いない』

「その1時間ほど前、街外れの施設が襲撃されたのは、ご存知ですか？」

『初耳だな』

「ざけんなよテメエ。襲撃した連中は円卓の騎士を名乗つてたんだ、関係ないとは言わせねえ！」

席から立ち上がり、一気にまくし立てる直毅。

『知らないものは知らないのだ。この様な状況で嘘をついたとして、私に得が無いだろう』

いつの間にかベッドに腰掛け、すっかりくつろいでいる木戸は溜息をついた。

『円卓の騎士は、組織立て動いているわけではないのか？』

優輝が会話に参加する。

『我々は一つの思想に基づいて組織されているが、それらを実行に移すのは組織の決定ではない。個人の意思だ』

「・・・日本を変える、という思想ですか・・・」

『そうだ。そこからどういった行動を取るのかは、各自の判断に委ねられる』

「・・・要するに、木戸さんは別の人気が研究施設を襲わせた、といふことですか?』

『だろうな』

「・・・その人に、心当たりはありますか?』

『あると言えばあるが・・・』

言葉を濁す。

『この組織は、お互いの素性は明かされていない。顔は見ているが、一度二度会つた程度でよく覚えていない。わかっているのは、私を含めて6人の騎士が居るということぐらいか』

「その6人の中に、襲撃を指示した人物が居るってわけか?』

『違うな。恐らく施設を襲う指示を出したのは、円卓の騎士を結成した人物だろう』

「・・・そ、う思ひ根拠は何ですか？」

『なんとなく、だよ。・・・いや』

木戸は笑みを作ると、

『”やうこつ事になつてゐる”からだ』

ベッドから立ち上がり、椅子へと戻る。

「どうこつ意味だ」

『言葉通りの意味だよ。それ以上でも以下でもない』

テーブルに置いてあつたコーヒーを啜りつつ、木戸は再び笑つてみせた。

「木戸、お前は何を知つてゐる。やはつ總理誘拐と施設襲撃は関係があるのかー？」

『さあ、どうだわつな』

『答えるーーーーー』

声を荒げる優輝。

「優輝君、落ち着くんだ」

「だがジョニー……」いつは明らかに何かを隠している！

「そうだね。木戸君、君に聞く時間はたっぷりあるんだ。話す気になるまでそこから出られないよ」

『話したところで出られないだろ？。それに、私にはもう時間が無い』

「何を言つてゐるーー！」

『武信君、まだ聞いているかな？』

木戸は気にする様子も無く、会話の対象を武信へと戻す。

- 3 -

「私がこの忠告た 巴卓の騎士にはこれ以上聞れるな てないと」

皆あつがヒーローです」

直後、独房で異変が起つた。

金屬製のヘリコートがハーフハーフに分離され、それを形作っていたのがハーフ

「何だ、これは……？」

「ポルター・ガイストみてえだな・・・」

取調べ室の面々は、ただ唖然とモニターを眺めるしかなかった。

『ナリだつたな。なら君は今までビジョフ、七峰の線を追いつこう』

「…? 何故、あなたがその事を…?」

木戸の言葉に同様を隠せない武信。

『君との会話はなかなか楽しかったよ』

『私とこうイレギュラー』よつて、この世界が変わる!ことを祈つていの』

言ご終わると、かつてベッドだった無数の金属の塊が、一斉に木戸へと降りかかる。

そこで、映像は途切れた。

「木戸さん…」

「オイオイ! なつてやがるー!」

「部屋に設置されているスピーカー」と、カメラが壊れて…・・・

機材管理者らしき男がうろたえる。

「見りやわからんだよそんな事! 近くの無線持つてる奴に繋げー!」

「部屋前の看守に繋ぎます」

「看守さん、そつちはどうこう状況ですか！？」

珍しくジョニーまでもが焦っている中、看守の無線が繋がる。

『わ、わかりません・・・ただ、ベッドの脚が木戸に直撃し』

それ以上言葉は続かず、バットでボールを打つような打撃音が返ってくる。

優輝がマイクに向けて呼びかける。

一瞬の間があり、

『 もーしもーし。これ血かかつちやつたけど、ちゃんと言えんの?』

「誰だお前は」

『あ、使えんじゃん。警察のみなさんいるわー。田舎の騎士でえす』

「田舎の騎士だと……？」

『だからもうだって言つてんじゃん。あなたちょっと耳遠いんじゃないの?』

女は気だるそうに答える。

『とつあえずウチは裏切り者掃除しにきただけだからもう帰るけど。掃除とかいて部屋メチャ血まみれじゃん。マジウケる』

スピーカーからケラケラと笑い声が漏れる。

『そういうわけでお風呂入りたいし帰る。あーマジ鉄くそこのつざこなあ』

再び通信が切れ、その直後、署内に地響きが起ころ。

「B.i.tch、マジでどうなってんだー?」

「ジョニー、独房はー?」

優輝の聞こえ、携帯電話を耳に当てたままジョニーが返答する。

「2階の奥だよ。でも、どうやつてこに入り込んだんだ・・・?」

「・・・わかった。ひょ」とヤスには?

「それが、両方とも連絡がつかないんだ・・・」

「俺達だけで行くしかないな。後のことには任せたぞ」

優輝達は取調室の面々に状況を引き継ぐと、独房へと向かった。

「馬鹿野朗！何故不審人物が署内に侵入している……」

階段を駆け下り、2階の廊下に出た3人が真っ先に耳にしたのは、旧知の仲である夜見川の怒鳴り声だった。

「いえ、それが……」

「誰も不審人物なんか見てねえだと！？そんな馬鹿な話無いだろうが！！」

20代半ばの男が40歳になる手前の男を叱責している様は、非常時でなければひどく滑稽に見えただろう。

「夜見川課長！」

廊下を全力疾走してくる3人組を見るや否や、夜見川は指示を飛ばす。

「犯人は壁ブチ破つて外に出たらしい。こつちは入り口のドア潰されてて時間がかかる。外に回れ」

「了解した」

直毅と優輝は踵を返し、開いている2階の窓から飛び降りた。武信は一礼すると、律儀に階段に向かう。

「不審人物が居なかつたかどうかは後で調べる。前田警視は入り口

をどうにかしる。俺も犯人を追つ

指示を出し終わり、夜見川は階段の奥へと消えていった。

「糞、ノンキャリアの若輩者が偉そうに……！」

夜見川からお叱りを受けていた男、前田は入り口のドア撤去作業を部下に任せ、一人2階の窓から外を眺めている。

「聞こえていますよ、前田警視正」

「誰だ」

振り返ると、黒い丈長のコートを羽織った男が、壁に寄りかかっていた。

「彼は確かに若いですが、実力は確かです。現にキャリア組の貴方を追い越して、あの若さでは異例の警視長といつ立場にいるのですから」

男はズレた眼鏡をなおすと、前田の正面へと向き直る。

「ジョニー外交官……！？失礼致しました……！」

「やめてください。どうも堅苦しいのは苦手で」

ジョニーは人差し指で頬をかいた。

「ただ、やっぱり若さ故に冷静さを欠いてしまうこともあります。階級ではなく年長者として、彼をサポートしてあげてください」

「はあ・・・ところで、なぜ外交官がここに?」

「今回の総理誘拐未遂の事情聴取ですよ。参考人として」

『ジョニー、犯人と思われる人物を発見。立体駐車場に追い込んだ』

優輝からの通信に入る。

「了解、そのまま確保してくれ。十二分に気をつけね」

『わかつている。切るぞ』

立て続けに携帯電話が鳴る。

『もしもーし、ジョニーどしたん?不在着信きてたけど』

「木戸が襲われた。優輝君たちは犯人を追つてるみたい」

『俺もそつち向かえばいいの?』

「いや、夜見川君と直毅君、武信君も一緒に、ひよこ君はこっちに戻ってきて貰えるかい?」

『おつけー。5分で戻るわ』

立体駐車場地下。

「動くな。両手を頭の後ろで組め」

グロツクを構えた優輝は、壁の端まで追い込んだ犯人にそう告げる。

「よくウチが犯人だつてわかつたねえ」

「目立つからな、その格好は」

犯人の風貌は、ベージュの冬物のコートに灰色のプリーツスカート、頭にバイクのヘルメットという、目立たないほうがおかしい出で立ちだった。

「コートを脱いで床に置け」

「武器なんか持つてないよ。持つ必要ないし」

「いいから脱げ」

「脱がせてどうすんの？ウチ襲われちゃうの？」

直後、駐車場に銃声が反響する。優輝のものだ。

「次は無い。コートを床に置くんだ」

「こわい」

頭の横を銃弾が掠めたにも関わらず、女は動搖一つ見せずにコートを脱ぎ、床に置いた。

「ヘルメットを取り、コートの上に置け」

「はいはい。襲われたくないもん」

素直に従い、女はヘルメットを取つた。肩甲骨あたりで切り揃えられた茶色い髪が揺れる。

「そのまま」ちらを向き、床に伏せろ。両手は組んだままだ

返事は無く、代わりに女がゆっくりと振り返つた。

「何つ……？」

「まだ、子供じゃないか……」

まだあどけなさが残る整つた顔立ちの少女に、優輝はある人物を重ねてしまつた。

(・・・けて・・・)

「・・・やめろ」

銃口が、震える。手にまく力が伝わらない。

(助けて……)

「やめろ」

「どうしたの？なんか興奮してるみたいだけじ、ウチに欲情しちやつた？」

少女の声は、優輝には届いていなかった。

(お兄ちゃん、助けて……)

「やめろやめろやめろ……」

「優輝！ソイツを撃て！！」

振り返ると、1階への入り口に人影が見えた。

「ヤス、か……？」

「ばあか。死んじやいなよ、あんた」

少女はなんだ笑みを浮かべると、コートとヘルメットを捨い、一直線に優輝の元へと駆け出す。

「早く撃て優輝！！」

「できない・・・」「んな子供に・・・」

優輝は銃を構えてはいるが、照準が定まっていない。それどころか、トリガーに指が掛かっていなかつた。

「さよなら。痛いと思うけど、あんたはきっと天国にけるよ

ヘルメットを被りなおしてそんなことを呟き、優輝とすれ違つた少女は入り口へと駆けていく。

「バカが。こんなもの、さっさと撃ちや終わりなんだよ

ヤスはベレッタの照準を走つてくる少女に合わせる。直後、少女の背後で爆発が起つた。停めてあつた車の荷台かが爆発したようだ。

「優輝！・・・このクソガキがあ！・・・！」

ヤスが少女に発砲するが、弾は全て明後日の方向へと消えていった。

「あんたも死にたいの？いいよ、ここなら楽に殺せるし」

手にしたコートの背中側からコノトを取り出した少女は、眼前の獲物へと喰らいつく。

しかし少女の撃ちだした弾丸もまた、ヤスを捉えることはなかつた。

「避けられた！？なんで・・・」

「ガキが大の大人と張り合えるわけ無えだろー死ンでな！！！」

「それ違いざまにゼロ距離で発砲するが、それすらも少女には当たらなかつた。

「なんでさつきから弾が当たらねえんだよ糞が！！！」

「へえ、あんたも能力者なんだ。めんどいし今は逃げるね」

ヤスは咄嗟にナイフを抜いた。

「待て！テメエはここで」

わき腹に、鋭い痛みが走る。力が抜け、ヤスは地面に崩れ落ちた。

「オイ、マジかよ・・・？」

自分が撃たれたと気づくのに、数秒かかった。次いで両足にも痛みが走り、立体駐車場入り口は血で染まっていく。

「本当に、あいつの言った・・・通りに・・・」

意識を失う直前、武信の声が聞こえた気がした。

署内2階廊下。

『ジヨニー！ヤスが撃たれた！！応急処置はしておいたけど優輝が居なくて爆発が』

「落ち着くんだ武信君。犯人はどうなってるんだい？」

『そんな事よりヤスが大変なんだ！』

「武信君。今はどちらを優先すべきか、わかるね？」

『い・・・今、直毅とみかさんを追つてるよ』

「ヤスが負傷なんて今までで初めてじゃない？敵さんもなかなかやるねー」

「軽口叩いてる場合じやないよ。ひよこ君は木戸を頼むね」

「了解。入り口は・・・まだやつてんのか。瓦礫が邪魔してるみたいだし裏から回るわ」

ジョニーがインカムを手渡すと、ひよこは階段を降りていく。

『ジヨニー、僕はどうすればいい』

「救急車は手配しておいたから、ヤス君と優輝君をお願いするよ」

『・・・わかった。取り乱して』めん

「構わないよ。武信君も無事でね」

署内独房。

「よつと」

壁の崩れた箇所に手をかけ、ひょこは独房前の廊下へと飛び乗った。血の臭いがひどい。

「うわ、これはエグい」

見ると、看守らしき男が2人、うつ伏せで倒れていた。後頭部から見えてはいけないものが見えていたが、直接見ないようにして独房へと入る。

独房の中は荒れ果てており、鉄パイプが本棚やテーブルに突き刺さり、それらの原型をわからなくしていた。

「木戸さん生きてるー？どう見ても死んでるようになしか見えないけど」

木戸は意識を失っていたが、生命活動は停止してはいなかつた。どうやら生きているようだ。

「ジョニー、木戸生きてるわ。どうする？」

『なんとか運び出せないかな？入り口はまだかかりそうだし』

「運ぶにしても、怪我人を抱えて一階からダイブってのはちょっと
ね・・・」

『救急車を裏に回そう。すぐ着くと思つから、君は止血を』

「しておいたよ。幸いシーツとか毛布もあるしね』

『わかつた。その間、犯人の手がかりになりそうな物を探してくれ』

「了解ー」

「しつかし、こんだけ荒れてると何処から手つけていいか・・・」

改めて部屋を見渡すが、空き巣がそこら中に鉄パイプを突き刺しながら部屋を物色したような有様である。

「本棚がある独房とか聞いたことねえなー」

「コーヒーメーカーからティーカップまであるし、完全に税金の無駄遣いじゃん」

「鉄パイプに血痕か。これでぶん殴られた系かな?』

ひよこは鉄パイプを拾い上げた。両端は引き千切られたような痕があり、先端には血が付着している。ビ�やうベッドの骨組みのようだ。

「こんな直撃で生きてるとか、木戸さんどんだけ生命力あるんだ・

・・あれ?」

ひよこは鉄パイプをしげしげと眺め、

「木戸さん、あんた運が良かつたね」

気がつくと、階下に救急車が到着している。ひよこは木戸を背負つ
と、救急隊員に引き渡すために歩き出した。

3月4日。

真っ白い壁に天井、床。4畳ほどの空間にあるのはベッドとトイレが1つずつ。部屋の主は1人だけ。

24時間のうちのほとんどをこの部屋で過ごすといつのはざれだけ暇なんだろうか。想像したくもない。

こいつも好き好んでこんな部屋に住んでいるわけではなく、俺だって好きでここにいるわけじゃない。仕事をしているだけだ。

部屋の主は重罪人で、俺は壁一枚挟んだところで、椅子に腰掛け雑誌を読んでいる。

決してサボっているわけではなく、独房の看守というのは暇なのだ。交代まではこうやって時間を潰していないと精神的に持たない。とは言つても、部屋の主がよく話しかけてくるお陰で、最近は暇では無くなってしまった。

「看守、今何時だ」

独房に収容されている罪人、1255番の様子が変だった。日付と時間をしつこく聞いてくる。

以前は特に問題も無く、現に今も行動に目立った問題は無いのだが、ここ1週間程前からえらく時間を気にするようになつた。

俺は今日何回目になるかわからない動作で腕時計を確認する。午後17時57分。そろそろ晩飯の時間だ。

「そうか。あと数分で私は自由の身だ。貴方にも、世話になつた」
妄言も大概にしろ。お前がここから出られるのは、恐らく死んでからだろ？

「看守、今何時だ」

いい加減しつこくなつてきたので、無視を決め込む事にした。飯食
えばこいつも大人しくなるだろ？

18時を回り、食事の時間を知らせるブザーが鳴り響いた。
牢獄の鍵を開けると同時に、看守長が書類の束を持って入ってきた。
またこいつに何か書かせるのだろうか。

書類全てにサインを終えた1255番を食堂へと連れて行こうとする

「おう待て待て。1255番は本日付で仮釈放だよ」

一瞬看守長の言つている事が理解できなかつた。頭にハテナマーク
が浮かぶ。

「容疑が晴れたらしい。冤罪だったそうだ。私も詳しくは聞いてい
ないが」

第一こんな時間に釈放なんておかしいだろ？。もう夜だぞ。

「今まで、お世話になりました。一度ここに戻ることはないでし
ょ？」

「当然だろ？ さて、行くぞ」

頭上のハテナマークが3つを越えたあたりで、看守長と1255番
が並んで独房を後にする。
俺はそれを黙つて見届けたあと、食堂へと向かった。

case · 06 · 錯綜 ·

3月8日。7課会議室。

「ヤス、もういいのか」

「良か無えよ。ただ横になつてソのモ氣持ち悪いしな」

松葉杖をつきながら入室するヤス。

「両足と腹ブチ抜かれた翌日によく動けんなあ」

直毅は煙草をふかしながら銃の手入れをしていた。

「怪我の治りは早えからな。お前らだつてそつだろ」

「まあねー。それにしてもヤスが傷負つたつてのが疑問なんだけど
もむ」

パソコンと向かい合ひ、何やら忙しくキーボードを叩いているひよ
こは、皿を呑わせずに心えた。

「俺もわからんねえよそんな事。だからわざわざここに来たンだらう
が」

「みんな揃つてるね。ヤス君、怪我は大丈夫かい？」

ジョニーは開口一番にヤスの怪我を心配した。

「これが大丈夫に見えんなら病院行けよ。頭のな」

「大丈夫そうだね。それじゃあ昨日の事件について色々報告するよ」

ヤスは大きく溜息をつき、自分の机の上に腰掛ける。

「まず木戸についてだけど、一命は取り留めた。ただ意識が戻るまでは、手を出せないね」

「俺が見つけた時点で呼びかけに反応してなかつたからねー。下手するとそのままかも」

「あいつの証言はしばらく期待できやうに無い、か。何か知っている口ぶりだったが」

「でもあいつは夢ん中なんだろ?今は起きるのを待つしかねえな」

「・・・彼は僕が美月、いや、七峰に関して調べている事を知つてた。それに施設襲撃についても何か知つてゐみたいでした。起こそうと思えば無理にでも起こせるんじゃないですか」

「武信、気持ちはわかるが」

「彼の証言は重要だと考えます。事件の真相に近いのは恐らく彼なんです。ここには薬でもなんでも使って木戸に直接話を」

「武信ーーー」

室内に怒声が響き渡る。

「怒鳴ンねえで貰えるか。傷に沁みる」

「・・・何だよ、優輝」

「仕事に私情を持ち込むな。木戸は意識不明で、今は他を調べるしかない。そうだな?」

「・・・でも」

「他にも色々気になる事あるんだし、とりあえず木戸のことは後回しにしてよ!」

ひよこが話を切り替えようとすると、空気を読めない男が一人。

「まあ気持ちはわかるぜ武信ちゃんよお。もしかしたら死んじまつた美月の事についてわかるかも知れねえんだもんなあ・・・あれ?」

言つてはいけないことを口にしてしまった直毅に対し、全員が目を逸らす。武信を除いて。

「・・・生きてるよ、美月は」

2年前の夏、国営の研究所で事故があった。

研究所の一部装置が故障し、研究者と作業員33名が装置の爆発に巻き込まれた。

爆発の規模が大きく、研究所は全壊。事故に遭った33名のうち死亡が確認されたのは29名、行方不明者が3名。この3名は爆心地

付近にいたらしく、人の形すら残さずに文字通り“消滅”した。生存者はたったの1名。その生存者が武信であり、行方不明者のうちの1人に、武信の大切な人がいた。

「あの、話進めてもいいかな？」

ジョニーが引きつった笑いを浮かべている。助けを求めるサインだ。

「木戸を襲つた犯人についてだが」

冷や汗を流す直毅と、それを睨む武信を放置し、優輝が事件報告を進めた。

「誰も姿を見ていないというのは本当か？」

「ああ。どういう能力かはわからないけど、署の入り口から木戸の独房までの道のりに居た全ての人間が、彼女の姿を見ていないと証言しているね。ただ、監視カメラは誤魔化せなかつたみたいだけど」

ジョニーがリモコンを操作すると、スクリーンに監視カメラの映像が映し出された。

「思いつきり映ってるねー。あつたかくなってきたのに随分厚手なコート着てる」

「フルフェイスのおかげで顔が見えねえな。顔が確認できる映像は無いのか？」

「残念ながら。だからこの中で唯一顔を見た優輝君に頼るしかないんだけど・・・」

言葉を濁す。

「見たのは見たんだが、よく思い出せない」

「オイオイそりや無えだろ。追い詰めてメット取らせたのは誰だよ
オイ」

最初に抗議の声をあげたのは直毅だった。武信の威圧からは解放されたようだ、どことなく生き生きとしている様に見える。

「すまない。犯人の攻撃で軽く頭打つたらしくてな、ぼんやりとか覚えていないんだ」

「・・・特定に繋がるような特徴とかは無かったの？」

「そうだな・・・身長が低めで、茶髪だったくらいしか

「・・・顔は?どれくらいの歳だったか、とか」

「確か俺達と同じくらいか、それよりも少し上くらいだったはずだ」

「身長低い茶髪女なんかじにでもいるじゃねえかよ。他にはなんか無いのか?」

「・・・すまない」

既に銃の手入れに戻っている直毅の間に、答えを持ち合わせていなかつた優輝は顔を伏せた。

「ただ、犯人の能力については大体わかつた。恐らくは指定能力者、それも大規模な物理干渉型だろう」

指定能力者は大きく分けて2つの括りがある。

1つは直毅のような他人に幻覚を見せたり、武信の催眠のような精神干渉型。こちらは人に作用する。

もう1つはこの木戸襲撃事件の犯人のような物理干渉型である。物理干渉型は前者に比べて絶対数が少なく、何故触れずに物を動かせるか等のメカニズムが解明されていない。

「それなら木戸のベッドが浮いたのも説明つくってわけか」

「俺の時は駐車場の車が飛んできたからな。ほぼ確定だろ?」

「そうだ、聞きてえことがあったんだ。ジョニー」

ヤスは組んでいた腕をほどき、ポケットから煙草を取り出した。

「俺を撃った野朗は誰なんだ?」

「それについても、かなりおかしな事になってるんだけど」

ジョニーが眼鏡をなおし、説明を始める。

「まず優輝君の持っていたのはグロックだったよね?」

「ああ。それがどうした?」

「いや、確認だよ。あの時優輝君は発砲していないもんね。そして駐車場には優輝君と犯人、それに遅れて到着したヤス君しか居なかつた」

「あの場で発砲したのは犯人とヤス君の二人だけだ。ヤス君はベレッタ、犯人はUZIだったよね？」

「もつたいつけんなよジョニーよお。何が書いてえんだ？」

手入れを終えた直毅は3本目の煙草に火をつけた。いよいよ会議室が煙たくなってきている。

「まあまあ。犯人は適当に撃ったけど、ヤス君はその時点では弾に当たらなかつた」

「全部避けたからな。ンで俺が至近距離で三発ブチ込んだが、どういうわけか一発も当たつてない」

「そしてその直後に、ヤス君は銃撃を受け倒れた。これで間違いないよね？」

「その確認と俺が撃たれた事になんの関係があんだけよ」

「大アリなんだよ。ヤス君、結論を言つよ」

ジョニーは少し間を空け、切り出した。

「君の体内から発見された銃弾。あれは、君の銃のものだ」

「・・・ジヨー、いくらなんでもそれは無いんじゃないかな」

流石の武信も呆れているが、ジヨーは続けた。

「状況証拠からみても、それしか考えられないんだ。ヤス君の銃の発射痕と、体内から摘出された銃弾の痕が一致した」

全員、言葉も出ない。その理屈だと、ヤスが自分で自分を撃ち抜いた事になってしまつ。

「「」の事について、ヤス君はどう思つ?」

「なるほどねえ」

一呼吸置き、

「どうして言われても、つまりそういうことなんだろ」

一番最初に納得したのは意外にもヤスのようだった。

「俺が撃つた弾が何か知らねえけど俺のわき腹と両足に当たつた。
簡単じやねえか」

「ヤス、お前自分で何を言つていいかわかつてゐるのか?」

優輝が本氣で心配している。

「おひ。とにかく考えてても仕方無えし、俺は帰るわ

ヤスはそそぐと帰り支度を始め、

「優輝、病院まで送つてけ」

「あ、ああ・・・」

言葉を残し、優輝と共に会議室を後にした。

「あのー、何か思い出したりしたら報告してね・・・」

ジョニーが言い終わると、会議室に元氣いっぱいの沈黙が訪れる。

「ジョニー先生、質問でーす」

ひよこがゆっくつと手を挙げる。

「はー、ひよこ君」

「話についていけないでーす」

「大丈夫、僕もだ」

会議室を出てから今に至るまで、俺はずつと確かめたいことがある。当然だがさつきの会議室での茶番のことである。

自分の撃つた弾が時間差で自分に命中するなど、他者の介入無くして起こる現象ではない。それはヤスもわかつている筈だつた。それを踏まえたうえで、あの場でジョニーを深く追求しなかつたといふことは、何か心当たりがあるはずだ。

いい加減車内の沈黙にも耐えられなくなり、俺から会話をはじめる。

「なあ、ヤス」

「なンだよ」

「うやつてヤスと1対1で会話するのは、中学以来だつた。色々と思い出話に花を咲かせて気分を紛らわしたかったが、空気がそうさせてくれなかつた。

「お前は、やつきの説明で本当に充分だつたのか？」

ヤスの性格上まともには答えないだろうが、会話からヒントを得られるはずだ。

「全くもつて完璧に理解したけどなあ。簡潔な説明で助かつた」

「これじゃ足りない。もっと突っ込んだ聞き方をしないと駄目らしいな。

「つまり、ヤスは自分で自分を撃つたつて事か？」

「そのつもりは無エンだけどな。結果的にそつなつたつてことだな

「やうか・・・」

充分だった。恐らくヤスは、自分の身に起った現象の原因を理解している。

それを俺達に話さないという事は、確証を得ていなか、あるいは隠さなければならぬ理由があるか・・・。

「ところで優輝よお

思考を中断される。

「お前、ホントに犯人の顔覚えてねえンかよ

やはり、聞かれると思っていた。俺はあらかじめ用意していた答えを口にする。

「ほんやりとしか思い出せないな。思い出せたら捜査も進展しそうなんだが

嘘だ。俺は犯人の顔をはっきりと覚えている。明らかに俺達よりも年下、高校生くらいの顔つきだった。

本来このような行為は許されるものではないが、何分顔を見たのは俺だけだ。今のところは追求されないで欲しい。

問題は顔では無い。犯人の着ていた服、それが学生服であり、その学生服に見覚えが無ければ、俺は正直に話していただろう。

「派手な爆発だつたかんな。無理も無えわ

「・・・すまないな

俺達の付き合いは短くない。俺がヤスの嘘を見抜いたように、ヤスもきっと俺の嘘を見透かしている。

それはあつと、他の7課の面々も一緒に。わかつていて尚、深く追求しようとしない。

「まあ、お互に様つて事だ」

「ああ。何かわかつたら話すよ」

それきり、会話は無かつた。

「着いたぞ」

「おひ。助かったわ

下車したヤスは病院へとゆっくり歩き出すが、その4倍くらいのスピードで、病院の中から看護婦がすっ飛んできた。

「ちよっと井上さん！駄目じゃないですか勝手に病院抜け出しちゃ

！」

「いやーすこいませんねえ。運動したくなっちゃって」

「絶対安静なんですよー。無理に動いたら傷に障りますから、早く病室へ」

ヤスは引き摺られるようにして病院へと連行されていく。

あいつが苗字で呼ばれているのを久々に聞いた気がするな。そりゃ今は看護婦じゃなくて看護師って言つんだったか。

俺はそんな取りとめも無いことを考えつつ、2つの影が消えていく

のを見送った。

3月4日。

飯を中断し、仕事が無くなつた俺は刑務所内を散歩していた。軽く社内二ート状態だ。

1255番は何故こんな時間に釈放されたのか。何故あいつは釈放されることを予言したのか。それが無性に気になつた。

飯を食つてゐる最中に色々と考えたが、結局答えは出ない。看守長に直接聞いてみるしかないか。

看守長の居場所を同僚に聞くと、どうやらひつこせつを散歩に出向いたらしい。暇なのは誰でも一緒なのだろうか。

正面の門から外に出て、あたりを見回す。看守長は・・・いた。横断歩道の向こう側だ。何故か書類の束を抱えたまま歩いている。

今を逃せば2度と真実を知ることが出来なくなる気がする。それと同時に、真実を知ってしまうと、何かとてもまずい事になる予感もあつた。直感つてやつだ。

俺は歩を早め、気がつくと走り出していた。理性より好奇心が勝つた。

看守長との距離がみるみるうちに縮まっていく。20メートル、15メートル、10メートル。不意に聞こえるブレーキの音。

突然、目の前から看守長が消えた。追い抜かしたのだろうか。

下を見ると、空を見上げた看守長と目が合つた。その眼は驚愕に見

開かれている。

そもそも何故下を向いたら目が合うのか、地面に落ちてはじめて気がついた。どうやら轢かれたらしい。

看守長が駆け寄ってきて必死に俺の名前を呼んでいるが、そんなことは知ったことではない。手元の書類を凝視する。

釈放書類の記名欄。囚人番号1255番。囚人名・井上 仁。どうして釈放されたのか。聞こうにも声が出ない。叫ぶ看守長と、駆け寄ってくる車の運転手。書類。自分の血。それが俺の見た最後の景色だった。

case · 06 end

よく晴れた毎、木戸の取調べをブツチして靈園まで歩いて来た。最初は墓の位置すらわからなかつたもんだが、ここ最近通い詰めているおかげで迷つことも無くなつた。目を瞑つてでもたどり着ける気がする。

比較的新しめの墓石の前で荷物を下ろす。そこは俺も入る予定の墓であり、端的に言つと俺の先祖達が眠る墓だ。

その行為を死者が見ているとも思えないが、今はもう、いつする事しか出来ない。

俺は墓に向かつて両手を合わせ、花を添える。せめてもの弔いのため。

あまりにも唐突に、理不尽に奪われた二つの命に向けて、祈つた。

そして命を摘み取つた元凶の再来も、また唐突だつた。

「保明、久しぶりだな」

振り向くより早く手が動いた。俺の右手に握られたベレッタは、今まさに声を発した者の命を摘み取ろうとしている。

「墓前だ。そういう真似はよせ

銃を向けられて尚、二つは動じない。俺が撃たない事を知つていいのかのよつ。

「撃たねえよ。俺はアンタとは違つンだ」

銃は向けたまま、ゆっくりと振り向く。

黒いスポーツ狩りで俺よりも頭一つ背が高く、顔は齶れ、全体的に
くたびれたような印象の男。そして一度と顔を合わせまいと思つて
いた男が、そこに居た。

case · 07 - 絡まる意図 -

「なンでテメエがここに居る。わざわざ捕まりに来たか」

「顔を見に来ただけだ。保明も釈放の情報は掴んでいるだろ?」

「気安く人の名前呼んでンじゃねえよ犯罪者が」

井上仁。無理心中を図り、自らの妻と長男を殺害。その後次男も殺害しよびとするも、何らかの理由により逃走。逃走中に通行人を1人殺害。

事件発生から14時間後に警察に出頭し逮捕。無期懲役が言い渡された。ところが3日前、冤罪と判明し釈放。

「おかしいよなあ今になつて釈放なンてよお。世の中おかしい事だらけだと思わねえか?なあ」

能力研究施設を襲撃した奴等の要求が、囚人の開放。そのリストに入っていた1人がコイツだつた。
その要求が出た直後に釈放。どう考へてもタイミングが良すぎまる。出来すぎている。

「確かに、この世界はおかしな事だらけだ。どんどんおかしくなつていく世界を、檻の中から眺めていた」

「妙な言い回しすンな。イライラするンだよ」

「こいつとはもう会話しない方がいい。でないと引き金を引いてしまいそうだ。」

「俺の前から消える。一度とツラ見せんじゃねえ」

「まだ時間はある。父さんはせめて墓参りだけでもと」

見ると、左手に「コンビニ袋を提げている。供え物だろうか。

「どの口が墓参りとか言つてんだ、アンタにその資格は無いよ。そ

れに

「アンタはもう、俺の父親じゃねえ」

「・・・わづか」

仁は少しだけ悲しそうな顔をして、背中を向ける。

「一つだけ、助言しておく」

「病院には行かず、街へ戻れ。でないと優輝君が死ぬ」

瞬時に頭に血が上る。妄言も大概にじろよこじつ・・・!

「いい加減にしろ!! テメエはいつもわづかってワケわからんねえ事を・・・」

待て。どうしてこいつは俺がこの後病院に行く事を知っている?

「犯人は現時点では絶対に捕まえられない。下手な事をすれば、保明が怪我をする」

断片的に告げられる、警告に近い助言。

「有り得ねえよ。アイツ等は今取調べ中だ」

それっこいつは、能力者じゃない。

俺ですら見えない未来の事象を、こいつは予言した。有り得ない。

「なら確認するといい。尤も保明は今日、携帯を洗面所に置き忘れているから無理だろ？」「

得体の知れない冷気のような感覚が、全身を這い回る。

その感覚は恐怖、あるいは疑惑となり、意外な程に俺を冷静にさせた。

知られている。俺しか知りえない事をこいつは知っている。

「・・・何が狙いだテメエ」

「助言だ。とにかく街に行け。走り回つていれば、自ずと先は見えてくる」

それきり仁は振り返ることなく、来た道を引き返していった。

「何なんだよ糞ツタレが」

銃を仕舞い、仁の言つていた事を整理する。

俺が街に行かないと優輝が死ぬ。下手すると俺が怪我する。優輝がへマして死ぬのは有り得る話だが、俺が怪我する事は100%確実に有り得ないと言い切つていい。

なんせ未来が見えるからな。正確には未来を予測しているだけだが。広範囲に隙間無く爆撃でもされない限り、全て防いでみせる。

「まあ、どの道昼飯時だしな」

あいつの言つ事を鵜呑みにするわけじゃないが、病院に行くのにも

街は通らなければならぬ。

誘導されていようがなんとなくシャクに障るが、俺は踵を返し、街へと走った。

そのあとはまあ、知つての通りだ。

3月9日。第一病院304号室。

「釈然としねえ」

ベッドの上でノートパソコンをカタカタ言わせながら、ここ数日の出来事を整理していた。

井上仁が突然釈放され、木戸が襲撃される事を予測し、俺に助言。結果、俺は自分で自分を撃つて負傷。これらから導き出される答えは一つ。

井上仁は、木戸襲撃に加担している。

これなら事前に襲撃を知ることが出来る。木戸を始末、ついでに俺等を殺すことで円卓の騎士について詳しく知っている奴等を一括削除、ゴミ箱へポイだ。

その場合釈放の手引きは騎士連中が手配したことになる。あいつ等の素性がわからない以上、有り得ないとも言い切れない。

他の可能性も考えられなくは無いが、どれも納得のいく理由がつかない。現状で答えを出すならこれがベターだろう。

ただわからない事が一つある。俺の負傷の原因だ。
俺が撃つた弾が時間差で俺に当たった。アホくせえ。んなわけ無えだろ。

犯人に向けて撃つた銃弾が全部俺に返ってきたのは事実だが、数秒間を空けて飛んでくる意味がわからない。

恐らくは何らかの能力の介入だが、あの場には俺と優輝、それと犯人しか居なかつたことは後の調べでわかつていい。

犯人の能力と考えるのが妥当だろうが、実はどう考えても説明のつかない現象が、あの場で起こっていた。

消えたんだ。俺の撃つた弾が、どこにも当たらずに、完全に消滅した。

そして気づいたら背中から飛んできた。犯人にこんな芸当が出来るんだとしたら、最初からソニーで蜂の巣にされてただろう。
突拍子も無いことを考える。現場のはるか遠方から俺の撃つた弾だけを消し、運動量を変えずに運動の向きを変え、狙つた位置に出現させる。そんな事出来る奴なんか居るのか・・・？

不意に、携帯が震動する。心臓と一緒に体が跳ねた。
俺の未来予測は、人間の動きにのみ作用するらしい。

犬の動きはどうやっても予測できなかつたし、明日の天気もわからぬ。何より携帯の着信ごときには驚くくらいだ。

普段起きることが予測できている分、こういうイレギュラーな事態にはかなりビビる。

見ると、ジョニーからの着信だった。

『ヤス君、調子はどうだい？』

「大分落ち着いた。能力者ってのは回復能力もフルパワーなんだな。
今週中にはもう退院らしい」

『君はここ入つてから大きな怪我してなかつたからね。自分の回復
力に驚いたろ?』

「そりや三日かそこいらで傷塞がつたら誰だつて驚くだろ」

『それもそうか。木戸については、何かわかつたかい?』
『そりゃあいつの経歴漁つてたんだつたな。報告しとくか。』

「ああ、4課の情報網もザルだな。こんなンも見抜けねえとか給料
減らせよ」

「どうやら木戸は一八歳から一貫して日財勤務らしい。教師つての
はウソだ」

『だらうとは思つたけど、よく裏が取れたね』

『生憎暇だからな。ここ十年の教員リストと、木戸の周辺情報を片
つ端から調べた』

『君の情報収集能力には舌を巻くよ、4課に入つたらどうだい?』

『その4課から俺を引っ張ってきたのは誰だつたか思い出せよ』

『そりだつたね』

糞野朗のせいでお先真つ暗だった俺を拾い、4課に入れたのは他な

らぬジヨニーだった。

『「この事件は何か臭う。長引きそうだし、今のうちにやつくり休んでね』

「とか言いつつパソコン渡すあたり抜け日無えよなジヨニーは」

『給料分は働いて貰わないとな。ただ、無理はしなくていいんだよ?』

「わかつてゐる。今は体の方は休ませて貰うわ。そろそろ切るぞ!」

『お大事にね』

再び思索にふける。

釈放の根回し、木戸襲撃の意図、井上仁の予言めいた助言、一度消えた銃弾。

全てを関連付けて考えるのも間違つていいかも知れないが、これらは一貫性のある事柄な気がしてならない。

療養中の宿題は、思つたより難易度が高い。

洗面所に向かい、顔を洗う。寝起きは最悪だった。頭が痛む。ひどい吐き気に見舞われたがなんとか堪え、病室のベッドへと戻る。今見た夢の内容はもう覚えちゃいないが、症状からして昔の思い出でも引っ張り出してしまったんだろ？。

過去を振り返つたところで得られる物は少ない。問題は、今どうするかだ。

木戸の身辺調査は経歴を偽つてはいる以外、目立つたものは見つかからなかつた。ジヨニーの報告によると木戸襲撃犯の足取りも掘めていないらしい。

「まあ、なるようになるか

そろそろジヨニーの定時連絡の時間だ。報告することになったら、俺の退院が明日に迫つていてる事くらい。要するに何もわかつやしない。

退院したらまず煙草買わないとなあとか、ラーメン食いたいなあとか呑気に考えつつ、着信を知らせる携帯電話を手に取つた。

「もしもし、ジヨニーか

今日の会議室は普段以上に空気が張り詰めており、それに比例して煙が濃い。

長机を2つ向かい合わせにしてくつつけ、一同は麻雀に興じていた。

「・・・はー」

「よこしょー」

「よしきたつ！ リーチ！ ！」

「通らん。ロン、白のみ」

「テメエー！俺の四暗單騎をそんな『!!』で・・・！？」

「切り方が判り易いんだよ直毅は。自分の手しか見えてない」

「そもそも単騎ならリー棒投げる必要無いナゾねー」

「ヤレはお前アレだ、ゲンカツギツツーの？」

「・・・田立ちたいだけでしょ」

「おつ武信ムカツクなお前。正解だよ↑××k野朗

「もつと言つと、それを切らなくともツモでアガれただ。ツモ三暗トイトイだ

「あ、あどいつもこいつもつるせえ！俺はリーチと役満しかわからねえんだよ！！」

灰皿は既にフィルターで溢れかえり、灰皿代わりの空き缶も既に人數分消費している。いよいよもつて部屋の視界と空気、直毅の言葉遣いが悪くなっていた。

「あの、ちょっとといいかな？」

「ん、びつじたジョニー。次で替わるか？」

「いや、もう時間がね・・・」

掛け時計を指差すジョニー。煙でよく見えないが、短針が重力に従つて真下を向いているあたり、恐らく18時を回っている。

「おいおいもうこんな時間かよ。俺等何時間遊んでんだ？」

「聞き込みやら調査やらが終わってからだから、5時間くらいかなー

「休日とはい遊びが過ぎたな。帰るぞ」

優輝は雀牌を手早く片付けると、我先に帰り支度を始めた。

「みんな車だつけ？俺今日は歩きだし先帰つてるわー

「あーつ片付けくらじしてけよな・・・」

ひょいには直毅の尤もらじに意見を聞き流し、それをひとと会議室を出て行く。

「しかし煙がひどいな。ジョニー、換気扇はまだ直らないのか？」

「一応回してはいるんだけどね。調子悪いみたいだ」

天井に設置された換気扇は稼動こそしているが、滞留した紫煙を運ぶことを放棄している。故障しているのはこの部屋だけではないようだ、ビル内でも問題視されつづった。

「・・・動いてるって事は多分フイルターだよね。今度調べてみる？」

「だなあ。まあ片付けも終わつたし、今日のところは帰らつや」

各自帰り支度を済ませ、エレベーターで駐車場へと向かう。

「帰りにどこか寄つていいくかい？ 君達昼飯抜いてるみたいだし」

ジョニーの提案に皆は皿を輝かせると、

「いい考えだな。ラーメンでも食つに行くか」

「・・・最近出来たところ行ってみる？ 隊舎とは逆方向だけど」

「つづても俺70円しか無さよ。ジョニー頼むわ」

「はーはー。給料から天引きしておくれ」

「それくらいこ出してくれてもいいだろお・・・？」

「駄目だよ。お金に関してはしっかり管理しないとね」

他愛ない会話をしつつ、ジローはラーメン屋へと車を走らせた。

じぱりくぶりのラーメンは、スープの一滴まで腹に染み渡った。

最近はラーメン屋が乱立し、その度に足を運んでいたのだが、あれこまで美味しい塩ラーメンを食べた記憶がない。

「いやーたらふく食つた

直毅も満足そうに腹を撫でている。3杯食つた上にライスもつければ腹も満たされるだろう。

「あの店は久々の当たりだったな。また行つてみよう

「・・・せうだね。今度はひょいとヤスとぐんまも連れて

「あー、みんな着いたよ

ジローの顔に、ふと顔を上げる。フロントガラスの向こうに隊舎が見えた。

ここ数日は働き詰めで、まともに休日を過ごしていなかった。たま

にはじつやつてゆつくり過いするも悪くは無いな。

俺達は車から降りると、ジョニーと軽く挨拶を交わした。武信と直毅は疲れていたらしくさつさと隊舎に入ってしまったが。

「いつも済まないなジョニー」

「いいよ。僕は現場だと大して動いてないからね。休日くらいは足になるよ」

人一倍働いておいて、嫌味無くこの台詞が吐ける人間。それが彼だ。この人の下で働いてもう3年近いが、未だにジョニーには勝てる気がしなかつた。

「その分現場ではこき使つてくれ。割に合わん

「義理堅いのもいい事だけど、先輩の厚意は素直に受け取つていひんだからね？」

不意に響く携帯の着信音。ジョニーのものだ。

「そういえばヤス君に連絡いれなかつたか。それじゃ優輝君、明日までゆっくり休んでね」

携帯を開きつつドアのウィンドウを閉めたジョニーは軽く手を挙げ、車を走らせた。俺はそれを見えなくなるまで見送る。休日のよく見るやりとりだった。

夕陽に向かう車のシルエットの頭上、歪な形状の塊が落ちてきたの

を、俺は見逃さなかつた。

塊は車に直撃し、それきり車は動かなくなつた。
徐々に落ちていいく夕陽が車だったものの影を伸ばし、俺の足元にま
とわりつかせる。

それはさながら、血溜まりのよつても見えた。

3月15日。武警隊舎前。

「ジョニー！」

俺は車へと全力で走る。呼びかけには、すぐに反応が返ってきた。

「僕は大丈夫だ！ヤス君が”見て”くれている！」

ヤスが、見ている。

人間が見守るだけで状況を変える事など到底出来やしないが、その
”見ている”人間がヤスならば、話は変わってくる。
ジョニーはそのまま路地へと足を向け、走り出した。急いで後を追
う。

車の脇を走り抜ける時に、車へと落下した塊を横目で追う。どうやら工事現場の廃材を寄せ集めたものらしい。

路地では流石に大きなものを降らせるのは無理なようで、先程のような廃材が降つてくる事は無かった。

しかし走っている最中にも降り注ぐゴミ箱、鉄筋、ガラス片、物、物、物。

ジョニーはそれを横つ飛びで、立ち止まって、時には道を変えて避ける。携帯を耳から離さないあたり、ヤスの指示は的確なのだろう。

しかしヤスの能力は、実際に肉眼で物を捉えていないと発揮できないはずだった。こんな狭い路地の中、ジョニーを常に見続けていたら、それとしたら、それは俺が空だけだ。

見上げるが、見えるのはビルの窓と暗くなつた空だけ。どこから見ている・・・?

ひとしきり考へるが答えは出ない。それよりも今は、この状況を打破する事が重要だ。重要だが、有効な打開策が無い以上、今はヤスに頼つて走り続けるしか無い。

どうしてこんな事になつてゐるのか。考へられるのは襲撃。それもかなり規模の大きいものだ。

手で触れずに物を投げる。あるいは吹き飛ばす。こんな芸当が出来る普通の人間は居ない。

そもそも能力者の仕業だったとしても、これを引き起こす程の能力を持つた者を俺は一人しか知らない。

木戸を襲つた少女。立体駐車場で、車を吹き飛ばした少女。恐らくこれは彼女の能力だろう。だとして、何故ジョニーを狙つている?

彼女とジョニーとは何ら接点が無いはずだ。直接彼女の姿を見たのは、俺とヤスだけ。特に俺は、はつきりと顔を見ている。

そして、気づいた。何故俺が狙われなかつたんだ・・・?

15分くらい走つただろうか。狭く入り組んだ路地を全力疾走しているため、さすがに息があがつてくる。さっきのラーメンが逆流しそうになるのをなんとか堪え、必死でジョニーの後ろに食らいつく。

幸いなことに姿を見失つたとしても、ジョニーの通つた道は一目見ただけでわかるようになつていた。明らかに荒れているのである。

追跡開始から20分。遂に終わりが見えた。

辿り着いた先は海に面した倉庫街。大川製鉄所制圧の時に通つた道だ。海に面しており、近くにはコンテナや資材を積んだ船が停泊している。

その道の中央に人影が2つ。1つは息を切らしたジョニー、もう1つは、

「食後の運動つていうのもたまには良いもんでしょう？」

黒いフルフェイスを被つた小柄な姿。以前と違つのは、上着が武長の白いダッフルコートという点だらうか。

「さすがに、ちょっと、ハードすぎると、思うよ……」

「それにしてもすごいね。ウチの攻撃全部避けてここまで来られるなんて、ちょっと想像してなかつた。まるで未来が見えてるみたい」

「まるでじやなくて、本当に見えているからね」

ジョニーは息を整え、携帯に話しかける。

「ヤス君ありがとう。助かつた……あれ、切れてる」

ズレた眼鏡をおしつつ、ヘルメットの少女と対峙した。

「優輝君、この人が木戸を襲つた犯人かい？」

ヘルメットを外さないことににはわからないが、体格や声からして恐らく本人だろう。俺は頷く。

「ありがとうございます。さて、貴方を公共物破損、及び殺人未遂の重要な参考人としてこちらで保護します。」同行願えますか？」

「保護つて。逮捕じゃないの？」

少女は飄々とした態度で応じる。

「まだ確たる証拠が無いからね。まあ、調べれば色々出てくるだろう」

「断つたらどうなるの？」

少女がポケットに手を突っ込む。

「・・・断らせない」

俺はベレッタを取り出し少女に向かた。やはり子供に銃を向けるのは抵抗があり、照準が定まらない。

「ダメ。あんたは余計なことしないで」

少女がポケットから取り出したのは、無数の薄い金属片。それらを手から零した直後、金属片は既に俺の眼前へと迫り、銃を構えた両手と顔の手前で静止した。

「カッターの刃だよ。ちょっとでも変なことしたら、それ全部刺さるから注意してね」

少女はけらけらと笑う。

俺はこの少女を少し甘く見ていた。今まで大きな物を適当に飛ばしていった事で、精密な動作は苦手だと踏んでいたのだ。

「さてと。あんたには聞きたい事があるの」

少女は「一トの背中からCNNを取り出し、ジョニーへと向けた。

「奇遇だね。僕も君にいくつか質問があるんだ」

「ダメ。ウチの質問が先だよ」

「ウチ等はね、人を探してるんだ。脚本家さん。知らないかな？」

質問の意味がよくわからない。何かの隠語だろうか。
ジョニーも同じようで、少し考える素振りを見せた後薄く笑い、

「ああ、知ってるよ。どうして僕が知つてると判つたのかな？」

涼しい顔をして嘘を吐いた。

「そんな事はどうでもいいの。どうに届けるの？」

「簡単には教えてあげられない。まず僕の質問に答えてくれたら教えるよ。約束する」

「・・・まあ、どの道あなたは地獄行きなんだし。いいよ。何が聞

きたいの？」

少女は案外単純なようで、容易くジョニーの口車に乗せられている。時間稼ぎをしてくれている間に打開策を考えなければならない。ここから少女まで一〇メートル弱。銃撃すればまず外さない距離だが、迂闊に発砲は出来ない。下手をすればヤスの一の舞だ。押さえ込むにしても、カッターの刃が邪魔だ。二の二つの問題をどうにかしなければ……。

「まず君の能力についてだ。発射された銃弾を消したりする事は可能なのかな？」

随分とストレートに聞いたものだ。交渉術には詳しくないが、こういつ時はもつと会話を引き伸ばすべきなのではないかと思つ。

「はあ？ 出来るワケ無いじやんそんなの」

少女が呆れたような声を出しているが、返答に意表を突かれたのはこちら側だった。

「なら、銃弾の軌道を変えたりとかも出来ないのかい？」

「当たり前じゃん。そんなん出来たらウチ無敵だし。マジ意味不なんんですけど」

ならばヤスが負傷した説明がつかなくなる。少なくとも彼女の能力では無いらしい。

とにかくこれで第一条件はクリアされた。発砲は、恐らく可能。次は二の刃をどうするか。

「じゃあ次の質問だ。何故僕は君に殺されかけているのかな?」

「質問は一回までだよ。それに、あんたは罪人なの。自分が一番よくわかつてるでしょ?」

「人に怨まれる覚えは結構あるからね。職業柄」

「めんどくさいねあんた。いいから脚本家の居場所を教えなよ。早く

先程までの態度とは打って変わり、少女の声に苛立ちが混じる。当然そんな意味のわからない質問に答えられるわけも無く、倉庫街には波の音と、汽笛の音が響くばかりだった。

「まあいいや、次の人聞くから。さよなら」

少女がトリガーに指を掛ける。

この際負傷覚悟で突っ込んでいこうと覚悟を決め、顔を伏せていた俺は少女へと向き直った。
いつからそこに居たのか、少女の後方に懐かしい顔を見つけた。

「彼に聞いても無駄だ」

随分と痩せたようだが、あれはヤスの・・・。

「・・・井上仁。最優先。殺して!早く!」

少女は「ちぢら」を無視して振り向くと、全力で走り出した。仁に吸い

寄せられるようにして、金属の軋む音と共に、停泊していた船から無数のコンテナが降り注ぎ、埠頭を襲った。

場に動きがあつたことにより、第一条件である刃の問題もクリアされた。

眼前の刃は何よりも速く仁へと向かつていつたが、仁は身体を反らすだけでそれらを避け、少女を引き付けるようにして走り去つていく。

「待て!」

背中を向けた少女の足に向け発砲するが、コンテナの破片に弾丸を弾かれる。おまけにコンテナが埠頭に降る衝撃で搖れがひどい。まともに立つているのも難しい状況だ。

なんとか2人を追おうとするものの、無造作に積み上げられたコンテナに行く手を遮られている。

「くそっ・・・!」

「優輝君後ろだ!」

振り返ると、地面を転がりながら俺達へと迫るコンテナが田に留まつた。

コンテナは地面を削り取る度に軌道を変えている。大きさから見て、直撃すれば大怪我じや済まされない。

右は倉庫のシャッター、左は船。俺だけならば上に跳んで回避できるだろうが、ジョニーは一般人だ。彼を抱えた上で跳ぶと、恐らく高さが足りない。

考えている間にもコンテナは距離を詰めてくる。もう悩んでいる暇は無い。

俺はジョニーの元へ向かおうと後ろを向くが、肝心のジョニーが居ない。

呆気に取られる暇もなく、俺は何者かに襟首を掴まれ、背中から地面に叩きつけられた。

この分だと、俺等が少しでも遅れていれば2人ともお釈迦だったな。俺の記憶力に感謝だ。

「馬鹿、お前が死ぬぞ！！」

ジョニーを抱えたまま倉庫に飛び乗ったひよこが喚いている。

「なンともねえよ」

目の前にでかい金属の箱が迫っているが、俺は特に気にするでもなく、その場に突つ立つたままだ。むしろ下手に動くほうが危ない。コンテナは突如として巨大な8枚の板へと形を変え、俺と優輝の両脇と上方へと吹き飛んでいく。優輝があのタイミングでジャンプしてたとしたら、確実に直撃コースだった。

コンテナ同士の接触音がしばらくの間続き、周囲が先程の静寂を取り戻したあたり、

「そのコンテナだけ傷んでたのかねー。バラバラやん

「「JWちばなんとも無いけど、お一人さん大丈夫かい？」

ひよこが倉庫の上から頭だけ出して様子を伺っている。

「もう飛んでこねえから降りて來い。あと優輝が氣失つてる」

首根っこ掘んで思いつきつ倒した影響か、優輝は地面に伸びていた。

「じつかし派手に散らかしたねー。これ誰が片付けるん?」

積み上げられたコンテナの山を仰ぎ、溜息を漏らすひよこ。ギリギリで追いついたから詳しく述べていながら、どうやらメットの女は井上仁を殺そうとしてるらしい。

「今はそれど「JWちばなん」だ。とりあえずジニアは大丈夫そうだが」「

「ああ、何度も済まないねヤス君」「

「気には入んない。ひよこ、メット女はどう行つたかわかるか?」「

「じつ的能力なら、ある程度の範囲なら索敵可能なはずだ。

「わっかんねーなあ」

拍子抜けする。なんのために連れてきたと思つてやがるんだコイツは。

「いや、途中で偶然会つたから車乗つけただけじゃん？第一ジヨーイの安全確保でそれどこのじやなかつたからさ。それ」「

積み上がつたコンテナを指差す。

「こんなんするほど必死に追つてるなら、荒れてる道を連ればいいんじゃない？」

日も完全に落ち、路地裏は薄明るい裸電球が照らす灯りで、辛うじてその輪郭を保つてゐる。

ジヨニーと優輝は俺達の乗つてきた車に置いてきた。今頃は恐らく状況説明に追われてゐるだろ？

ひよこの言つたとおり、倉庫街から続く道に荒らされた通りを一本発見した。その道を駆け足で追つてゐる最中だ。

「いやー疲れた。ちょっと休まない？」

「バカかお前は。犯人逃げちまつたらどうすんだ」

「もう結構時間経つてるし、どうせ見つからないしそー」

「それでも探すンだよ。仕事だからな

「さすがに休日なんだからやー・・・」

ひよこの愚痴を聞き流しつつ、荒れた裏通りを走る。

始めは遠くの方でガンガン喧しい音が聞こえていたが、それももう聞こえない。逃げられたのか、あるいは物を投げる必要が無くなつたか。

「でけえ通りにびつかつたな。ひよこ、探せるか」

かなりの距離を走つたらしく、街中の表参道まで来てしまつたようだ。

「はこぶー」

軽い返事を返し、田を開じるひよこ。

「いねーわ

「早いなオイ。もつと本氣出せつてンだ」

「出したつて。少なくともその通りに怪しい奴は居ないし、近くの裏通りも至つて普通の荒れ具合だわ」

普通の荒れ具合といつぱん回しが気にかかつたが、突つ込むのはやめておく。

「つー事は、人ごみに紛れて逃げちまつたか・・・」

「どうするん? まだ探す?」

通りに出てみたはいいが、人の流れが早すぎる。これじゃ探しよつも無い。

「いや、帰るわ。走り回って疲れたしな

「だなー。車は現場の人が回収してるだろうし、俺達は直接会議室行こか

肩を回しながら背伸びし、俺へと振り返る。

「といひでヤス、さつきの電話の人についてだけ

聞かれるとは思っていた。何れにせよ、いつかはバレる。

「明日話す。今はまず帰ろうや

「いや、この後絶対召集かかるでしょ

「俺の退院は明日だかんな

「そういう問題じゃ無いこと思つんだわー・・・

ネオンが照らす表通りを、俺達はゆっくりと歩き出す。

3月15日。事件発生から数時間前。病室。

「もしもし、ジローか」

『私だ』

通話を切る。すぐさまホール音が鳴る。よく見ると、ディスプレイには非通知と表示されていた。

『聞いておかないでお前とお前の仲間に不利だぞ、保明』

うんざりする。テレビ番組を調べたのか、井上仁は俺に再びコンタクトをとつてきた。

「なんの用だ。今気分悪いんだわ。主にオマエのせいだな」

『私を邪険に扱うのは構わないが、こちらとしても大事な用件だ』

「さつさと話せ」

また誰か死ぬとか言い出したら今度こそ本当に切ってやるつもりだった。

『3秒後、外の患者同士が廊下でぶつかり、点滴が倒れる』

がちゃん、と音がした。廊下に顔を出すと、どうやら患者同士がぶつかったようで、その拍子に点滴が倒れたようだ。すぐさま周囲を見渡すが、仁の姿は見えない。

「・・・何しやがった」

口にしてみるが、恐らく口音は何もしていない。

『これから私の発言を信用してもらつたまだ。よく聞け保明』

『ジョニー君、と言つたか。15分後、彼に電話をするだけでいい』

「ジョニーか」

アイツの言つとおり、ジョニーからこつもの時間に連絡が来なかつた。

連絡の遅れた理由は、ラーメンを食いに行つていたから。そう聞かされた。万が一の時のために、既に病院のロビーに待機している。

『もしもしシャス君? いやあごめんごめん、今さつきまで

「ラーメン・・・食いに行つてたのか?」

『ここのジョニーの返答次第では、俺が動かなければならぬ。否定の言葉が返つてくることを強く願つた。』

『よくわかつたね。優輝君あたりに聞いたのかい?』

結果は肯定。またしてもアイツの言つとおりになつてしまつた。悔しかつた。信じたくない奴の言葉を信じなければならない事に。そして、これからそいつの言つ通りにしなければいけないという事

実に。ただただ唇を噛んだ。

「今すぐ車から降りな」

『え?』

「今ジミーの車見てる。降りなきや死ねだ

車のドアが開く音。遅れて聞こえてくる破壊の音。自動車事故のそれによ似ていた。

「クソが!!

すぐさま病院のロビーを飛び出し、前方を横切る車に向かって全力で走った。

車の主はすぐこの通りに倒れたようだ、停車と同時に後部座席のドアが開く。

「お姫さん、どうまで?」

運転手は帽子を被るわけでもなく、制服を着ているわけでもない。そもそもこの車はタクシーじゃない。

「ふざけてる場合じやねえんだよひよ!」。隊舎までフルアクセルだ

「なーんかタダ事じゃないね

ドアを閉めた直後、凄まじいGが身体を襲う。けたたましいタイヤ

の音と共に、車は急発進した。

「そのまま路地裏に走れ。携帯は手放さないよつて頼む」

『言われないでもね！ナビゲート頼むよ！』

ひとまず、アイシの指示は通りまでだった。しかし事態を見る限り、これで終わってくれそうも無い。俺は頭を抱えた。

「たまたま病院の近く通ったから寄つてみたんだけど、それか出でくるとは思わんかったわー。どしたん？」

「後でこいつでも説明してやる。今は飛ばせ」

「はいはい。……ん、電話だ。ヤス代わりに出でくれ」

ダッシュボードから携帯をスルーパスで投げるひよ。電話の主はただ一言、

『右に曲がれ』

と告げた。

「ジコニー右に曲がれ！」

『オーケー』

鉄筋が崩れたような音が響いている。

『立ち止まれ』

「一旦止まれ……！」

『了解。つと、危なかつた』

ガラスの割れる甲高い音が耳に障る。

『左だ』

「左に曲がれ……！」

ジョニー側の携帯からは、何かの爆発音やら衝突音が断続的に響いている。

ちなみに今俺は両手で両耳に携帯をあてがい、左の携帯から聞こえた内容を反芻して右の携帯に伝えている。かなりシユールな構図だ。

「ヤス」めん、真剣なんだろうけどギャグにしか見えない

バックミラーに映るひよこの口元が明らかに笑っていた。

「ああもう面倒臭え……！」

思わず携帯を投げ捨てたい衝動に駆られたが、どうにか抑える。今は人命優先だ。

『そのまま直進しろ』

「真っ直ぐだ！」

『つはあ、ツはあ・・・』

『気がつけば暗じい音声は影を潜め、息を切らしたジョニーの吐息と、汽笛の音が響くだけだった。

『これで私の指示はお終いだ。あとまじかいで処理する。ではな

「処理つてどうことだーおこクソ野郎！－」

抗議の声を上げるが、既に通話は切れている。

「やつけんなーージヨニー生きてるかーー？」

返答が無い。代わりに聞こえてきた声に、俺は覚えがあつた。

『食後の運動つていつのもたまには良じもんでしょ？』

ヘルメットの女。木戸と優輝と俺を殺そうとした女。ソイツがジョニーの田の前に立つらし。

つまり俺は、いや仁は、襲撃を避ける指示に見せかけ、コイツの元ヘジョニーを誘導した・・・？

「ジョニー聞いてるか！今すぐそこから離れ・・・」

携帯から鳴り響くアラート。電池切れを知らせる無機質な電子音。

「なんでこの重要な時つて・・・！」

「着いたぞヤス。うーわ、車グッシャグシャやん。なにあれ

車を停止させ、降りて確認しに行こうとするひよこを呼び止める。

「待てひよこー。」から1~5分程度で・・・クソッビーダよー。」

「落ち着けって。俺まだなんの説明も受けて無いんだけど?」

説明なんか今はどうだつていい。15分間全力で走ったとして、行ける範囲は限られる。限られるが、いくらなんでも広すぎる。風漬しへのあたりを走り回ったところで、聞に合つとは思えない。

「ジヨニーに直接聞けばいいだろ?」

「電池切れなンだよ!クソッたれ、いつもなら切れる前に聞いておけば・・・?」

電話の切れる直前に聞いた音。汽笛の音。あれは電車じゃなく貨物船かなにかの音だ。

「港か・・・?ひよこ、隊舎から1~5分全力で走つて港に辿り着けるか?」

「可能。ただ港つつても範囲が広いねー」

必死に仁の方向指示を思い出していく。最初にそここの路地を真っ直ぐ、8秒走つて左、12秒経つてからその次を右、そこから・・・。驚くほど正確に曲がった方向と時間を把握していたため、寒気を覚える。俺はこんなに物覚えが良かつたか?

「すげーな、焦つてた割によく覚えてんじょん

考えが口に出でていたようすで、ひょいと感心される。特に気にも留めずに入り思考を続けた。

「最後に・・・直進だ。ひよー、今の道順を走った場合、着く場所はどこになる」

「港だねー。大川製鉄所の近く」

「いくら聞こえていたとはいえ、頭の中に正確な地図が入っている」
イツも大概だな。

「世の中にはね、自分の代わりに地図を覚えていてくれる有難いものがあるのよ。カーナビって言つんだけど」

指差す先の小さなモニターに、目的地が示されていた。

「多分ジヨーはそこだ。恐らく木戸襲つたヤツに絡まれてる。急ぐぞ」

「よっしゃい」

隊舎の横を全速力で通過し、車は海へ出る道へと進む。

case · 07 end

3月8日。警視庁。

「夜見川課長、事件発生直後の署内にいた者への聴取、完了致しました」

「んー、わざわざありがとー前田さん。で、どうだったの?」

「それが、やはり誰一人犯人を見ていないようで・・・」

「ふーん。前田さんはどう思つ?」

「どう、と言いますと?」

「0点」

「・・・は?」

「その返答、0点。質問に質問で返すのは馬鹿の証拠だ。いいか、少なくとも署の入り口から2階の突き当りまでの区間には少なくとも4人居た。そいつらのすぐ前を犯人が通過してるのが監視カメラの映像に残ってんだ。それについてどう思うか聞いている」

「恐らくは犯人による署の人間への視線誘導か何かかと考えられます。あるいは犯人がチームを組んでおり、外部から能力を使い、犯人を視界から消したものかと」

「よし、それでいい」「う

「へ？」

「今回の不始末の説明、全然考えてなくてさー。助かったよ前田さん

「はあ・・・?」

「ああ後、国が確認できる一般能力者から最重要指定能力者までリストアップしといでね。あとで調べるから」

「直ちに」

それだけ言つと、前田は踵を返して歩いていった。

「はあ。どいつもこいつも無能、か・・・」

一言残り、俺は会議室へと足を向けた。

3月16日。正午。7課会議室。

「んで現場に俺達が着いたら、なんとコンテナが空中浮遊してたつてわけだ。世の中不思議なこともあるもんだねー」

ひよこがわざとらしく驚いた素振りを見せる。

その後俺はヤスに気絶させられ、目を覚ましてからは裏路地を全力疾走中に呼んでおいた応援に状況説明をし、犯人の目撃情報を集め、今に至る。ちなみに徹夜だ。

「・・・ごめん。もつと早く異常に気づけばよかつたんだけど、外出したら2人とも居なくて。携帯も繋がらないし」

「氣にするな武信。仮に着いてきていたとしても、あの状況では何も出来なかつた」

「ンで？犯人見たヤツは居たンかよ優輝」

退院して間も無く駆り出されて不機嫌そうなヤス。

「ヘルメットにコート姿の目撃情報は得られなかつた。路地での音についても聞いたが、不良の喧嘩だと思つて聞き流していたらしい」

「まあ、それが普通だわな」

直毅はふんぞり返つて天井に煙を吐き出している。

「井上仁についてはどうなんだ。優輝と身長同じぐらいだし、結構立つと思つんだがなあ？」

「そつちは1課と2課が追つている。昨日の時点で予約していたホテルをキャンセルし、そこからの足取りは掴めていない」

「なんか派出所から延々ホテル梯子してるっぽいねー。今回の事件より前から追われてるみたいだけど」

ひよこが説明を補足する。

井上仁は派出所から1~2日間、8箇所の宿泊施設を転々としているようだ。そして仁がチェックアウトしてからすぐ、仁の身内と名乗る人物から所在を聞かれているらしい。

「以上、ホテルマンさんの証言でした」

「・・・その井上仁の身内っていうのは、本物じゃないんだよね？」

「当たり前だバカ。アイツは親戚の類とは絶縁してるし、犯罪者を出所早々ストーキングする物好きな身内なンか居てたまるか」

ヤスが冷たく言い放つた。

「ひよこ、そいつらについての情報は？」

「4課が血眼で調査中。まあ、1人はすぐ割れたみたいだけね」

そう言つと、スクリーンにホテルの監視カメラ映像が映される。力 ウンターで何やら話しこんでいる男性。男性が振り向き、顔が見え たあたりで映像が止まった。

金色に染め上げられた短髪、色黒。サングラスをかけており、左耳 に大量にピアスが付いており、土木作業員のような作業着を着用し ている。

「これをあらかじめ拡大したものがこちらになります」

夕方の料理番組のような手際の良さで画面が切り替えられ、男性の 顔写真と、詳細なデータが表示される。

「にいやま あきら 新山晃、所属は公安だねー」

「公安・・・? 同業者じゃねえか。なんでそいつらが仁」を追つてん だ」

武警と公安。業種的にはかなり近いが、能力者絡みの犯罪はだいた いがこちらに回される。反対に一般人によるテロなどは向こうが処

理しているようだが、お互に立場上あまり情報が入ってこない。

「それも調査中。一田一戸で事件は進展しないものなのだよ直毅君」

「わかつてつけどよ。つーかどう見ても土木のおつかやんだらこいつ」

「井上仁が何故公安に田をつけられてるかってのことは後々わかるとして、だ。まず田先の事をどうにかしないとね」

ジョニーが切り出した。

「僕がヘルメットの女に襲われた。事前にその情報を井上仁から聞いていたヤス君が僕を犯人の元へ誘導、一悶着あつた後に井上仁が出現し、犯人は仁を追うために逃走」

これが大体の流れだね、と区切りを入れる。

「まず何故僕が襲われたのかだね。僕自身に心当たりは無いんだけど」

「脚本家がどうとか聞かれていたが、あれについて何か知ってるか？」

「うーん……あの時はその場凌ぎで答えただけだったし、なんなんだろう……」

頭を抱えている。

「それもわかんないけど、犯人の能力 자체もおかしなもんだと思うけどねー」

考へても答えが出ない事を察してか、ひよこが話題を切り替えた。車が潰された場所から犯人と接触した場所まで約8キロ、その間俺達は全力で走っている。人影は見ていないし、気配も無かった。犯人は恐らく高校生程度の年齢と考へると、能力者という条件を入れても、俺達と並走しながら能力を使えるというのはおかしい。しかも現場に着いたとき、犯人は息一つ切らしていないなかつた。遠距離から能力を行使できると考へるのが妥当だろう。

「・・・仮に能力の範囲が8キロもあつたら、僕達の手に負える相手じゃない気がするんだけど・・・」

そんな距離なら狙撃も不可能だ。爆撃機でも張り合えるか怪しくなつてくる。

「しかも2トンのコンテナ何個もぶん回せんだろう？無理だわ。世界の終わりだわジーザス」

範囲が8キロ無かつたとしても、カッターの刃を10メートル程度移動させたり、50メートル先のコンテナを操つたりしている。少なくとも半径100メートルは危険と見ていいだろう。

「話脱線してンぞ。どうして犯人がジョニーを狙つたかつてのもわからんねえが、俺はそれ以上にアイツの行動が終始わかんねえ」

井上仁の行動。ジョニーを犯人の襲撃から救つたかと思えば犯人の元へと誘導し、更に自分を囮にして俺達から犯人を遠ざけた。よう見える。

「予め事件の発生がわかつてたンだ。ジヨニーを助けるだけなら、別に犯人に接触させる必要が無えだろ」

「・・・逆に言つと、助けなくていなら電話かけてくる必要も無いね。仁が優輝やジヨニーを殺そうとしたつていう線は無いと思う」

「ならんでわざわざ優輝とジヨニーをあそこまで連れてつた。逃がすだけなら逆方向でも良かつたろ？が」

「・・・それは・・・」

武信が言葉を詰まらせる。その問い合わせに対する回答を出したのは、意外にも直毅だった。

「会わせた上で助ける必要があつたんだ。どうしてそうしたのかとか聞くくなよ？俺にもわかんねえしなあ」

曖昧な回答だが、今出せる答えの中で最も正解に近いのかもしだい。

ジョニーに死んで欲しいのなら助け舟を出す必要は無い。恐らく最初の車への一撃で事は済んでいたはずだ。
だが助けたにも関わらず、一時的に俺達を窮地に追い込んだ理由。
犯人と俺達が接触する必要があつたのか、あるいは別の理由で・・・。

「ダメだな。いくら考えた所で、答えは出ない」「

俺達は心理学者じゃない。考えるのは別の連中に任せるとじよつ。ヒントが少なすぎるなら、自分達で見つければいい。

「俺達も動くぞ。俺とヤスとひよこは現場に戻つて犯人の手がかりを探す。武信と直毅は「の足取りを追つてくれ」

俺が指示を出すと、各々が調査の準備を始める。

「あの、僕はどうすれば

「待機だろ。よくわかんねえけど狙われてんだひ?..」

直毅はP90を小脇に抱え、マガジンを鞄に詰めていた。何をしに行くかわかっているのだろうか。

「だひうね、ははは・・・

「井上仁は見つけ次第重要参考人として保護しろ。本人に直接聞いたほうが早い」

「…」「ひちほひうするの?大体の搜査終わつているようだけど」「2課と合同で捜査だ。見落としが無いとも限らない

「まあ、部屋に籠つてゐるより動いてた方がマシだわな。行くぞ武信

一通りの銃器を鞄に詰めた直毅は、武信と共に会議室を出て行つた。

「さて、俺達も行きましょうかねー」

「運転は優輝で頼むわ。」こつこつ任せたひりこつか事故ンぞ

「急がせたヤスが悪いだろー!?俺だって普段は『安全運転』で

「言い合は車の中だな。それじゃあジロー、留守番は任せた

「了解。何かあつたら連絡するね

13時30分。車中。

「結局何も見つからねえもんない

「・・・そりだね」

2課との捜査を早々に切り上げた僕と直毅は、街中を車で適当に流している。

仁さんの足取りは未だ掴めず、公安の動きもわからず仕舞い、優輝達の連絡も無い。

「・・・まあ、まだビル出てきてから時間も経つてないから。焦らずこじらへ」

「やうだな

直毅はギアを一段上げると、首都高速へと道を切り替えた。

「・・・ビニが行くの?..」

「いや、やじらへんぐるぐる廻つても暇だな? ドライブ行き合えよ」

「・・・後で怒られても責任取らないよ」

バレねえから問題無えよと言いながら、カーステレオを操作する直毅。70年代のハードロックが大音量で流れている。少しうるさい。

「やうこえばよ。ヤスの事だが

「・・・何か気づいた?」

「いや、あいつの家庭環境のことだ。高校じゃクラスも違ったからどうか知らねえけど、あいつの家仲良かったよなあ? なんであんなことになっちゃったのかって。ちょっと思つてな

あんなことは、恐らく無理心中の話だわ。

「・・・僕も、正直納得いってないよ

ヤスの家は高校の頃も昔と変わらず夫婦円満だったし、兄弟仲も良かった。ヤスの兄さんは、小学生の頃遊んでもらったのをよく覚えてる。

事件前日にも、家族旅行に行くから3日間欠席するつて届けを担任に提出していた記憶がある。その後すぐに、無理心中のニュースが新聞で報道されていた。

「あの時期は平和だったからもつとでかく報道されると思つてたんだがなあ。事件から裁判まで随分静かだつたな」

「・・・ヤスへの配慮じやないの？未成年だつたし」

「そんなんもんかねえ。マスコミはそういうの御構い無しだと思つが

ダッシュボードから無線機を強引に引っ手繩る。

『「ひり4課です。何か進展ですか？』

「7課の武信です。井上仁の無理心中についての記録と、釈放の情報をお部に送つてください。大至急お願ひします」

『了解しました。数分で送信します』

「直毅、「さんが捕まつてた刑務所まで向かつて。早く

「おじおじおい、何だよ突然。何か思いついたか」

「おかしかったんだよ。恐らく、最初から

井上仁。家族2人を殺害した後、通行人を1人殺害して逃走。そして自首。そこで調査は一段落着いた。

そして2週間前に冤罪と判明し釈放。そして釈放についての記事は…。

パソコンに資料添付付きのメールが届いた。4課からだ。

「やつぱりだ。あるべき筈のものが無い」

添付された資料には、現場の詳しい状況、裁判の記録まで事細かに載っていたが、井上仁の釈放についての記事や報道は、一切載っていない。

ヤスと優輝の負傷でこっちに目が向いていなかつた。なんで疑問に思わなかつたんだろう。

「冤罪で投獄されてた人が出てきたんだ、ちょっとくらい話題になつてもおかしくないはずなのに」

「全く何も出てこないつづーのも不自然な話だな。で、どうして刑務所なんだ？」

「釈放の資料。取つてあるんじゃないかと思つて」

「なるほどねえ。了解、ぼちぼち急ぐぜ」

そりゃギアを1段上げ、セダンは首都高速を矢のように駆けていく。

3月16日。13時。隊舎へ続く大通り。

「着いたぞ」

「へーい」

俺がひよことの口論を繰り広げている間に、どうやら現場付近まで来ていたようだ。

潰れた車の残骸は既に撤去されているようで、ヒビの入ったアスファルトだけが昨日の襲撃を記憶していた。

「路地のチエックは昨日のつむに警察と優輝と3課が調べてるし、俺等どうするん?」

「俺とヤスはここから港までの路地をもう一度調べる。ひよこは車で繁華街の方に向かってくれ」

「あれ、一緒に調べるんじゃないの?」

「港から繁華街までの逃走経路を洗ってくれ。仁は人ごみに紛れて姿を眩ませたようだが、犯人がどうやって現場から消えたのかは判っていない」

「了解。んじや適当に調べてくれるわ」

「完璧に調べる。それと車その辺に止めるなよ、あのあたりは路駐してたら五分でタイヤ止めが付くぞ」

「あいあーい」

わかつてているのかわかつていなか曖昧な返事をしながら、俺達は車が遠ざかるのを見送った。

陽が西に傾き始めてからまだ間もない筈だが、路地裏に射す光はどことなく薄暗く、湿つた空気が漂つている。

「」の辺は立ち入り禁止になつて無いのな

「こっち側は完璧に調べ上げたからな。潰れた車と一緒に、飛ばされた廃材なんかも回収済みだ」

「へえ」

回収したという間にそこかしこに物が散乱している。フレームの曲がった自転車や傘の骨組み、どこからか飛んできたらしのタオル。小奇麗に清掃された表通りの裏側は、こんなにも薄汚れている。何か皮肉めいたモノを感じさせた。

「」らへん調査済ませてあんない、わざわざ調べるまでも無いんじゃねえのか?」

「少し気になる事があつてな

そいつと優輝はポケットから地図を取り出し、印をつけていく。

「なんだ、港までの経路の確認か？」

「それはもう済んでこる。問題は飛んできた物とその箇所なんだ・・・」

・

地図を見ながら何やらぶつぶつとつぶやいている。俺はその後ろを黙つてついていく。時折立ち止まって地図にペンを走らせ、また歩き出す。俺はその後ろを黙つてついていく。これの繰り返しだった。

「おー優輝」

「・・・ん、どうした。何か見つけたか」

「さつきから何地図と睨めっこしてンのか理由を聞かせろってンだ。俺は散歩しに来たワケじや無え」

「いつの悪い癖だ。何か一つ気になる事があると、それ以外が疎かになる。

「すまない。説明してなかつたな」

俺に地図を手渡すと、今までの順路を指で示していく。

「スタート地点はここだ。ここから裏路地に入つて、リリードミニ箱

が飛んできた。そしてここでガラスが降ってきて、右に曲がった

犯人の妨害によって進めなくなつた道にはバツ印が描かれ、それぞれ飛んできた物が書きこまれている。

「ここからはしばらく真っ直ぐだな。そして大きな通りの手前で左に曲がった」

「次に立ち止まつてから右、そのまま道なりに走つて……ここで右だ」

指を追いつひに、俺はある事に気づいた。

「でけえ通りに出そうになると、毎回道塞がれてンな

「一度大きな通りに出てしまえば攻撃も難しくなるだろ？。逃げ道も大量にある」

道順をなぞる優輝の指は地図から離れ、前方を指差す。

「最後に、ここを真つ直ぐだ」

ジョニーと優輝が犯人と接触した地点、鬼ごっことのゴールとなつた港。大した証拠も見つからず、ここまで歩いてきてしまったようだ。コンテナの撤去作業はまだ続いており、重機が軋みを上げながら働いている。

「昨日のはコンテナ運搬中の事故つて事になつてんだっけか？」

「ああ。能力者の暴走による事件や事故は、住民にとって不安材料

になるからな」

能力者はその力の大小問わず、発現した時点で一度病院へ搬送。そこから公的機関の検査を受けおおまかな能力を判定し、国の管理する能力者リストに登録される。能力者による犯罪が起きた場合の迅速な対処のためらしい。

ただし、発現した事を隠したまま生きているようなヤツも極々稀に居る。

「災害レベルの能力者が野放しになつてゐる事など、普通は有り得ないのだがな」

「まあ、国の信用に関わるし上も隠すのに必死なんだろ」

「そつといえはひよこはだつした。隊舎からこじこまでよつも、こじから繁華街のルートのほつが距離が短いはずだが」

周囲を見回すがひよこの姿は無い。どつせサボつて煙草でも吸つているんだろう。

『もしもーし。一人とも聞こえますかー』

タイミングを見計らつていたかのよつて、インカムから間延びした声が聞こえてくる。

「テメエまた仕事ほつたらかして遊ンでんじやねえだらうな

『ちやんとやつてゐて。そつちはだつなのよ』

「こいつちは証拠になる物は無かつたが、犯人の意図が大体わかつたぞ」

「オイ聞いて無いぞ。どういうこいつた」

優輝は再び地図を広げ、説明を始めた。

「ヤス、これを見て本当に何も気づかないか」

地図に目を落とす。

車を降りて右手の路地へ進入。

十字路。左からゴミ箱、前からガラス片。右へ。
直進。路地のガラスが降るが走り抜けて回避。

十字路。大通りにぶつかるが、前の通りからコンクリートブロック、
右からガラス片。左へ。

直進。路地の木材が倒れるが前方に走つて回避。

十字路。前方から左の通りにかけて鉄筋が道を塞ぐ。右へ。
左曲がりの緩やかなカーブを描く道。特に何もなし。

三叉路。大通りにぶつかるが、前方上部から梯子が落下。右へ。

十字路。右から崩れた塀の一部、前方から鉄筋。左へ。
しばらく直進。港へ。

以上がジョニーと優輝の通つた道順だ。

優輝が呟いていた言葉を思い返す。問題は飛んできた物と、その箇所。

13時50分。都内刑務所応接室。

「・・・今何と仰いましたか？」

聞こえていなかつたわけではない。目の前の女性の言つた言葉があまりにも予想とかけ離れていたため、つい聞き返してしまつ。

「ですから、囚人番号1255番は釈放されていません。一週間程前に北海道の刑務所に移送されました」

何でしたら、「自分で」確認を、と資料を渡される。

「・・・3月4日に府中刑務所から網走監獄に移送・・・」

だったら、ヤスや優輝達の前に現れた井上仁は何なんだ・・・!?

「・・・向こうの刑務所から、移送完了の報告は受けているんですか?」

「はい。当時の看守長が確認しています」

「当時の、とは?」

女性は眼鏡を外し、胸ポケットへと仕舞つた。

「看守長は移送手続きを終えた直後、事故で亡くなられました

「

車に戻ると、直毅がシートを倒して仰向けて煙草をふかしている。

「で、どうだつたよ」

僕は直毅に応接室で聞いたことを話した。

「・・・看守長のほかに看守も一人亡くなってる。轢き逃げらし
いね」

轢き逃げ犯の車は事件前に借りられていたレンタカーで、数km先
の路上に放置されているのが見つかっている。

「その言い方だと犯人が見つかってねえみたいじゃねえか」

「・・・見つかっていないんだよ。犯人の証拠は指紋はあるか、髪の
毛一本すら発見されてないらしい」

「借りたハナから犯罪に使う気だつたってわけかよ。レンタカー借
りた奴は引っ張つてねえのか」

「・・・そのあたりは今聞くといひ。車出して」

直毅はシートを起こし、キーを回した。その間に携帯を操作し、夜
見川さんに電話をかける。

「・・・もしもしみかさん？武信です

『おーびつた？飲みに行くこはまだ早いよ~』

向ひつも木戸の件で鬼のよびきだりつが、そんなときでもおじかてみせる夜見川さんに少し安心する。

「少し調べて欲しい」とがあるんです。3月4日の事件について」

『3月4日ね・・・はいはい。最近は事件が多いから』

電話の向ひつからキー ボードを叩く音が聞こえてくる。

「看守2名の轢き逃げについてです」

打鍵音が止まる。

『先に謝っておくね。もしかしたら答えられないかもしねな』

「・・・何故ですか？」

『公安が絡んでるんだよ。ホラ、あの入達ちょっと複雑な連中だから』

キーボードの音に混じつた乾いた笑いと共にそう告げられた。

「・・・せっぱり、井上仁の関連事件は公安が捜査してるんですね

『よく知つてるねー。なんか色々あるじゃよ~』

「・・・答えられる範囲でいいんです。轢き逃げに使われたレンタ

カーを借りた人物について、お聞かせ願えますか

『はいよー』

返事の後にしばらく間が開き、いつの間にかけられていたカーステレオから流れるギターソロが耳についた。

『・・・仏さんの名前は田中吉郎。死亡推定時刻は3月3日、午後6時40分。東京湾の埠頭に停泊してゐる漁船の持ち主が男性が浮いてゐるのを発見して通報。死因は溺死。睡眠薬らしき薬物反応も出てゐる』

頭の奥がぴりぴりと痺れていくを感じる。井上仁の移送手続き。看守轢き逃げ。男性の水死。これらは間違いなく関連付けられる。

「・・・井上仁の移送については、何か聞いていますか」

『知つてるよ。その様子だと詳細は知つてているかと思つたんだけど

『移送手続きがあつたのは本当なんだ。ただ、どうやら何かの手違いで移送途中に井上が逃げ出したらしいね』

手違ひが起こつたにも関わらず、移送完了の手続きが出来るはずがない。耳鳴りがしてきた。ずれでいる。それも完璧に。

「・・・みかさん。井上仁の脱走の背景には何があるんですか」

『それを今公安が追つてるわけよ。ひとつも色々調べてはいるんだけど』

「くそがつ・・・!・!・!・!

左にハンドルを切られた車が急ブレーキに耐えられず、がたがたと音を立ててエンジンを停止させる。

・・・直毅、突然どうし

言い終わる前に、直毅の判断が功を奏したことを身もって知った。息を切らし、ハンドルにもたれかかった直毅が何か言葉を発している。

۱

それを聞き取ることが出来ない。

耳鳴りがひとし
超音波のよくなそれかやかで頭痛へと姿を変え
僕の思考を遮り、意識を絶つた。

3月16日。13時30分。港。

「十字路がおかしいな。殺すだけならわざわざ一箇所だけ抜け道を用意する必要が無い」

「付け足すと、途中の分岐の何箇所かは袋小路になっている。しかしそちら側には進ませなかつた」

『俺地図とか見えないから何もわからんのだけビ』

「行き止まりに誘い込みや一発だかんな」

「全力疾走させた状態で危機的状況に追い込む事により咄嗟の判断を要求させ、ご丁寧に作られた抜け道を進ませるよう計算されていの」

要するに。

「俺が電話しなくても、港に誘導されるようになつてんのか

「やうだ。道なりに進んでいる時に前を塞がれることも無かつた。全て走つていいだけで避けられたからな」

『聞いてますか』

「つまり犯人は、はじめから俺達を港に誘い込むつもりだったと言つことだ」

『ちよいと待ひなさいお一方』

いつものようにひよこが会話を遮つた。

『ショッパンの車潰されたのはなんなのよ。あれそのまま乗つてたら即死じゃないん?』

確かに車の残骸を見た限りでは、殺すつもりで放つた一撃のようと思える。

『違う。あれはジョニーが車から降りたから直撃したんだ』

ドアの鍵を開け、シートベルトを外し、車から飛び出すまでの僅かな時間。アクセルは踏み込まれていない。

「あの速度を維持したままで、本来瓦礫がぶつかるはずだったのは後部座席より後ろになる」

『そのまま乗つてたとしても、ジョニーは死なかつたって事?』

「恐らくはな。そして瓦礫に潰された車は走行不可になり、嫌でも車から降りなければならなくなる」

「なるほどね。本題は港についてからの会話つてわけか

港での犯人の質問。優輝から聞かされたところによれば、私達は脚本家という人物を探している。居場所を教える。それだけ聞くと、犯人は仁を追つて逃走したらしい。

『そっちの話はもう済みましたかい？俺も報告あつて連絡したんだけどさ』

「そうだったな。ひよこ、今どこだ？」

『繁華街だけど』

「完璧に調べるとは言つたが、時間をかけすぎではないか」

『時間掛けて調べる価値があつたわけよー。見つけたよ、犯人の逃走経路』

13時40分。繁華街裏路地。

ひよこに車で迎えに来させた俺達は、近くのコインパーキングに車を停め、仁と犯人が消えた繁華街へと向かった。

「で、犯人はどうから逃げたってンだ」

「此方でござります」

ひよこに案内された先は、仁が消えた地点から少し先の路地。

「仁の先に逃げたという事か？」

「ちが一つ。犯人はここで別の経路を使って逃げたんだ」

「どうやつてだ。この先は繁華街にぶつかるし、両側ビルだぞ」

左側の壁には窓の代わりに排気口が顔を覗かせ、その横には壁沿いのくぼみにでかい金属製のゴミ箱が置かれているだけだ。上に登るか地面でも掘らない限りは・・・。

ふと、ゴミ箱の置かれている場所に目をやる。ビルとビルの間に路地に多少はみ出して設置されたストックカータイプのゴミ箱。その背後には結構な高さの壁があり、自力でよじ登るには少々難儀しそうだ。

「俺も最初はそこから反対の路地に回ったと思つたんだけどねー。あ、ちょっとそこじでいて」

ゴミ箱を調べていた俺を手で押しのけると、ひよこはゴミ箱を手前に引っ張り出す。

「仁の構造少しおかしいつしょ？ビルと壁が、まるでゴミ箱を避けるみたいに建つててさ。最初からここにゴミ箱置くような位置取りだよねー」

その実、ビルはゴミ箱を避けていたわけでは無い事を、ゴミ箱の下にあったそれが告げていた。

「マンホールか

「随分前に閉鎖されたみたいだけねー」

「ミニ箱を端へとどかし終えたひよこは、ポケットからペーパーラルケスを取り出した。

「これ、蓋に挟まつてたんだわ」

中身は何かの纖維が数本。犯人は事件当日、白いコードを羽織つていた筈だ。

「それじゃあ中調べようぜー」

おもむろに水道へ入ろうとするひよこを制止する。

「んだよ、まだ何かあるかもしれないやん

「それをするのは俺達じゃ無い。警察の皆々様方に任せときやうだよ」

「えー、折角ライトとか長靴とか色々用意してたのに

「お前、まさかそれを用意するのに時間食つてたんじゃないだろうな」

怪訝そうな顔を浮かべる優輝に、

「やつだけ?」

悪びれる様子も無く答えるひよー。

「馬鹿者。まず見つけた時点で真っ先に俺等に連絡、そしてビールケースを向こうに渡してくるのが筋だろ?」「ひよー

「たまには遊んだっていいじゃないつすかー。そうだ、ジョニーに連絡しといてね。俺はこれ渡してくるからさ」

ビールケースを持つ手をひらひらさせつつ、ひよーは繁華街の方へと消えた。

「あいつまだ連絡入れて無かつたンか・・・

「ふざけていられる状況じゃ無いんだがな

優輝はインカムに指を当て、ジョニーへと繋ぐ。

「繁華街裏路地にて犯人の衣服から剥離したと思われる纖維を発見した。今鑑識に・・・」

背筋に悪寒が走る。何か漠然とした不安が全身を抜けていく。階段を踏み外した時のような、屋上から飛び降りる人影が見えた時のような、駅のホームで後ろから突き飛ばされるような。

「ん、ジョニーに繋がらんぞ。故障でも・・・」

言葉の後半部は、頭の芯から響くような耳鳴りに搔き消される。平衡感覚すら失いかねない程の耳鳴りに、俺は堪らず両耳を押さえ、

壁に身を預けた。

「糞、また耳鳴りか！？ヤス！！」

以前も似たようなことが何度かあった。そして耳鳴りの後には、決まって良くない事が起きる。前総理大臣の時も、俺の時もそうだった。

「おいヤス！大丈夫か！？」

肩を揺すられるが一向に良くなる気配は無い。この音は聞いてはいけないと、身体が拒否反応を示している。自分の意思とは関係なく、意識が遠のいていく。

視界の端に人影が見えた。立ち膝をついた状態で固まっている。此方に背を向けた女。その黒髪は腰まで伸びていた。

不意に女の輪郭がぼやけ、テレビの砂嵐のようなノイズが走る。ノイズは視界全体に現れているわけでは無いようで、周囲の景色はそのままなのに、女の周りだけ砂嵐が発生している。女はゆっくり立ち上がるが、立ち上がっている最中にも砂嵐は身体を浸食し続け、輪郭がはつきりしなくなっている。

完全に立ち上がった女らしき物は、砂嵐と共にひよこの向かつた路地へと歩き出す。もはや元が何だったのかわからない砂嵐の塊は、路地を曲がる前に俺の視界から消えた。

「幻覚か・・・？」

「おいヤス！しつかりしろ！！」

このままだと頬を張られるので、優輝の手を左手で止めた。

「荒治療過ぎンだよバカ。それで治るワケ無えだろ」

「目が虚ろだつたんだ。それより耳鳴りは大丈夫なのか?」

『気がつくと頭痛のような耳鳴りは止んでいる。それに伴い周囲の喧騒も戻つてくるはずなのだが、寧ろさつきよりも静かになっているような気さえする。』

『二人とも大丈夫!?今なんかすゞい耳鳴りしたんだけど』

「俺は大した事は無い。ヤスが少々ふらついてるが、ヤス、大丈夫か?」

「いい。自分で歩ける」

肩を貸そつとする優輝を制止し、壁から身体を起こす。

『こいつも結構やばいレベルだったからさ。これ周りの人とか聞こえて・・・』

ひよこの声が詰まる。

「どうした?」

『うつち戻ってきて。早く』

その声色にいつものふざけた様子は一切感じ取れない。ただならぬ

雰囲気を察した俺達は、ひよこに言われるまま繁華街へと戻った。

14時3分。繁華街。

繁華街から裏路地への入り口で、ひよこが立ちつくしている。それに並ぶ形で前に出た俺達は、ひよこに問うまでも無く異変に気づいた。

「人が、居ない・・・？」

正面の大通り、そこから続く道、左右の交差点。どこにも人の姿は見受けられない。

「オイオイビうなつてンだ」りや

俺が繁華街へと進もうとすると、

「出るな」

ひよこに襟首を掴まれ引き戻された。

「痛つてえな何すんだよ」

「見てわからんの？この間にここの人通りが途絶えるなんて有り

得ないだろ

「それと俺を引き止めたのとなンの関係が」

「危ねーかも知れねえだろうが。ちょっと待つてる」

襟首を掴んだまま目を閉じるひよー。

「・・・人が居ないのはここを中心とした半径100メートルくらいの道路。建物の中には人も居るっぽいね。危ない連中とかでは無いみたい」

「なら離して貰つていいか。若干首絞まつてんだが」

「あ、悪い悪い」

「・・・妙だな」

優輝が首を傾げる。

「携帯の電波は通ってるみたいなんだが、ジョニーと武信に電話が繋がらない。インカムも不通になつている」

どうやら話しが中になつていてるらしく、携帯からは断続的な電子音が漏れていた。

「なんだろうねこれ。耳鳴りがしたと思つたら急に人が居なくなつた

「ひよー」

わつかのひよーの言葉に妙な引っ掛けを感じていた。

「さつき女を見なかつたか？耳鳴りしてゐる最中に裏路地に居て、そつちの方に歩いてつたんだが」

「いや、見てないねー。どんな感じの人？」

「服装とかは覚えて無えんだが、腰くらいまで伸びた黒髪の女だ。蹲つてたソイツが立ちあがつて、この路地に歩いてつたように見えたんだが」

ひよこは考へるよつた素振りを見せたが、やがて首を横に振つた。

「さすがに俺の横通り過ぎたりしたら絶対わかるはずなんだけどなー」

「優輝は？」

「俺も見ていないな」

「そつか・・・いや悪イ、忘れてくれ。多分耳鳴りで頭やられてたんだ」

幻覚といつ事にしておく。万が一幽靈とかだったら怖いからな。

「で、この状況は何なんだひよー」

「いやー俺に聞かれてもねー・・・耳鳴りする前はこじらへん人通り多かつたし、さつきのが原因だとは思うけど。気になるのは、建物の中には人が居るのに誰も出てこないって事」

「ひとまず様子を見に行くが」

俺達は大通りに出ると、隊舎方面へと歩き出した。

よく目を凝らすと、かなり遠くで人が歩いているのが見える。こち側に向かって歩いてくる人は居らず、皆通りと垂直に歩いているようだ。

「誰もこのあるたりに入つてこないねー」

通りに面した喫茶店。その中には談笑する若者やノートパソコンを操作するサラリーマンの姿が見受けられる。

「それだけじゃない。そここの喫茶店の連中も、あそここのコンビニで立ち読みしてゐる連中も、誰もこっちを見ていない」

一人くらい外を見るヤツも居そうなものだが、どういうわけかこのあたり一帯の建物内部に居るヤツ等は窓の外に目を向けていなかつた。

「・・・ほんとこ、どうなつてんだよこれ」

交差点まで歩いてきたが、人影一つ見えない。ここだけ世界から切り取られてしまつたかのような錯覚を覚える。

「人払いだよ」

路地裏からの声。それと同時に、この通りで初めてとなる人影が姿を現した。男は俺達と正対すると、こちら側へと歩き出す。

「一般人を指定した範囲から遠ざける暗示のようなものだ。主に能力者を判別する手段として用いられる」

「わざわざ捕まりに出てくるなんて殊勝な心掛けじゃねェか、井上

「仁

『Aブロックにて対象を発見。繁華街のコンビニ裏に潜伏中です。如何致しますか』

「他のブロックの奴等を向かわせた。四方を囲んで追い込みをかける」

「上からは生きて身体を回収しうつて指示が出てる。出来るだけ簡単に済ませたいが、抵抗するよつなら撃て」

『了解しました』

「で、Aの三人とDの二人の素性は割れたか」

『何れもデータベースに登録されていませんが、装備から察するに武警の連中です』

「面倒だな。連中が対象と接触する前に」

『もう手遅れです』

「携帯が不通だつたものでな。直接出向かせて貰つたよ

「まあ、お陰で探す手間が省けたつてもンだ。オラ、両手出せ

「せ

「俺は指先でぐるぐると手錠を回す。

「好きにするとい

「両腕を揃えて俺の前に差し出す」。流石に面を食いつてしまつ。

「どういづ風の吹きまわしだ

「手錠がかかつていても話は出来るだういづへ。」

「コイツがまだ父親だつた頃の様に薄く笑つてい

「チツ・・・テメエを外交官襲撃事件の重要参考人として拘束する

ひとまず逃げられなによつとしておく必要がある。少なくとも、外
との連絡が取れるまでは。

「「あん、お久しぶりです」

「優輝君か。しばらく見ない間に立派になつたな

「挨拶は後でやれ優輝。」といつ連れ出すぞ

「仁を後ろから小突き、俺達は道を引き返す。

「で、なんでわざわざ俺等の前に出てきた。また何か面倒事に巻き込むつもりじゃねェだろ？」「

「巻き込んだつもりは無い。私は保明の友達が助かる道を示しただけだ」「

「偉そうに。死ぬワケでも無いのに余計な」

「死んでいたよ」

「俺の言葉を遮り、こちらを見据える」。

「保明が優輝君を見つけながら優輝君は潰されていたし、保明が彼に電話をしなかつたら、彼も死んでいた」

確信めいた発言。そんな根拠が何処に在ると言つのか。

「三秒後、横の喫茶店のウエイトレスがスープをこぼす」

三者一斉に左側の喫茶店へと目を向ける。今まさにテーブルに置かれようとしている皿が、床へと落下していた。

ウエイトレスは慌てふためき、客に謝ると大急ぎで厨房へと引っ込んだしまった。

「つまるところ、私には未来が見えるんだ」

「なんだそれ、バカげてる」

人間本当に呆れると、思わず笑つてしまつ。今の俺のようだ。

未来がわかるといつのは、この世界全ての生き物の動き、川の流れ、風の向きやその他諸々。本当の意味での全てを把握する必要がある。そしてそれらを頭の中で処理する能力は、人間には備わっていない。単なる先読みとはワケが違う。

「だつたらなンだ。オマエは神様か？」

「未来を見るのにそんな大量の情報も処理能力も必要無いんだよ、保明」

諭すような口調の仁に、墓地で感じたような薄ら寒さを覚えた。

「保明のように複雑な計算の工程が無いんだ。漠然と未来の出来事が頭に浮かんでくる」

「ただ、未来視と言つても大分制約があるらしい。まず、私自身に関わる部分しか見えない。更に、ごく最近の出来事しか見る事が出来ないんだ」

「そのチカラで俺等を助けましたってか。目的を言えよ、ただの人が好してワケじや無エだろ?」

「この手で助けられる命があるならば、助けたいと思うのは不思議ではないだろ?」

「その言葉をオマエが言つるのは説得力ゼロだ。なりどつしてあの時・。
・。

「ヤスビでしたー？怖い顔してるけども」

「なんでもねえよ

感情が顔に出てたらしい。どうせコイツに事情を話したとしても、肯定が得られると思つちゃいない。

そういうえば、と優輝が言葉を区切り、

「先程人払いと仰っていましたが、この現象について何か心当たりがお有りですか？」

優輝がえらく畏まつた話し方で質問を投げかけた。

「能力研究の応用だろ？。優輝君は能力者がどの様にして対象を操つたり、幻覚を見せたりするか知つているか？」

「脳の命令系統に外部から干渉して、一時的に支配下に置くんだろ？」

仕組み自体は1割もわかつていないうらしげ、直毅や木戸のようなタイプは何らかの手段で相手の脳に干渉し、行動に影響を及ぼす。

木戸は声を発して直接命令するわかりやすいタイプだ。

「よく覚えているな保明

コイツは捕まる以前、母さんと同じく能力研究の分野で一定の成果を挙げていた。この知識も母さんの論文から丸パクリだ。

「私の研究は、能力者が扱う催眠に近い信号を解析し、それを科学的に再現する事だった。この人払いはそれを発展させた物だらう」

「人間を操れると？」

「完全にでは無いようだがな。恐らくは「」の辺り一帯から離れるよう信号を発しているのだろう」

意識を向けさせないようにしているわけか。

「私が研究していた段階では未完成だったが、誰かが引き継いで完成させたのか・・・」

「世間話はいいんだよ。どうすりゃ元に戻んだ」

「放つておけばそのうち効果も薄れるだらう。あまり長時間使うと、影響が出るからな」

「影響？」

「いや、とにかく効果範囲から出る方が早いだらう」

「あの人通りが多いところが境界線っぽいねー」

ひょこが指差す先は普通に人が歩いている。「」から結構な距離があるようで、歩くのが一気に面倒になる。今日一日歩いてばかりだ。

「・・・待て、みんな一旦止まれ」

優輝に停止を促され、その場で固まる一同。

「仁さん。その人払いの信号というのは、万人に効果があるんですねか？」

「少なくとも一般人には一定の効果がある筈だ。例外もあるが」

「例外というのは？」

優輝が緊張の面持ちで正面を見据えている。

「君達のような能力者には効果が薄れる。あとは信号が出されるのを予め知っている者」

「なら、あいつ等はそのどちらかか」

視線の先には黒いトラックが1台。ヘルメットを被った運転席と助手席の男がこちらの様子を伺っていた。

「ひよこ、あいつらは何だ」

「あいよー。・・・人数は六人。警察車両みたいだねー。結構な重装備みたいだけど、なーんかおかしいね」

こちらが気づくと同時に、トラックの連中がぞろぞろと降車する。

「警視庁特殊犯捜査係だ。井上仁はある重大な犯罪に関与している可能性が強いため、一時的にこちらで身柄を預かる」

「S.I.Tが何の用だ。この人払いはお前達の仕業か？」

優輝がかなり強気に出ている。

「特秘密事項だ。君達の上司にも話が通っている、仁を「ひかり」に引き渡せ」

「その様な話は聞いていないな」

「ヤス

ひよこが小声で耳打ちしてきた。

「あいつらヒューマンじゃない。持つてゐる装備が全員違つ

ひよこが言つには、大半の連中が大型のリボルバーとスタンガンを携行してくるらしい。

「少なくとも警察じゃない。どうする?」

「念のために見ておくが、イザつて時には頼む」

「あいよ

「貴方方の任務内容に興味は無いが、搜索令状くらいは出せるだろう」

「全て特秘密事項だ。仁を引き渡せ」

「話にならんな

優輝が溜息をついてから、膠着状態が続いた。

『彼等に引き渡す意思は無いようですね』

「俺が着くまで引き伸ばせないか?」

『不可能です。こちらは姿を晒してしまっていまーすし、人払いももう持ちません』

「面倒事は極力避けたかったんだがなあ・・・」

『如何致しますか』

SITもどうがどう動くかわからない以上、一瞬たりとも気が抜けない。

「・・・わかつた」

先に動いたのは優輝だつた。仁の手錠を外すと、連中の方へと歩かせる。

「
ヤス」

「わかってる」

正面を見据えたまま、相手の出方を伺う。一步、また一步と仁が歩いていく。連中まで後三歩の距離で、未来に動きがあった。
仁が腹部をナイフで刺される。こっちが銃を構えるよりも先に動かれ、俺達は撃たれて連中は逃げる。いわゆる詰みだ。

「チツ」

尤も、それは5秒後の話だ。わかつてゐるならいくらでも対処できる。ベレッタを取り出し、連中に狙いを定める。狙うのは防護の薄い手先と足。

「貴様何をつぶつぶ！」

相手は6人。俺の射撃技術では間に合わない。

「ひよこオーーーー！」

「右お願ひ」

最低限の言葉だけ口にすると、田の前の武装した連中が次々に倒れていく。

「逃げンぞーーー！」

「一や二、三五七！」

這いつくばつて呻いてる連中に背を向け、俺達は交差点へと下がる。

「何なンだアイツ等！俺等が誰だかわかつて無Hらしげ」

「知らんけど、それなりに場数踏んでる奴等だねー。展開が速いよ

「問題なのはあいつ等が誰かではなく、「さんが狙われてる事だ。ひよー」、どこに向かえばいい」

「・・・どこの道も塞がれてる。強行突破しか無いねー」

「いや、まだ手はある」

先程から沈黙していた仁が、裏路地へと走り始めた。

「君達が見つけた下水道があつただろ？。あそこから抜けるしかな
い」

「殺されやつになつたつてのに随分余裕そうじやねえかオイ」

「・・・すまない、巻き込みたくはなかつたのだが」

「イツへの追求は逃げ延びてからでも遅くない。」

「よし行くわ」

「仁を先に下さりやつとする優輝をひよこが呼び止める。

「ライアーナ真つ暗だよ。丁度三本あるし」

「オマエの分はどうすんだよ」

「腰のと腰づく。」

「やつへじよ」を余所にて、俺達はまじよ」を下りていく。

「あーあーあー、地味なやられ方しあがる。手足やらけや使えねえだらづが」

「申し訳・・・ない。傷の手当を・・・」

「後の」とまことにすんな。お前等の犠牲のお陰で、罪の無い奴等が

何人か助かる

「なつ・・・・・！」

「人払いを範囲拡大して掛け直せ。五分でいい」

『ですが、それでは影響が・・・』

「[...]に第四分隊の死体が六つある。詳しく聞きたいか？」

『・・・いいえ。人払いの延長を要請しました』

「それでいい」

『対象は連中と共に下水道へと向かつたようです。[...]指示を』

「第一、第二分隊は下水に降りて捜索しろ。俺等は地上から先回りする。あと[...]いつ等処理しとけ」

『下水道内部では位置情報に若干のラグが発生しますが』

「構わん。[...]ちにはアレがある」

『了解致しました』

男は通信を終えると、乗ってきたセダンの座席に腰を沈める。

「無抵抗の人間殺すってのはどうもね、楽しくて困る」

サングラスから覗く瞳は狂気に彩られ、口元から左耳のピアスへと伸びるチーンが口を開く度にじゅうじゅうと音を立てる。

「人払いの範囲内で片付ける。俺達は万一のために嬢ちゃん迎えに行くぞ。車任せ」

「了解」

「逃げられると思うなよ、井上仁」

14時20分。下水道。

下水道は太いパイプをいくつも繋ぎ合させたような構造をしており、パイプ内部の両端に入一人が通れるだけの通路が設置されていて、その間を汚水が流れている。

「水中直接歩くような構造じゃなくて助かったわー」

ひよこが後ろで安息の表情を浮かべている。どうしてしき全身に臭いがつきそうだが。

「思つたより広Hのな」

「浄水場の近くだからな。あとひよこ、この水の中を歩くことになるかもしれん。覚悟しておけよ」

先頭を走る優輝が地面をライトで照らしながら駆く。

「えー。じつこうといつて橋とか架けられてるんじゃないの? そこ通りたいんだけど」

「危機感が無Eのかオマエは。追われてんだぞ」

「それでも嫌なものは嫌でしょー。これちょっと進んでから地上に出ちゃ駄目なん?」

「駄目だ。相手が武装していて、なおかつ発砲していく可能性がある以上、民間人を巻き込む危険がある」

ちなみに優輝の後ろに「」、俺、最後尾にひよことこう並び順だ。某龍討伐のRPGを連想させる。

「ひよこ、連中の動きはどうなつてる」

「まだ上でタムロつてるみたいだし、しばらくは真っ直ぐ行つてて大丈夫。ライト消した方がよくなつたら言つわ」

「ああ。とにかく奴等を撒くまでは・・・」

優輝が走る速度を緩めた。

「おい、どうした」

またしても、耳鳴りが俺達を襲つ。さつきよりはひどくなかったが、それでも走る速度は落とさざるを得ない。

「糞が、なんだよさつきから」

「人払いだ。あれの範囲内に居ると、効果の効かない対象には少なからず影響が出る」

「それが耳鳴りの正体という訳か・・・」

携帯は相変わらず不通、インカムも使い物にならない。

「範囲から出ない事にほじつてもならないか」

「上の奴等が降りてきたっぽい。急いだほうがあれやでー」

「よし、行くぞ」

俺等は時に走り、時に道を変え、時に息を潜め、追っ手に存在を気取られないように進んでいく。

途中何度かジョニーへ通信を試みたが、相変わらず繋がらない。まだ範囲からは出でていようだ。

「預言者さんよお。今回はジョニーの時みたいに逃げ道示してくれねーのか?」

「今は覗えていない

「都合のいい能力だなオイ」

「私が生きている間の事しかわからないものでな。君達が助けてくれなかつたら、私はあの時確実に死んでいた」

「仁さん」

優輝が前を照らしたまま問いかける。

「貴方が俺達に入ってきたのは、恐らく自ら事件に巻き込まれる

「ことによつて、俺達を助けようとしたからだ。貴方が関わつていなければ未来は見えませんからね」

「そして貴方はあくまで直接介入することは無く、ヤスを使って俺達を助けた。何故ですか？」

仁は答えない。

「さつきの連中があなたを襲うことも知つていた筈だ。なのに、どうしてそれを教えてくれなかつたんですか？」

4人分の足音が、狭い下水道の中に響いている。

「事象には、過程と結論がある。私が知るのは結果だけで、私がいくら過程を変えようと、結果は変わらないんだ」

「それで俺を使つたワケか？」

「そうだ。私が直接手を加えず、他者に委ねる事で初めて未来が変わる」

「それを聞いて確信しました」

ひよこの指示で、右へと進路を変えた。

「貴方は、あの場で死ぬつもりだつたのか」

足音は次第に小さくなり、やがて完全に消えた。

「・・・刑務所を出てからの一一日間で、私に出来る事は全てやり終えた。だから」

「あとは死ぬだけか?」

優輝が仁の胸倉を掴み擧げる。

「ふざけるな。お前が捕まつてから、ヤスがどんな思いをしてきたか考えた事はあるのか」

「優輝、それ今聞かなくてもいいんじゃ」

「黙つてろ。ヤスが聞かないなら俺が代わりに聞いてやる」

「どいでスイッチが入ったのか、優輝は全く聞く耳を持たない。ひよこに田を向けるが、どうやら追っ手はまだ問題ないらしい。」

「ヤスがあんたを恨んでるのはな、家族が死んだからじゃない。あんたが本当の事を言わないまま、ヤスの前から消えたからだ」

優輝、もうこい。

「ヤスが覚えていないわけ無いだろ。誰よりも近くで見ていたのに、その事実が捻じ曲がつたんだから」

もういいんだ。

「仁さん、あんたはあの時、誰も

「

「優輝！……！」

気がつくと叫んでいた。そこから先は、俺が聞かなきやならない。だから今は何も考えず、この状況を切り抜ける事だけ考えよつ。

「……すみません、こんな時に」

優輝が手を離し、深く頭を下げた。

「いやほんと時と場所考えてよマジで。追っ手に気づかれたからね？」「いつも来てるからね？」

ひよこがあたふたしながら早口でまくし立てる。

「すまない。ひよこ、次はどちらに向かえばいい

優輝が俺に恨めしい視線を送っている。

「左。しばらく真っ直ぐ進むよー」

15分程逃げ回つただろうか。相変わらず追っ手側にアクションは無く、着かず離れずの距離を保つているようだ。

「なーんで撒けないんだろ。もうライト消して随分経つのに

先頭を走るひよこが首を傾げているようだ。

『……もし？もしも優輝君？』

「やつと繋がったか。ジョニー、仁を確保した。それと井上仁の引渡しを要求してきた連中に襲撃を受けた。何か知っているか」

『いや、僕の方では何も聞いていないけど』

やはり連中は独断で動いてるらしい。そもそもS.E.Tの服装だけ真似て接触を試みてくるような奴等がまともとは思えなかつた。

『場所はどこ？随分と音が反響してるけど』

「今下水道を通つて移動中だ。まだ地上に出られそうも無い」

『了解。発信源を辿つて迎えに・・・』

「それだ」

ひよこが勢い良く振り向く。

「優輝、地下へ入つてからジョニーに通信した？」

「ああ、五回ほど試みたが」

「その電波を拾われて追跡されてるのかも。ほーら来た」

後ろから迫つていた足音の群れが、左からも聞こえてくる。増援のようだ。

「ジョニー、通信を切る。安全が確保でき次第また連絡する」

『無事でね』

通信を切り、俺達はひよこの先導で早足に前へと進む。

『第三分隊を下水道へ向かわせました』

「そのまま追い込め。第五分隊は・・・」

「いい」

「都立病院の裏だ。到着後に待機、指示を待て」

「第六分隊はそのまま地上を走らせる。こっちから直接指示を出す

『了解致しました』

『絶好調じゃねえかお嬢ちゃん。そういうの千里眼つーんだっけ?』

「違う。私は物が人より見えるだけ。千里眼っていうのは・・・

「あー悪い悪い説明が欲しいわけじゃねえから。まあなんにせよ、向こうがこっちの出方を伺ってる以上、こっちの勝ちだ」「

「せつもいかないかも」

「どうした?」

「今降ろした人たち全員伏せさせて。今すぐ」

14時40分。下水道。

「どうしてだ。どうして先回つたれてる……?」

ひよーいが細かく進路を変えながら狼狽している。

「さつきから同じ場所を回らされていいなか?」

「わかつてゐる。いつしないと追い詰められる。でもなんぞ距離を詰めてこない……?」

「ひよーい、まだ上には逃げれねえンか」

「少し前に連中の乗つた車が一台、俺達の動きを読んでるみたいに動いてる。出られない」

「ならどうすんだ」

「それを今考てる。なんでだよ、なんていきなり動きが変わった。
・・・」

明かりを消している以上、俺達はひよこに着いて行くしかない。しばらく歩くと、見覚えの無い十字路に出た。

「ひよこ、さっちに進む」

「まずい、囮まれた。前で待ち伏せる」

「よいよもつて切迫した状況だ。このままひよこに留まれば、間違なく袋のネズミだ。」

「電波を拾われたんじゃなくて、もっと別の何かか・・・?」

「強行突破しか無いか」

優輝がベレッタを取り出したようだ。

「やうこりとかよ」

ひよこは何かに気づいたようで、優輝に傲いガバメントを取り出す。

「優輝、前に銃向けて」

即座に銃を構える優輝。ひよこは向かつて左手の通路に銃を向けている。

「もう銃下ろしていいよ。今から全力で前に走るから、合図したら一斉にライトを前に向けて照らして」

「前にも連中が居るんじゃ無いのか」

「居るからやるんだよ。前にいるのは二人、幸い持つてるのは拳銃だけみたい。射撃判断は優輝に任せると。俺じゃ正確に撃てない」

「了解した」

ひよこは優輝からライトを受け取ると、口角を吊り上げた。

「さて、行くよー・・・」

仁と優輝が配置を入れ替え、俺達は駆け出した。

「優輝！――」

ひよこの声と同時に、一斉にライトを前方へと照射する。照らした先には、腕で顔を覆っているマヌケが3人。

「馬鹿がよお！降りてきたのは早計だったなオラア――」

ひよこが右端の男を蹴り飛ばし、優輝が残り一人の腕を撃ちぬいた。

「はいダッシュダッシュショ―優輝はジョニーに連絡―」

「ジヨーー聞こえるか」

『聞いてる。今どのあたりだい?』

「ひよー、今俺達は何処にいる」

「ショッピングモールの近くだけじ、まだもつ少し先まで行くよ。
靈園で回収頼んだ」

「だそうだ。聞こえていたか?」

『了解。3課を向かわせるね』

「ああそうだ、サイレン回してね。あと出来るだけパトカーを多く
寄越して」

『わかった。気を抜かないよしね』

「パトカー出してどうすんだよ」

「牽制。連中もわざわざ捕まつには来ないでしょ?それと、もう一
つ意味があるわけよ」

『第六分隊が落ちました』

「クソッ！……どうして待ち伏せがばれた！！」

『如何致しますか』

「残りでケツから追え！俺が回りこんで直接押さえる」

「だめ。下がらせないとまずい」

「好機だぞ！？まだ警察も動いてねえんだ」

「もう遅いよ。パトカーがあっちに向かってる」

新山の携帯に着信に入る。

「はい、いらっしゃる新山……本当にですか！？……はい。はい、すぐ
に向かいます」

「公安が仁確保の情報を掴んだ。全部隊を下がらせろ」

『了解致しました』

「チツ、車回せ。嬢ちゃん送つたら俺も現場に向かう」

「残念だったね」

「うひせえ黙れ。俺は今気が立つてゐる」

「クソが・・・殺して良けりやすぐにでもやれたっての」・・・

「相手が普通の人達ならつまくこってたよ。どうして教えてくれなかつたの?」

「何を」

「相手に、私と同じ能力を持つた人が居ること」

15時。靈園前。

「おつけーい。上がつて来ていいよー」

地上に上がつた俺達を出迎えたのは、春先の軟らかい西田と、赤い光の群れ。

「随分と大層な出迎えじゃねエか」

「いいのいいの。このくらい派手にやつてくれた方が向こうも動きづらいだろうし」

「(レ)は・・・随分と走り回つたものだな」

仁が自嘲的な笑みを浮かべている。

「ジョニー、3課及び警察と合流した」

『お疲れ様。少し前に夜見川君から連絡があつたんだけど』

無線を搔き消すよつなかつつのブレー キ音。一つは田ベンツ、もう一つは見慣れた車のものだ。

「・・・」「やん」

「何なんだよマジよ。氣失つて叩き起しかられたと思つたらお前の送迎頼まれるじよな」

顔色のあまり良くない武信と、窓に肘をついて煙草をふかしている直毅。

ベンツからは、スーツを着込んだ2人組が降りてきた。その両方の顔に見覚えがある。

「警視庁公安特務課の佐伯です。井上仁の身柄は一時的にこちらが預かります」

ベンツに乗っていた片方の大柄な女がそんなことを口走る。

「特務課？聞いたことが無いな」

優輝が佐伯と向かい合ひ形になる。ヒールを履いている事を抜きにしてもかなり背が高く、190近い優輝と田の高さがほぼ同じだ。

「昨今の能力者犯罪に対応する部署として最近、”公に”設置されたんですよ。貴方達とは違つてね。ニコースとか見ない人ですか？」

佐伯の後ろに隠れるよつて頭だけ出して、挑発的な言動を選ぶよつに発する男。

「日枝、挑発的な言動は慎みなさい」

「すみません」

田枝と呼ばれた小柄な男は佐伯に注意されると、その影に隠れるようになつくりと頭を引っ込めた。

「とにかく、彼をこちらに渡して頂けませんか？」

「信用ならんな。」こつちは一度、正体の知れない連中に襲われかけている。襲撃を指示した者がお前達の中に居ないとも限らない

「完全に疑心暗鬼ですね。子供のわがままと変わりありません」

「日枝」

「すいませえん」

『今日は彼女の言つ事に従つてくれ。上からの通達で、仁の身柄は一時警察が預かり、後に刑務所に戻されるそうだ』

「刑務所?どういう事だ」

「・・・仁さんの釈放は手違いだつたみたいだよ」

武信が訥然としない様子で口を開く。

「そういう事です。貴方達が巻き込まれた事件の関連性についても色々と聞かなければならぬようですが、

佐伯は仁に手錠をはめると、ベンツへと歩き出す。
遠のいていく背中を眺めながら、俺達は仁が車に乗り込むのを見届けた。

「オイ待て。一つだけ聞かせろ」

後部座席の窓が開けられ、運転席のシートを眺めていた仁がこちらを向く。

「オマエは」

今を逃すと恐らくもう聞く機会がない。

「オマエはあの時、何人殺した」

ずっと聞く事が出来なかつた。出来たとしても、以前なら答えてはくれなかつた筈だ。俺だけがずっと蚊帳の外で、コイツの世界は廻つていた。

今は違う。何も知らない、何の力も無い昔の俺じゃない。もしこの期に及んでまだ嘘をつくな、俺もオマエもここでお終いだ。

「私は」

仁は顔を伏せると、再び座席に視線を戻した。

「私は生涯、誰も殺してはいない」

case · 08 end

真っ赤だった。壁も、天井も、椅子もテーブルもソファもテレビも絨毯も何もかもが全部全部。

テーブルには脳漿を撒き散らして突つ伏している母親と、その足元に転がっている兄らしき血と肉の塊。

俺は開け放たれた窓の外。庭先の深い暗闇の中に立ち、その光景を啞然と眺めている。

ここで思い出す。この場面でいつも思い出すという事を、思い出す。背中に硬い何かが押し付けられる感触。血と火薬の匂い。

「お帰り、井上保明君」

そして背後からの声。ソイツの続ける言葉の先も、もう何遍も聞いている。

「悪いけど、辻褄合わせで死んで貰えるかな」

これが、あの日の全てだった。

「旅行？」

「そうだ。たまには羽を伸ばさないとな

ソファに腰掛け麦茶を飲んでいる父。

普段から何を考えてるかわからない人だったが、今度こそ本当に突拍子も無い。

「母さんも徳明ももう休みを取ったからな。あとは保明だけだ」

俺の知らない間に勝手に話が進んでいたらしい。

「今日でテストも終わりだし大丈夫だろうけど……」

旅行の計画があるなら前もって知らせておいてほしかった。

「まあ、休みが取れなくても無理やり連れて行くけどな」

兄貴が年甲斐も無く子供のような笑顔を浮かべる。

「浮かれてんなよバカ兄貴。こいつの時だけはやる気出しあがる」

「んだとおー？俺だつてなんだかんだ仕事してんだぞー！？」

「ほらほら喧嘩しないの。保明ももう出ないと学校遅れるわよ？」

時計を見ると、既に8時を回っていた。走らないと始業のチャイムに間に合わなくなそうだ。

「やつべ、行つきますー！」

俺はソファから立ち上がり、一歩散に玄関へと向かつ。

「保明ー カバンはいらぬのー？」

「いらぬえ。ペンだけあればテストは乗り切れる

部屋に戻る時間すら惜しい。速攻で靴を履き、俺は家を飛び出した。
心なしか足取りが軽い。今思えば、俺も浮かれてたんだと思つ。
旅行なんて、何年ぶりだろうか。

息も絶え絶えに教室に辿りつくと同時に、予鈴が鳴った。

「ヤースー。珍しく寝坊？」

武信が一や二やしながら寄つてくる。「一度いい。

「武信、ペン貸せ」

「いいけど・・・荷物どうしたの？」

「あア？ テスト受けの時に教科書もノートもいらねえだろ？ が

「随分と余裕だね。ほら」

鉛筆を一本手渡される。欲を言つとシャーペンが良かつたが、選り好みできる立場ではない。

武信に礼を言つて席に着くと、プリントを抱えた教師が入ってきて生徒に着席を促した。1限目は確か数学だ。

5限目の終了を知らせるチャイムが鳴り響き、3日間に渡る長い戦いは終わりを告げた。

しかし、僕らの戦いはこれで終わりではない。来週にはテストが返却され、教室は再び阿鼻叫喚の地獄絵図へと変わるであろう。

「果たして僕らは生き残る事ができるのかーっ！…！」

「さつきから耳元で喧しいんだよ」

「いたつ」

いつの間にか近くでナレーションを始めていた美月の頭にチョップをかます。

「何すんのよ」

「「うわーちの台詞だ。こきなりなンだよ」

「テストどりだったのかなーって思つて」

「テスト?」

あんなものは日々の授業をしっかり聞いてノートをとつていれば、割は余裕で取れる。いちいち勉強してないだの翻つてないだの喚く奴等はもう少し授業態度を改めるべきだ。

「うわーガリ勉君の発想」

「うわーせえ、オマエはどりだつたんだよ」

「まあ余裕?みーたーいーなー?」

やたら語尾を上ずらせた自信満々な態度がハナにつく。

「やつこつんは俺より学年順位上げてから言ふバカ」

「ぐつ・・・何も言ひ返せん・・・」

勝ち誇つていたかと思えば急に落ち込んだり、忙しいヤツだな。

「これ武信に返しといってくれねえか。どうせこの後会うんだろ

自分の席に戻るつとする美月に鉛筆を投げて寄越す。

「ん、いいけど。もつ帰るの？」

「残つてもやる事無えしな。帰つて寝る」

席から立ち上がり、廊下に出る。水道の窓から射す夕陽が乱反射し、電気の点いていない廊下に光を運んでいく。

「もうだ、やつち吾」

振り返ると、鞄を腕に引っ掛けた美月が反対側の入り口から顔を出した。

「妙なあだ名付けんな。どうした」

「最近このあたりで不審者つかつてゐるから、『氣をつけてね』

「ああ？ そんなもの返り討ちだ」

「・・・ほんとこ、『氣をつけてね。それじや』

美月は踵を返すと、肩で切りそろえた髪を靡かせて階段へと歩いていった。

日も落ちかけた午後7時前。玄関の戸を開けようとして、鞄に鍵を入れっぱなしだったことに気づいた。インターホンを鳴らすが、中の反応は無い。まだ出かけているんだろうか。

試しに兄貴の携帯にかけてみる。呼び出し音と同時に、どこからかデフォルトの着信音が鳴り響く。

「ンだよ。いるじゃねえか」

着信音は居間から聞こえてくるようすで、庭に回ると確かに灯りが点いていた。カーテンを閉めるどころか、窓すら全開になっている。

「無用心すぎンだろ・・・ただいま。呼び鈴鳴らしてンだからさつれど玉て・・・・・・」

虫の声さえ聞こえない程の静寂。その中で無機質なコール音だけが鳴り響いていた。

居間には、母親と兄貴が血を流して倒れていた。2人とも身じろぎ一つもせず、まるで死んでいるかのような様相だった。

「どうなつてんだよ、母さん！兄貴！…」

「起きるヤス、着いたぞ」

右側から聞こえる声に返そうとするが、意識がはつきりとしない。

「・・・糞が、気分悪い」

今の夢を出来るだけ記憶するよう努めたが、その大半は頭痛と吐き気に飲み込まれる。

「また例の夢か？」

「みたいだな」

サイドブレーキを引き、車から降りる優輝。

「何か思い出せそうか？」

施錠している優輝を尻目に、一足先に石段へと足をかけた。靈園に足繁く通うというのもなんだか気味が悪いが、向こうがここを指定したのだから仕方が無い。

「いやア、進展ナシだな」

「難儀するな」

大した段数の無い石段を登りきると、街中へと吹きあらす風が俺達を出迎えた。薄着をするにはまだ少し早いようだ。

「そりでも無い。このあたりで待つて貰えるか」

石段すぐ正面の小さな鳥居の前に優輝を残し、右へ曲がる。ここから2区画先の「テカイ木を左に曲がった所。そこに面する筈だ。

「よオ」

警官2人に挟まれ、両手の皺を合わせて田を瞑る「」声を掛ける。

「シャバの空氣はどうだったよ」

「普通だ。何も変わりはしない」

「そりかい。そこ警官一人、先に車回してくんねえか。コイツに話がある」

「しかし、自分達は被疑者から田を離すなど」

「見てた事にしどきやいいだろ？が。5分でいい、早く行け」

警官は互いに田配せし、

「・・・了解しました」

鳥居の方へと歩いていった。

「どうした保明、まだ私に聞くことがあるのか?」

「ああ」

「取調べは先日全て終わつたと聞かされたが」

「アンタが出所してからのはな。心配すンな、個人的な話だ」

俺はシガーケースを取り出し煙草に火をつけた。

「吸うか?向こうじや一日一本らしいじやねえか。拷問だな」

「遠慮しよう。保明ももう煙草を吸う年になつたか」

「アンタが捕まる前から隠れて吸つてたぞ。兄貴もな」

「なつ・・・」

珍しく驚いた表情を見せる仁を横田に、シガーケースをそのまま墓に供える。

「ガキなンでどいつも同じだ。でかくなるにつれて、隠し事も増えるもンさ。アンタだつてそうだろ?」

仁は何も言わず、ただただ俺の瞳に真意を探るような目線を送つていた。俺は吸殻を安っぽい携帯灰皿に仕舞い、その視線に応じる。

「聞かせて貰おうか。あの日の事も、アンタが捕まつた理由も。全部な」

「何から、話したものか・・・」

仁はコートのポケットに両手を突っ込み、小さく溜息をついた。
相変わらず北風は休む事無く吹き続け、柔らかな日差しが寒さを幾分か和らげている。

「そオだな。本題に入る前に、まず立体駐車場で起こったワケわかなねえ現象についてだ」

「保明が優輝君を助け、犯人に向けて発砲。しかし発砲した弾が自分に命中した。それだけだな」

さらりと流されそうになつたが、この話をここで終わらせるわけにはいかない。

「あア？どう考へても説明つかねえ部分があんだろ？が。その仕組みを教えるつて話だ」

「ある程度の説明は出来るが、恐らく理解出来ないと思ひついで

「構わねえ。知ってる事全部話せ」「

「保明は今朝、何を食べた？」

毎回話の飛躍が凄まじいヤツだ。意味の無い質問のよつて思えたが、

関連があると信じて真面目に答えることである。

「残りモンの唐揚げだ」

「それをどうやって食べた。箸か？フォークか？」

「箸だな」

「何個食べたんだ？」

「そこまでは覚えちゃいねえ。10個も無かつた筈だ」

「さうか」

「ああ

そこで会話は途切れた。葉の擦れる音がえらく耳に障る。

「・・・バカにしてんのか？」

「大真面目だ。つまり保明は今朝、箸を使って唐揚げを食べた。具体的な数は覚えていないが、10個程度食べてきたわけだな」

「だからどうしたよ

「それが保明の負傷した理由と一緒になんだ。これら二つの事実は現在において過去であり、既に確定した事象だ。絶対に覆らない。そして未来とは未確定だからこそ未来なのであって、未来が既に確定している場合、それは過去と同義だ」

「つまり俺が怪我するって事が、あの時点で決まっていたって言っていたのか」「ううだ

言葉も無い。

「本来なら、保明は犯人の銃弾を受けて倒れる筈だった。それがどういうわけか、保明はその弾を全て避けてしまった。これでは保明が銃弾を受け倒れるという結果が変わってしまう」

「それで俺の撃つた弾を一時的に消して、矛盾の出ねえように再び出現させて俺の足と腹にブチ込んだってワケか」

「理解が早くて助かる」

「これっぽっちも理解しちゃいねえよ。おかしいだろ？」「

「弾が消えたことがそんなに納得いかないか？この世界には説明できないエラーのような事象がいくつもある。乗客を乗せた飛行機が空で忽然と消えたり、アメリカの消磁実験もそうだな。それらについて、保明は納得のいく答えを出せるのか？」

思わず歯噛みする。

「今回の事象はそれらのケースの一つに過ぎない。私達の知らない場所で、じつこじつとは頻繁に起じているんだ」

「仮にも科学者だったヤツがンな事認めていいのかよ」

「科学が発展するにつれて、納得出来ない事も増えていくものだ」

煙に撒かれているような気がしてならないが、これ以上追求しても時間の無駄だ。

「俺が怪我するとわかつていても、わざわざここに来て助言したのかよ」

「ああ」

「あの時も、母さんと兄貴が殺される」と、知つてたのか

「・・・保明、お前は何処まで覚えている

「どこのまでって、何の話だよ」

腹の探り合いでする前に、一握りの手の内は見透かされているようだ。

「保明が入院していた病院で医師から話を伺った。PTSDを患っているそうだな」

「なんでテメエが俺の話を聞けんだよ」

「手段などいくらもある。今回は保明が籍を抜いていなかつたのが手助けになつたな」

「チツ・・・」

完全にぬかつた。こんな事態をそもそも想定していなかつたワケだが、書類だ何だと面倒な手続きを避け続けたのが裏目に出ていた。

「確かに俺はあの日の事をよく覚えちゃいねえ。俺が発現したのもあの時らしいが、それすら曖昧なんだ」

「・・・本当に、すまないと思つていい」

「俺が欲しいのは謝罪じゃ無事くらいわかんってる。俺が欲しいのは」

「知つてどうする」

風が止んだ。

「お前が事件を覚えていないのは、お前が忘れたいと望んだからだ。そこに信じたくない現実があつたからだ。それを二度と思い出さないよつに、わざわざ自分で頭の奥に閉じ込めた」

「無意識に自分が護つて来た物を、保明は自分で壊すと言つのか?」

「・・・嫌なんだ」

「アンタは母さんも兄貴も、誰も殺しちゃいねえ。それだけは覚えてんだ」

「でも”現実”は違った。アンタは罪を認めて殺人犯のレッテル貼られて、俺はその息子として世間様から同情の目で見られンだ。俺ン中ではアンタも俺も被害者だった。だけど世間はアンタを加害者だと言つて聞かねえ」

「俺の見てきた物全部否定されたンだよ。もう何も信じられなくなつちまッてなあ。終いには俺ですら、本当はアンタが殺したんじゃねえかつて疑いはじめた。そう信じじることで俺の平静が保てンならそれでもいいつて思つてた」

「でも実際はどうだよ。久々に逢つてみたら俺の心配はする、俺等の事は助ける。”この手で助けられる命があるなら助けたいと思うのは不思議じやない”だと?ふざけンな

「俺がどれだけ振り回されたと、思つてんだ。テメエは・・・」

息が切れ、足元がふらつく。頭がしめつけられるような痛みを発している。

「保明・・・」

「いい。自分で立てる」

肩膝をついた俺を起しそうとする手を拒む。

「わからなくなつたンだ。アンタが殺人犯なのか、俺の父親なのか

「曖昧なままなのが、嫌なンだよ・・・」

「　　当時、私達はある研究をしていた」

2年もの間閉ざされていた口が、ようやく開く。

「精神干渉型能力者の能力構造の解明、及びその再現だ。その研究には結構な人数が動員されてな。それに私と母さん、徳明も参加した」

「私達は再現する側に回された。保明が以前話していた母さんの論文を元にしてな」

「結果としては成功した。能力者の精神干渉モデルとはかけ離れていたが、それに近い結果を出せるものを作り出す事が出来た」

「それが例の人払いってヤツか?」

「いや、もつとたちが悪い物だ。指定した範囲内の人間一人ひとりに自らの意思と関係なく、外部からの命令を実行させる装置。すなわち」

「・・・集団洗脳装置か」

「そうだ。小規模ではあったが、ある程度複雑な命令でも実行させることができた」

「それが発展していけばどうなつていたか、想像に難くないだろ?。人間を生き人形に作り変える装置など、倫理に反する」

「私達のグループも人としての道は踏み外せなかつた。会議の結果、その装置は完成せずに研究は白紙、装置は基礎から全て破棄という筋書きになつた」

「尤も、人の口に戸は立てられないものでな。その装置が完成したという噂が別の研究チームへも伝わつていたようだ。思えばその時点で形振り構わず破棄しておけば、違つ結果になつていたかもしないな」

「破棄する当日、動作履歴を確認したんだ。見覚えの無いものが一件追加されていた。日付は装置破棄当日の朝。実行日は本日午後18時30分となつていた。命令内容は・・・」

「装置開発に直接関わつた者の殺害、及び事実の隠蔽だつた」

「家に電話を入れたときにはもつ手遅れだつたよ。あの時ほど自分の行いを悔いた事は無い」

「それでアンタが家に着くよりも先に、俺が帰つて来ちまつたわけか」

「ああ」

「だとすると、どうしてアンタは生きてる。真ッ先に狙われるじゃねえか」

「これを持っていたからだらうな」

仁は「コードのポケットを漁り、見慣れない規格のディスクを取り出した。

「それは？」

「M〇〇ディスクだ。装置の核となる重要な情報を予め抜いておいた。具体的には装置の座標・範囲指定の拡大と、複雑な命令を与えるためには必要なソースコードをな

「その結果、被害は井上家一世帯のみで、なおかつ犠牲も最小限に。
・
・」

「最小限だと？」

「自分の家族が殺されてンだぞ！？それで最小限だッてか！？ふざけんじゃねえ！！！！！」

「・・・何とでも言つてくれ。私には言い返す資格が無い」

「クソガツ・・・！？」

「私達全員がこうなることは覚悟していた。しかし、自らの研究に殺される事になろうとはな」

「それで、母さん達を襲つた奴は誰なんだ」

「私の研究チームの一人だつた男だ。彼も母さん達とほぼ同時刻、拳銃で自殺している」

「あの場に駆けつけた時、既に母さんも徳明も事切れていた。そこに私が近づいた事で、彼の”射程”に入つたんだ。それを私に引け付けて、そのまま自宅から離れた」

「その引き付けた先で、アンタを殺すより先に自分で頭を撃ちぬいたってワケか」

「私にもそのあたりはわからない。ソースコードを抜き出した事も筒抜けだったのか、あるいは抜き出しによつて生じたバグなのか」

「そこは問題じゃ無い。どうしてアンタが罪を被つた」

「私達にとつて最も安全に済ませられるからだ。保明は事の真相を知らずに叔母の家に保護され、世間の目にある程度晒されている事を考えても、危険はほぼ無い。私に関しても刑務所に入っている以上、下手に手出しが出来ないからな」

「元は自分の撒いた種だ。無関係の人達を巻き込むわけにもいかなかつた。それが自分の息子ともなれば尚更、な」

仁は再び俺を見据えると、ゆっくりと息を吐いた。

「これがお前に隠していた全てだ。もつ私から話せる事は何も無い」

「気づけば風が寒さと一緒に雪も運んできたようで、空が灰色に塗りつぶされている。一雨来そうだ。」

「保明の記憶の空白は埋まつたか？」

「残念だが足りねエな。ただまあ、なんつーか」

記憶が飛んでいるせいか何やら釈然としないが、思っていたよりも正直に話してくれていたように感じじる。

「悪かった。疑つたりして」

頭を下げる。いつか俺の記憶が完全に戻つたら、もつ一度コイツに謝らないといけないな。

「いやあ悪いなお巡りさん。結構待たせちまつたみたいで」

警官はただ一度頷くと、仁を護送車へと乗せた。

「オイ」

「どうした保明、まだ何かあるのか?」

「仁のMO、本当に中身は空なんのか?」

「後で確認してみる。データは何も残ってはない」

「そろかい」

「今のはだけじゃアンタを出してやる事も出来ねえし、この先も出来るかわからねえ。ただ、出所の時ぐらいは迎えに行つてやるよ」「すまないな」

「いちいち謝ンな。それじゃ達者でな、父さん」

「・・・保明も、元氣でな」

ひとしきり会話を終えると、仁を乗せた青い護送車は坂の向こうへと消えていった。

「親子の蟠りは解けたのか?」

軽く背伸びをする優輝。

「大体はな。聞いてみりや難しいよつて単純なモンだつた」

「とつあえず飯でも行くか。近くにつけまいラーメン屋を見つけたんだ」

「へえ。言ツとくが、俺は味につるせえぞ」

「臨むとこりうだ」

「臨むのはラーメン屋の店主だろオガ」

結局、今日わかったのは二つだけ。一つは、思いのほかラーメンが旨かったという事。

もう一つは、アイツが俺の父親だつて事だ。

033 - 父子のダイアローグ3

3月20日、13時15分。武警隊舎前。

思つたよりも会話にエネルギーを消費していたらしく、ラーメンとライス、餃子一皿を難なく胃袋に収めた俺は、優輝の運転で隊舎へと戻ってきた。

「降りねえのか？」

「繭が制服取りに行くらしいからな。迎えに行つてくれ」

「あああの糞ガキな。元氣してンのか？」

「人の妹捕まえて糞餓鬼は無いだろ？・・・来月成橋高校に入学だ」

「ンだよ俺の後輩になんじやねえか。よろしく言つとこてくれや」

「ああ。それじゃあまた明日な」

「じゃあな」

優輝を見送り、自室へと戻る。

飯を食つたら薄れるとも思ったが、やはり「との会話の違和感が抜

け切らない。

ひとまず顔を洗い、殺風景な部屋の隅に佇むベッドに腰掛ける。

「ああイライラする。何なんだ畜生が」

奥歯に魚の小骨でも引っかかっているかのよつた、なんとも煮え切らない気持ち。

「アーッが丸々嘘吐いてたか・・・いや」

会話そのものを疑うのはナンセンスだ。この違和感の原因は会話そのものじゃなく、そのどこかにおかしい部分があつたからだと思つ。

「話自体に妙な箇所は無かつた筈なんだが」

街中で遭遇した時ですら隠していたことを、あまりにもあつせりと話しきっていた感はあつたが、話の筋は通つてゐる。

俺の家族が襲撃された理由。集団洗脳装置を巡つたいたいわいざ。関わつた人間を全員消してまで手に入れるべき機械。いや、殺されたのは井上家一世帯と言つていたな。

「調べてみるか」

ベッドから立ち上がり、これまた隅に置かれたパソコンの前へと移動する。

「まあ、見つからねえわな」

個人で調べられる範囲では手が届きそうに無い。4課で再び調べる必要があるな。

ふと、一家心中の記事に田が留まる。

「そういうや、殺された事になつてゐる通行人つてのも研究チームの人だつたツけか」

被害者名・三橋要。日財系能力研究所勤務。妻は居らず、俺より5つ下の娘が一人。拳銃により側頭部を撃ち抜かれ即死。使われた拳銃は井上家殺害で使われたものと同一。

日財系能力研究所について調べてみると、事件から3週間後に研究所ごと解体されていた。

作ったモノがモノだけに、利用しようとした企む組織を考え出すとキリが無い。

「チツ、話がデカ過ぎンだよ」

背もたれに体重を預け、腕を弛緩させる。

仮に政府や警察が装置の残骸を回収し隠蔽していたとしたら、それこそ俺の手に負えない。

「警察・・・?」

仁が出所した直後から追い回していた組織。警視庁公安部。

「だつたらなンで易々と解放した」

公安の仁に対する尋問は「こちらにも開示されていたが、一連の事件との関与も否定され、それらしい質問内容も無かつた。強いて挙げるなら人払いに関する事程度か。

あのMOの中身を公安に引き渡す目的だつたなら。いや、それならどうして公安から逃げる必要がある。

アイツが出てきてやつた事といえば、公安から身を隠しつつMの
中身を消去したことと、俺に助言したぐらいで……。

「助言、か……」

”保明が優輝君を見つけなかつたら優輝君は潰されていたし、保明
が彼に電話をしなかつたら、彼も死んでいた”

俺がちよつかいをかけたおかげで優輝は死なずに済んで、ジョニー
も無事だつた。これは恐らく、俺が未確定の未来を変えたという事
だ。

”未来とは未確定だからこそ未来なのであって、未来が既に確定し
ている場合、それは過去と同義だ”

なら、どうして俺はそれを変えられた。仁の視た未来を、どうして
捻じ曲げる事が出来た？
いや、問題はそこではない。ずっと感じていた違和感の正体が浮き
彫りになつてくる。

”本来なら、保明は犯人の銃弾を受けて倒れる筈だった。それがど
ういうわけか、保明はその弾を全て避けてしまつた。これでは保明
が銃弾を受け倒れるという結果が変わつてしまつ”

優輝とジョニーの時は大丈夫で、どうして俺は怪我をした？

”それで俺の撃つた弾を一時的に消して、矛盾の出ねえように再び
出現させて俺の足と腹にブチ込ンだつてワケか”

俺の行動は、何に矛盾した

？

携帯が振動している。放つておいて深く考えたかったが、どうやらジヨニーから電話のようだ。

「あア もしもし? 今忙しいンだが

『ヤス君、落ち着いて聞いて欲しい』

12時50分。護送車内。

井上仁を乗せた護送車は、街へと続く緩やかな坂道をひたすらに下つていく。

当然ながら車中の会話は無く、降り出した雨が乾いてひび割れたアスファルトを濡らしていくように、冷え冷えとした空気が漂つていた。

仁は目を閉じ、ここ2週間の出来事を思い返す。

自分は本当にやり遂げられたのだろうか。やり残しは無かつたどうか。そんな漠然とした不安が車に乗った直後から押し寄せ、仁の思考を侵食していく。

どの道、息子との会話を終えた時点で「は」ホールテープを切つてい
る。「こ」で後悔したところで、今は何も変えられない。暗い感情を
拭するように、仁は冷え切った手で額を拭った。

不意に車のスピードが緩み、徐々に左へと寄つていく。どうやら前
方に誘導灯を持った者が居たようで、護送車はゆっくりと路肩に停
止した。

「ご苦労様です。ここから乗せ換えとなりますので、囚人の移動を
お願ひできますか」

「乗せ換え地点はもう少し先の筈ですが？」

「そちらの到着が遅れているやつだったので上に確認を取つたとこ
ろ、この先の墓地に立ち寄られていると聞きましたので。乗せ換え
地点を変更させていただきました。変更通知が届いているはずです
が？」

「・・・これは失礼しました。変更通知を確認、引継ぎをお願いし
ます」

灰色の日だし帽を被つた男の指揮の元、仁は黒塗りの護送車へと乗
せ換えられた。

「協力ありがとうございます。完了手続きの方はこちらでしておき
ますので」

手際よく乗せ換えた田だし帽の男は警官へ会釈をし、助手席へと乗り込んだ。短いクラクションを合図に、黒い護送車は坂を下り始める。

「やつぱつこいつのつて緊張しますね」

田だし帽の男は苦笑いを浮かべ、手錠の鍵を「へ」と投げて寄越した。「転送していただいたデータの中身は確認できました。MOそのものはございました?」

「フォーマット後、物理的に破壊した。ダニーを保明に渡したよ。そっちも中身はフォーマット済みだ」

「抜かりないようだ」

「君達が来たところとは、まだ私の役目は終わっていないのか?」

「いいえ。貴方にほこの一週間、やるべき事はしっかりやって頂きました。ハンドアウトの方は役に立ちましたか?」

「感謝しているよ。おかげで怪しまれずに済んだ」

「やつぱつこいつ」

男は何が可笑しいのか、終始にこやかに笑っている。

「保明君にまじり説明したんですか？まさか本当の事を話したわけではないですよね？」

「基本的には全て真実を話したよ。核心に触れるような部分はぼかしているが」

「結構な冒険しますね」

『至急至急。警視庁から各局。東京成橋管内』

警察無線らしき音声がノイズとともにカーステレオから流れ出る。

「今頃気づいても手遅れなんですがね・・・」

田だし帽の男は帽子を深く被りなおし、

「いいでまた乗り換えます。すみません慌ただしくて」

一足先に車から半ば飛び出す形で降車した。

護送車が停止した後方に、シルバーのセダンが停められている。田だし帽の男は手早く乗車を済ませると、降りてきた仁をすぐさま助手席へと招き入れた。

「適当に山回つたら例の倉庫に停めといてくれ。それじゃ

護送車の運転手に指示を飛ばすと、護送車は成橋山に面する道路へ、セダンは国道へと発車した。

「喉渴きません? 何か飲み物買つていきましょ'うか」

「そんな悠長なことを言つてはいる場合でも無いのではないか」

「そうですね。あ、喉渴いたら後ろのボリタンクから勝手に飲んじやつていですよ。まあ中身ガソリンなんですけど」

男の冗談に付き合つ様子も無く、仁は会話を再開した。

「これで彼らは助かったのか?」

「貴方のお陰でね。優輝君と保明君はしばらく大丈夫だとは思いますが。ただ彼等ああいう仕事してて、しかも能力者ですから」

「保障しかねる、というわけか・・・」

車は国道から進路を変え、再び成橋山方面へと向かつ。

「しかし意外でした。まさか貴方が保明君に本当のこと話をすんて。てつきつ噓の上塗りをするのかと」

「もうこれ以上、保明に嘘を吐きたくない。私のせいで息子の人生を台無しにしてしまったんだ」

助手席から木々を眺める仁の瞳はどこか虚ろで、もつと遠くを見ているような印象を受ける。

「貴方が保明君に話した事で、彼が眞実に辿り着くかも知れない。

その時は」

「話すや、今度こそ全部な。どちらにせよ、何れ直視しなければならなくなる時が来る」

「わうなると俺も忙しくなるんで、出来れば避けたいですね」

男は再び苦笑した。

「ここの一週間で、向こう側に動きは？」

「これといって特には。ですが気になる事が一つほどあります。両方とも貴方が絡んでいたので知っています。まず一つは、人払いを使用した形跡が見られました。こちらに関しては大方の予測はついていますが」

「私を狙っていた連中だな。恐らくは装置の完成が目的か、あるいは」

「どの道ろくでもない連中に変わりありません。聞いたところ保明君の予測とはいえ、貴方殺されかかったらしいじゃありませんか。要警戒ですね。そしてもう一つ。寧ろこちらの方が警戒すべき事ですが」

「すみません運転下手糞で。それでもう一つと二つのが、ヘルメッ

舗装された道路から砂利道へと入る際、車が軽く跳ねる。

トの女が言つていた内容です」

「”脚本家”か・・・」

男は溜息を吐き、

「『ジ』から洩れたんでしょうね。『ジ』のお陰で武警の一部とその周辺に脚本家というワードが知られました。まだ修正可能ではありますか？」

「円卓の騎士の名を騙つているらしいな」

「まあ、表向きには規模もわからないテロ集団の総称ですから。ですが彼女は少々、目立ちすぎましたね。捜査の攪乱という意味ではいいかもしませんが。彼女に関するも現在調査中です」

車は砂利道を外れ、木々の間を縫うように進む。空を覆う葉の群れが光を遮断し、時間の感覚を薄れさせた。

「その他にもいろいろ障害はあるみたいですが、それ程脅威では無いみたいですね。曖昧な報告ばかりですみませんね。何を使つぱしりですから、俺」

「充分だ。一時的に刑務所から出して貰つただけでも、感謝に余る」

「我々の今後の目的としては、最優先で脚本家の位置を特定すること。次いで人払いの無力化及び解体、あとは木戸さんの解放ですかね。つと、このあたりでいいかな」

男はあたりを確認すると、広場のよくなっている場所に車を停め、

エンジンを切った。

「E/Eに何かあるのか？」

「いいえ、何も」

男は仁の質問を適当にあしらへ、

「お聞かせ願います。今からMのソースを再現した場合、装置は復元できますか？」

「可能だが、かなりの時間が要る。プログラムを一から組むとすれば尚更な」

「具体的には？」

「どれだけ早く見積もっても三ヶ月だな」

「ではもう一つ。ソースコードは何十にも暗号化されているやうですが、その複合方法を知っているのは、貴方だけですか？」

「・・・ああ」

「それを聞いて安心しました。しかしながら

「念には念を入れないといけません。貴方がデータを消去したうえで、Mのものを破壊したようにね」

外気が漏れ出したかのよつた冷たい空気が車内を包む。

「・・・私は、これからどうなるんだ」

「貴方がそれを聞きますか」

男が薄く笑う。

「先程申し上げましたとおり、貴方にはやるべき事を全てやつて頂きました。この意味、わかりますよね？貴方は、井上にはここでおしまいです」

男はマッチを擦り、煙草に火をつけた。

「直火焼きと蒸し焼き、どっちがお好みで？」

『夜11時のニュースをお伝えします。今日午後2時過ぎ、東京都成橋山の山中で乗用車が燃えているのを近くを通りかかつたダム作業員が発見し警察へ通報。運転席に人は居らず、助手席に乗っていた遺体は焼失が激しく、現在警察が身元の特定を急いでいます。続いてのニュースです・・・』

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n5757s/>

R.A.G Rebellion Against God

2012年1月5日21時45分発行